

十一夜物語

寺内美登里
井上有子



十一夜物語

寺内美登里
井上有子

共著



十二夜物語／目次

	序	蒼弓月の夜	九
●	第一夜	鬼神の少女	一九
●	第二夜	剣と燕	三七
●	第三夜	龍の来ない夜	四九
●	第四夜	風の謡うたい	六一
●	第五夜	蝶の記憶	八一
●	第六夜	巫女王伝説	一〇一
●	第七夜	十九の夏	一三七

○ 第八夜 水霧 一五九

○ 第九夜 夢の女 一八七

○ 第十夜 狼の踊り 二〇九

● 第十一夜 生長する影 二四五

結 二六四

筆者後書き
作者紹介
解説

各話担当

寺内美登里

蒼弓月の夜／剣と燕／龍の来ない夜／蝶の記憶

狼の踊り／生長する影／結

井上有子

鬼神の少女／風の謡うたい／巫女王伝説／十九の夏

水霧／夢の女

〈作者からのお願い〉

十一夜物語は各話が独立した短編集ですが、最初から順を追って読むことでより面白く読んでいただけるような構成になっています。

「序」より順に読み進められますことをお奨めします。





序

蒼弓そうきゆう月の夜うつき

昼は灼熱^{しやくねつ}。そして、地平を駆ける風の轟音^{ごうおん}。

それが、夜ともなれば、水底のごとく冷涼な静寂^{れいりょう せいじやく}――

数多の少数民族群が、畜獸^{ちゆうじゆう}をひき連れ遊牧^{ゆうぼく}の営^{いとな}みを続ける、広大な草原。
大地を歩き交うのは、

ちぎれ飛ぶ翼のような雲や、乾いた熱砂風^{ねつさふう}、

刻々と姿を変える陽の影^ひ、

陽炎^{かげろう}、渡り鳥、隊商の列、といったものたち。

そして、生あるものたちの、あまたの記憶、あまたの言葉。

それは、いつとは知れぬ時の彼方より訪れ来る、昔語りか、永劫^{えいこく}の夢か。

それら虚ろな姿のものたちを一足飛びに遠く超え、わたしは駆ける、乾いた大地を。
駆け巡り、舞い上がり、地上の昼と夜を一時に眺める^{なが}。

わたしに名は無い。だが人はわたしを呼ぶ名を欲する。

わたしは在る、

大海へと注ぐ大河の一滴に、

蒼天へと沸きあがる蒸気の一粒に、

風紋を描く無数の砂粒の一点に、

岩の裂け目にはびこる草木の一細胞に、

わたしは、あまねく存在し、

そして決して実在しない。

わたしは満ち足り、しかしながら餓えている。

わたしは、か弱くうち震える、ひとの魂とこそ、

出会い、——交わりたいと欲する。

その夜。

ある少数民族から成る集落は、十七歳の若者アージュヴェダの婚礼の初日を迎え、多数の包ゲル（ゲル＝遊牧民が移動しやすいように簡易に組み立てて作る円形のテント状住宅）が集う集落ごと、しんと静まり返っているかに見えた。

蒼あおく空に架かかる弓のような月が、どこまでも広がる夜の草原に淡い光を投げかけている、そんな夜だった。

十夜後には『影かげの刻こく（皆既月食）』が来る。

それまでに、つつがなく婚礼を済ませなければ、災いが訪れる……

薄闇うすやみのなか、仄かなランプの暖かみを感じながら、アージュヴェダはひとり、じつと耳をすませて待っていた。もうすぐ、彼の花嫁はなよめとなる女が、この新しい小さな包ゲルを、初めて訪れることになっている。

花嫁は、アージュヴェダが属しているのとは別の部族ぶぞくから招かれることになっていた。結婚による部族間の交流は、新しい血を吹き込むために必要なこととして、定期的に行

われる。今回もそうだが、皆既月食かいきげつしょくの日に最終日をあわせて婚礼が行われるのが常だった。そして、それはいつも、多数のきまりごとを伴ともなっていた。

よく晴れた晩で、包ゲルの天窓は布を巻き上げて開けてあった。薄い三日月は幽かな光しか放たず、空を覆おおう無数の星が見えたはずだ。

だが、いまの若者には、星も月も、なにも見えなかった。厚い布で、固く目隠しをされていたのだ。

それは、他部族ほかぶの花嫁はなよめを迎えるための、きまりごとのひとつだった——花婿はなむこは、婚礼をすっかり終えてしまうまで、花嫁はなよめの顔を見てはいけな

若者は、溜息ためいきをひとつこぼし、胡座あぐらを組み直した。

遅いな、これでは朝になってしまふぞ、と、声を出しそうになって、慌あわててのみこんだ。花婿はなむこがことばを発するの

婚礼けしの儀式の間、話してよいのは、花嫁はなよめのほうだけ。しかも、花嫁はなよめは、婚礼の期間中——それは十一夜続くのだが——、毎晩花婿はなむこのもとを訪れ、毎日異なるものがたりを聞かせな

ければならないのだ。

ものがたりは、たいてい、花嫁はなよめが属する部族の伝承でんしやうであつたり、草原を縦横じゆうわうに旅する芸人や楽師がくしの一団、あるいは商人たちから伝え聞いた、遠い異国の物語であつたりした。

遠い昔のものがたりもあれば、ごく最近のことのようなものもあつた。

花嫁はなよめは、そうしたものがたりを、十一の夜にわたつて花婿はなむこに聞かせる。

花婿はなむこは、それを、目隠ししたまま、ただ、聞く。

ことばを発しても、花嫁に触れてもいけない。それは禁忌きんいであり、破れば婚礼はとりやめになる。

また、花嫁はなよめが訪れている間、花婿は眠ることも許されなかった。

眠れば、悪戯いたずらな精霊せいれいに魂を喰くわれてしまうかもしれない。

他部族たふくの娘になりました精霊せいれいが、花嫁はなよめにかわつてものがたりをしにきたことが、遙か昔にあつたと伝えられている。

最後の夜が明けたら、朝の光のなかで、はじめて花婿はなむこは花嫁はなよめの顔を見、ことばをかわし、その腕にだきよせることができる。

それまでは、毎晩、物語を聞き、そして夜明け前に別れる、ということを繰り返し返さなけ

ればならないのだった。

花嫁はなよめとなる女を待ちながら、アージュヴェダは、しかし、孤独いそひであり、退屈たいくつしていた。

孤独こどくは、この若者の常であつた。まだ目も開かぬ赤子のうちに、この村落に捨てられ、彼を拾つた長老ちやうろうのはからいによつて村の女に乳を与えられながらも、ものごころつくかつかぬ頃から独りで暮らしてきた若者にとつて、孤独いそひは皮膚にしみついたように自然なものであつた。

またそれ故、長老ちやうろうは彼に、異部族いぶぞくの娘を迎えさせることにしたのであつた。孤独いそひを知る者だからこそ、異部族いぶぞくから嫁いでくる女の心細さを受け止めてやれる、という考えが、長老ちやうろうの胸のうちにあつたかもしれない。

しかし、アージュヴェダにとつて、会つたこともない、顔も知らぬ女を、ただ待つといふことは、退屈以外のなにものでもなかつた。

幼い頃から、長老ちやうろうに格別に目をかけて貰つていたこともあり、この決められた結婚けっこんに従したがふこと自体に異存はなかつた。

しかし、この禁忌きんいに固められた、しかも十一夜にもわたる婚礼けしきの儀式ぎしきについては、まっ

たく馬鹿げている、と思うことを止められなかった。

(いつそ精霊せいれいでも来てくれたら、めずらしく、退屈たいくつのぎになるというものだ)

胸のうちで、アージュヴェダは、うそぶいた。

喉元のどもへまで昇ってきた欠伸あくびを噛かみ殺していたとき、彼の耳に、馬が砂を踏ふむ音が聞こえてきた。

(来た)

足音は、包ゲルの前で止まり、馬から降りた人が、包ゲルの外に立つ気配がした。

「いれてくださいましな」

女の声がした。

冷たく澄んだ露つゆが、草の上を珠たまになってころがるような、すずやかな美しい声だった。

歳のころは、アージュヴェダと同じくらいか、少し上のように思えた。

アージュヴェダは、顔を上げ、持っていた鈴を鳴らして合図した。

すぐに、包ゲルの扉布とびらのぬのがたくしあげられ、やわらかい、女の気配がはいりこんできた。

アージュヴェダの胸は、不意に高鳴りはじめた。

(さて、顔も知らぬ女の、声を聞いただけでこのように胸おどが躍るとは)

と、彼は己をおかしく思った。

女の気配が、アージュヴェダの正面に座った。

かすかな衣擦れの音と、焚きしめた香の匂い。

嗅いだことのない不思議な香だったが、干し草の香りや、山羊の乳の香りと混じって、どこか懐かしい香りになっていた。

つい寸前までこの空間を支配していた冷たい静寂とは打って変わった、やさしい温かみが狭い包に漲るのを、若者は感じた。

まったく心を動かされなかった、むしろ馬鹿げたことと思っていたはずの婚礼が、途端に、心踊る冒険めいたことのように思えてきた。

「さて、最初のものがたりを聞いてくださりますか」

女が言い、若者は、短く頷ずいた。

婚礼の、最初の夜が、はじまった。

これからはじまる、十一のものがたりは、この儀式で花嫁が話したものがたりを、のちに口伝えに書き留めたものである。



第一夜

鬼神^{きしん}の少女

鬼というものを御存知か？

かの国に存在したあらゆる厄災^{やぐさい}をひきおこす妖^{あやかし}でございます。が、その姿は、今や……

第一夜「鬼神^{きしん}の少女」

目の前には緑豊かな大地がひろがっていた。

暖かな陽^ひの光り、やわらかくふきわたる風、天高く流れる雲、空^{そら}を斬^きりながら飛び交う小鳥達……全てがたおやかな時間の流れの中にあつた。

「ああ、わたしは、もうどのくらいここに根ざし、生きているのだろうか」

樹齡を推し測ることも難しいほどの桃の樹がそこに立っていた。

濃い緑の葉を風にそよがせながら、桃の樹は神々がこの地に生きていたはるか昔のことを思いおこした。

荒^{あら}ぶる神々がまだこの地にはつきりと存在していた時代——光と闇の境目が曖昧^{あいまい}だったその時代、この地を支配する大地の神々は、あらゆる厄災^{やぐさい}を地上にふりまく鬼神^{きしん}一族を追い払うべく戦いをいどんだ。

それは、はてしない時間が苦しみと共に流れるすさまじい戦いであった。

おびただしい血が流され、あぐく鬼神一族は敗れ、地の果てへと追いやられた。

戦いに勝利したとはいえ、大地の神々の受けた痛みも大きかった。

ほとんどの神が力尽き、倒れ、唯一ながらえた一番年若い神ですら、その姿を保つことができないほどの痛みをうけ、その身を「桃の樹」に変えこの地に根ざすこととなったのである。

邪気を封じる桃の実を宿す樹として、鬼神の暗躍を封じる標として、神は、桃の樹として気の遠くなるような時をここですごしてきた。

その戦いを知る者など、もはや誰もいるまい。

ただ、桃の樹の姿となった神の記憶にとどまるのみである。

神々の気配が人の目にうつらなくなり、その存在を人の世がいつしか必要としなくなっても、枝葉を吹きぬける風だけがさらに時を刻み、時代は移ろう。

桃の樹はそれでもそこにたっていた。

桃の樹は年毎に甘い匂いの花を咲かせ、白く美しい実をむすび、みずみずしいその果実は人々を潤し癒し、邪気をはらった。

人々は、桃の樹の本当の姿など知る由もなくそこに集い、この優しげなそして力強くもある桃の樹を愛した。

土地の子どもたちは、いつも太い枝に登り、木蔭こかげにやすらぎ、根元に抱かれ眠り、父のようなこの桃の樹に守られていた。

（このような「在り方」もあるのだ。）

桃の樹となった大地の神は、己おのれの運命うんめいをそのように受け入れるようになった。

更にたくさんの時間が流れた。

ある花の季節、桃の樹は、いつものように樹のまわりで子ども達の遊ぶ姿を微笑ほほえましくながめている内に、一人の少女の存在に気がついた。

色白で、ツンとした薄紅色うすべにいろの唇の印象的な少女は、いつもこちらをうかがうように遠くからみつめていて、決してこちらへは近づこうとはしなかった。

容姿が印象的だけでなく、その少女が放つ雰囲気なぜかしら、桃の樹の心を捉とらえて離さなかった。

（このあたりでは、ついぞ見かけない子だが。）

そんなことが何日も何日も続いたが、決して少女はある距離以上は桃の樹には近づかな

かったのである。

ある時、桃の樹は、あたかも手招きをするように、少女に向かってさやさやと葉をなびかせ音をたてた。

しかし、少女は驚いたように身をひるがえし、あつというまに駆けていつてしまった。

(おやおや……)

桃の樹はゆっくり意識をしまいこみ、吹く風にまどろんだ。

桃の樹のその足元では、かわらずに子ども達が声をあげて、あそんでいた。

その情景は、優しげな一枚の風景画のようでもあった。

件の少女はその後、毎日毎日、桃の樹のことを遠くから見ている。

葉を揺らし、招いても、薄紅色の唇をきゅつと結び、黒い瞳でじつと見据え、決して

桃の樹には近づこうとはしなかった。

少女の態度には、なにか強い意思のようなものが感じられたが、桃の樹は、ただ静かに見守るだけであった。

空がとても高くみえたある日、少女は何故だかいつもより少しだけ桃の樹に近くに来て

いた。

少女の背後からヒュウと大きく風が吹き、長い髪が逆立ってなびいた。

桃の樹の全ての葉が大きく揺れ、枝が幹がおおきくしなり、吹く風の強さに集う子どもたちは驚き騒いだ。

そして空は、またたくまに暗くなり、遠くの雷鳴とともに大粒の雨がおちてきた。

桃の樹の足元で遊んでいた子ども達は我先にとバラバラと家に走りかえり、そしてそこには誰もいなくなった。

強い雨風の音だけが聞こえていた。

しかし少女は、それにさえ気づかないかのようにそこにいた。

雨の中たちつくす少女に、桃の樹はさやささと葉をゆらした。

少女はこくりとうなずき、そして、ゆつくりと桃の樹に歩み寄りその木蔭へはいってきた。

ぬれた髪は額にはりつき、薄紅色の唇は少し震えてたが、桃の樹の豊かな枝葉は少女を雨風から護った。

少女はふっと顔を上げ、微笑み桃の花に触れようと、幹にゆつくりと手を伸ばし、細い指を動かした。

その指が樹の幹に触れたとたん、「ピシッ」という音と青白い火花がはじけた。

幾千もの針のような鋭い痛みが桃の樹と少女の双方を突き刺したのであった。

桃の樹はぎしつと音を立ててきしみ、幹からは、はらはらと樹皮がはがれおちた。

少女も、痛む手を胸に抱きうずくまっていた

「やっぱり……」

少女の小さな小さなつぶやきを桃の樹は聞き漏らさなかった。

「いったいどうしたのだい？ なにかわけがあるんだね？ わたしにきかせておくれ。」

少女の頬をぬらすのは雨なのか、涙なのか桃の樹にはわからなかった。

「あなたと……お話ができるなんて……よかった。」

少女は、わずかに、そして愛らしく微笑んだ。

「あのね、夢みたいなの、とてもいい匂いがしてきたの。そしたら、あなたが花を咲かせてい

たの。仲間の大人達はあの樹には決して近づいてはいけないっていつもいつてただけど

……来てしまったわ。」

少女はまた、ちいさく微笑んだ。

「ほう、近づいてはいけないと？」

すると、少女はいいつけを破ったことが頭をよぎったのか、にわかに落ちつかなくなっていました。

「ええ、ごめんなさい。もう、かえるわ。」

きびすを返して走り去ろうとしたそのとき、稲妻が空を切り裂き走り、すさまじい音が天から真つ逆様に落ちてきた。

「きゃあー」

少女はヒシと桃の樹にしがみついた。

二人の間をまたも、針の痛みがつきさした。

痛みがぼやけるまでには時間がかかったが、桃の樹は少女を根元に、樹に触れぬように腰掛けさせ、気持ちを落ち着かせようとした。

痛みが薄れると少女はまっすぐに桃の樹を見上げ、再び語りだした。

「わたしね、リュウガ、っていのの」

「リュウガ、リュウガか。きれいな名前だね。」

「今は、人間の女の子の姿をしているけれど、もうすぐ、空気に溶けていくのよ。」

リュウガは唇をかみ、うつむいた。

「おどろかないの？ 私は鬼神きしん一族の女の子なのよ」

（鬼神きしん……ああ、その名を最後に聞いたのはいったいいつのことだったか……）

桃の樹はこの少女の放つ気が鬼神きしん一族のそれであるということに、いくばくかは気がついていたのかもしれない。

しかし、このなにやらしれぬ、懐かしさともいえる慕わしさはなんなのであろうか。

「リュウガを最初にみたときから、なんとなくはそんな気がしていたよ。」

桃の樹は複雑な思いにかられていたが、このような淡々とした言葉で語るほかはなかった。

リュウガは不思議そうに桃の樹をみあげた。

「本当は、ずっと前からあなたのことはしっていたの。人間の子たちがいつも足元であそんでいて、きれいな実をおいしそうに食べるのも見ていたわ。ここにくれば、優しさに守られそうな気がして……ずっとここにきたいなあっておもっていたの。でもどうして、大人達は、『近づいちゃいけない、特に空気にとけるまえの大事な時期は……』なんていうのかしら。」

桃の花の甘い匂いがいつそう濃くなった。強い雨風がその匂いの渦をつくりあげる。

桃の樹は、自分の中で、時がゆつくりと遡さかのぼっていくのを感じていた。

「それはね、わたしがリュウガの一族と戦ったものだからさ。もう、ずっとずっと昔の話だがね」

風が桃の樹を吹き抜け大きな音をたてて、大粒の雨は稲妻いなづまを伴い一層激しくなった。

「あなただったの？ 鬼神きしんの一族を打ち負かし、地のはてに追いやった神は……」

リュウガは全くなにも知らずに桃の樹の元にやってきたに違いない。その無邪気さには心がやわらかくなるおもいだった。

「そうだ。そのときから、わたしはここにいる。この身を桃の樹にかえてね。

たくさん大地の神が力尽き、わたしも元の姿を留める力を失ってしまったのだ。

それほどまでも、あの戦いはわたしにとっても大きな痛手だったからね。むろんリュウガの一族にとつてもだが。」

いつのまにかリュウガは桃の樹にもたれて話を聞いていた。

針の痛みは身体にいまだにに残ってはいるものの、それすらも麻痺まひするほどにうつとり花の匂いにひたっているようだった。

降り続く雨がいつそう桃の花の匂いをひきたてる。

「ねえ、鬼神はそんなに悪いことをしていたの？ そんなに悪い一族だったの？」

リュウガは桃の樹を見上げ、桃の樹は無邪気なリュウガの瞳をみつめた。

「そうだね。あのころの、すべての「悪しきこと」は鬼神の仕業だったからね。鬼神の生み出す厄災に人々は大いに苦しんでいたんだよ」

桃の樹は遠い時代の出来事全てをよびおこすべく、記憶を辿りながらリュウガに語りかけた。

「病氣、飢え、諍い、天変地異、あの頃、それらの全ては鬼神が生み出した災いだったからね。」

リュウガの表情がそのとき、凍りつき、瞳は哀しみの色をうかべた。

「いまは、どう？ 災いだなんて……わたしたちにはもう、なんの力もないわ。子どものうちだけは人間の姿でいられるけれど、わたしだつてもうすぐ空気に溶けなくてはならない。そういうきまりなのよ。どうして……」

リュウガは言葉をつまらせた。

「空気に溶けなければならぬ？ それは知らなかった。もう鬼神はそれほどに居場所を

失っていたのだね。確かに、今の君達はなにも災いなどおこしていないだろう。「悪しきこと」の原因など人間達はもう別に見つけてしまっているからね。」

「そうよ。もう、わたしたちのことなんて、誰も気づいたり、思い出したりしないもの。だからって、わたし、空気にとけてしまうなんて……いや、いやよ。かなしいわ。かなしくてずっと泣いていたの。そんなときに、あなたの花の匂いがただよってきたの。甘く優しい香りが……。」

「ところが、わたしが、鬼神一族をそんな風にした張本人だったと。」

桃の樹とリュウガは互いに言葉を交わさず、みつめあい、長い時間が二人の間を過ぎて行った。

それは、いまや敵対するもの同士というのではなく、お互いに遠い記憶をたどりあうような懐かしさにも似た静かな時間だった。

いつしか雨が降り止みあたりに霧がたちこめていた。

リュウガが涙をうかべていった。

「わたし、空気になつたらどこにいつちゃうの？ わたしは、どうなるの？ なにをすれば

いいの？……」

「リュウガ、そんなふうに思いつめてはいけないよ。このわたしだっていつまでここにいられるかわからない。先のことなんてわからない。そういうものなのだから。」

リュウガは立ち上がり樹の幹を抱きしめた。

「あなたはこんなにもみんなから愛されているもの。わたしたちとはちがうわ。」

桃の樹にふれるリュウガの指先にぴりぴりと痛みが伝わってきたが、リュウガは幹に頬ほおを押し当て、そのままでいた。

「あなたはわたしとは違うの。ここで、ずっと、ずうっと、人々を慈いつくしんで守っていける運命うんめいなもの。」

リュウガの吐息といきがあたたかくふきかかり、桃の樹はまた樹皮をはらはら落とした。

リュウガの痛みと自らみずかがこれまで押し隠してきた痛みとが今ここで共鳴するようだった。

「リュウガ、わたしの運命うんめいももう尽きかけているのだよ。」

桃の樹は低い声でいった。

「ごらん、もう、わたしには花をつけることが精一杯なんだ。実を結ぶことはむずかしいだろうね。幹も枝葉もいつ、朽ち果てるかもしれない。」

リュウガはおどろいたように、桃の樹を見上げた。

「朽ち果てるなんて……哀しくならないの？ あなたは」

桃の樹は答えなかった。この地に根ざした神として、自分の運命をうけいれる用意はいつだってあったから。

しかし、この少女にむかつていたい今、どういえばよいというのだろうか。

空気に溶ける運命をもつという儚げな鬼神の少女に。リュウガは桃の樹にすっかり身をあずけて、心の中をゆるやかにほどくように言葉を続けた。

「わたしね、なぜ、自分だけが哀しいのかわからなかったの。ほかの仲間は皆、空気にとけることも平気だったもの。だから誰にも『哀しいの』って言えなかったの。哀しいって気持ちはずっとずっとがまんしていたの……」

リュウガが寂しそうに少し笑った。

「哀しい気持ちって、心の中がシュンって冷たくなるのね。冷たくて痛いくらいに。でも、ここは、あなたの、この場所は……あたたかね。」

リュウガの言葉が涙まじりになり、たちこめる霧に薄い陽光が射し、リュウガの瞳ににじむ涙をやわらかくうつしだした。

「リュウガ、がまんなんかしなくてもいいんだよ。哀しい気持ちすら、自分の一部だと受け止めればいいのだから」

桃の樹はおだやかに、あるいは自らにもいいきかせるようにゆつくりと語った。

「がまんしなくても……いい？……そうなの？　そう、そうかもしれないわね。」

リュウガは自分の中で、今その哀しみが、桃の樹の言葉によって淡雪のように溶けくずれ、形を失うのがみえるような気がした。

にじむような雨上がりの夕陽の光がリュウガの微笑みを映し出した。

それはそのまま、空気に溶けてしまっても不思議ではないような儂くそして美しい笑顔だった。

桃の樹はたそがれの風にさやさやと葉をならした。葉が含んでいた雨の粒が落ちる夕陽の光を反射して無限に零れ落ちた。

あたかも美しい音楽になってリュウガを包むように。

桃の樹の心はこの瞬間、大きく揺さぶられていた。

自分が今このときまで、樹に姿を変えてまでここに在った本当の意味は、この少女の存在を待たためではなかったのだろうか。

そして、その少女が空気にとける運命にあるのなら……

「リュウガ、空気にとけてしまう前にわたしのところへこないか」

「……あなたのところ……つて……」

「わたしと、共に、在る、存在し続ける……ということだよ」

「存在？」

「ああ、一緒に、いる……ということだ」

リュウガはゆっくり桃の樹を見上げ、そして、小さくうなずいた。

自分でもおどろくほど、迷わずに、桃の樹の言葉を受け入れたことに、リュウガは小さく微笑み、目を閉じて、そして、白い腕を樹の幹にまわし、その顔をうずめた。

二人の間には、もはや、痛みはなかった。

あたたかな熱がリュウガを包み、地上でこの空間だけが切り取られたかのように、乳白色の光を放った。

リュウガは透明になり、桃の樹に擁かれ、とけあい、その一部となった。

「ずっと、ずっと、ここにいてもいい？」

「……ああ、リュウガが望むのならね。」

最後の夕陽の光が届くころ、桃の樹は、かつてないほどの甘い匂いになった。

透明な夜気がもうそこまで、近づいてきていて、今や一つになったリュウガとかつての大地の神をゆつくりと藍色につつまこみはじめた。

静かな静かな時間が流れていった。

その年の花の季節が過ぎ桃の樹はたつたひとつ、白い肌に薄い紅の滲む実をむすんだ。人知れず結んだその実は、花よりも芳しく甘い匂いをはなっていた。

季節はめぐり、次の花の季節がきて、桃の樹はもう二度と花を咲かせることも、実を結

ぶこともなかった。

ただ、鮮やかな枝葉だけがさやさやとたゆとうように、風になびき、その姿は、神々しいまでに美しかったという。



女の語り、異国の物語……なにかもがアージュヴェダにとって、はじめての事であった。

（俺はこの女を恋うるようになるのだろうか……）

定まらぬ自分の感情にとまどいながらも、孤独に慣れきっている自分の心のどこかが今宵より、少しずつほどこけていくような、やわらかな予感がしていた。



第二夜

劍と燕つばめ

昨日よりは、ほんの僅かに肉付きをよくした細い月が、東の空に架かっている。

婚礼の二夜目だ。

包の内部を整えていたアージュヴェダに、祭司が外から声をかけた。

「目隠し布をおつけしますじゃ」

「ありがとう」

アージュヴェダは扉を開けて、ゆっくりとした足どりの祭司を招き入れ、されるが

ままに固い目隠しを着けられた。

「では、ご無事をお祈りしていますでな。……爺めは、長老の家に控えております」

声とともに去る祭司に向かつて、アージュヴェダは言った。

「心配ないよ、花嫁は精霊などではない。きつと、とても美しい、そして優しい女性だ」

すると、少し離れたところから、祭司が振り返り、こう答えるのが聞こえた。

「ですから、心配なのですじゃ。禁忌は守ってください。決して花嫁に触れたり、受け答え

してはなりませんぞ」

わかっているよ、と、アージュヴェダは答え、扉布を引いて腰を降ろし、胡座を組んだ。

そして、花嫁を乗せた馬の蹄の音が近付くのを、待った。

第二夜 剣と燕^{つばめ}

燕^{つばめ}は、この春もまた、その国を訪れました。旅の途中でいつも立ち寄るその国……

とても広く、立派なお城とたくさんの家があり、緑ゆたかな美しい国。

だけど、不思議なことに、その国にはずっと以前から、誰も人が住んでいないのです。

一年ぶりに、その国の高い城郭^{じょうかく}を飛び越えて中に入り、とりどりに咲いた花と遊び、木

の実に宿る虫などをついばみながら、街の中心に向かって飛んでいるうち、燕^{つばめ}はいつしか、

立派なお城のすぐそばまで来ていました。高い尖塔^{せんとう}と優雅な回廊^{かいろう}のあるお城でしたが、こ

こにもやはり、兵隊ひとり、家来ひとり姿を見せず、広い中庭には植物がわがもの顔で生

い茂るばかりでした。

燕^{つばめ}は、羽根を休めるため、飾り彫刻で縁取られたバルコニーの、手すりの上にとまりま

した。

そして、中庭を見下ろすうち、寂しいような気持ちがつつとこみあげてきました。

（どうして、この国には誰も人がいないんだろう？ 昔は豊かな国だったみたいだけど、い

まは建物が残るばかりで……。

ああ、そうだ、ほんの二、三回だけだけど、よばよばのおじいさんがひとりきりでいるのを、見かけたことがあったな。今年もまた、会うかしら？

それとも、あのおじいさんもここから出ていったらどうか

思いをめぐらせていると、すぐ自分の後ろで足音がしたので、燕つばめはつとして飛び上がりました。見ると、あのおじいさんが、部屋の奥からそつと姿を現しました。おじいさんは、飛び去ろうとする燕つばめに向かって、ゆるゆると手を伸ばし、言いました。

「ああ、もう行ってしまうのかい、もう少しここに居ておくれ」

おじいさんが喋ったので、燕つばめは驚き、くると円を描いて戻ると、おじいさんのそばの手すりの上に止まりました。おじいさんは、ふうつと溜息ためいきをつきました。

「よかった、逃げないでおくれ。今年も、おまえが来るのを楽しみに待っていたのだから」
じぶんを待ってくれていたと聞いて、燕つばめはこのおじいさんにいろいろ訊ねてみようと思いました。

「おじいさんは、この国の人？ どうして、この国には誰もいないの？ こんなに広くて、豊かな土地なのに、いまは、まるで荒れ放題で」

燕つばめの問いかげに、おじいさんは、顔を曇くもらせましたが、やがて、ゆつくりと話し始めました——この国の物語を。

「昔むかし、この国の領土はもつと狭せまくて、やせた土地ばかりじゃった。領土を広げようと戦争をしても、必ず負け、以前より国はいつそう貧しくなるばかり。

—— 生まれて来る子どもが、この世の誰よりも強く、あらゆる争いに勝つことができますように、と。

王様の願いは叶かなった。生まれてきたのは、たいそう頑健な王子だった。八つの頃にはもう、側近そくきんの兵士と剣の決闘をして負かしていた。そればかりか、王子はやがて成長すると、恐ろしい魔力を秘めていることがわかった。王子は、その身みのうちに剣をもち、吐はく息とともに自在じざいに取り出し操あやつることができたのじゃ。

自みづから軍の先頭に立ち兵をひきつれ、己おのれは丸腰まるこしで戦場に向かい、ひと声ほえるだけで、どんな敵をも倒した。

王子の軍は敗けを知らず、領土はものすごい勢いで広がった。王子の名前は、たいへん

な恐れをもって人々の間に広まった。

国は栄え、周囲の国はすべて従い、あらゆる富がこの城郭じょうかくのなかに集まってきた。

城では毎日のように祝宴しゆくえんが催され、人々の家の樽たるの中にはぶどう酒が尽きることがなかった。

だが、王子の心はうらはらに暗く沈んでゆくのだった。

みずか
自らの戦いによって奪い取った財宝も贅沢ぜいたくな食事も、王子の心を慰めることはなかった。

王子はさらに遠くの国、次の戦いくさに向かうとした。

側近の一人がそれを止めた。もう、国は充分に潤うるわっておりますから、と。

うるさい、と、王子は叫んだ。同時に、王子の口から剣が現れ、側近そくきんの首をはねてしまった。おびえる家来たちを後目しりめに、王子はひとりで戦場に向かい、新たな財宝を持ち帰り、領土を広げて帰った。

もはや、誰も王子に感謝するものはいなかった。だが、王子に逆らえば、すぐさま首をはねられる。家来も国民も、残忍さを増してゆく王子に従したがうしかなかった。

王子は、自分に逆らう者はかたつばしから剣で殺した。

王子は、剣にとり憑つかれていたのだ。

自分に意見をしてくる者を、気に入らないと思っただけで、その喉からは勝手に、生き物のように剣が躍り出た。相手を殺すとまた、何事も無かったかのように、剣は王子の喉の奥に収まっていったのだ。

徐々に、国は荒んでいった。心ある者は王子に意見して倒され、賢い者は山とある財宝を国外に盗み出し、そのまま帰らなかった。

いつしか、王子はひとりになっていった。

周辺の国から『悪魔の国』と呼ばれ恐れられたその国には、やがて誰も住まなくなった。

王子その人をのぞいては、な。

王子は孤独なまま、それから何十年もの歳月を城のなかで過ごしたのじゃ」

燕は、じつと話を聞いていましたが、おじいさんのもの哀しい目を見ると、こう言いました。

「その王子が、あなたなんだね」

おじいさんは、こつくり頷きました。

「いまでは、わたしには話し相手もない。出掛けていっても、みな恐れて逃げるだけだ。こ

うして、ここでひとり老いてゆくほかないのじゃ」

「それは、かわいそうに。父王は、ひどい願いを生まれてくるあなたに掛けたものだね」

燕つばめのことばに、おじいさんは、いつそう暗い顔になりました。その父王も、やがて自分を恐れて止めようとしたため、その喉のどから吐いた剣で殺してしまったということは、言えませんでした。

すると、燕つばめは、いいことを思いついたという風に言いました。

「あなたの体のなかから、剣を取り出してしまえばいいんじゃないかな」

おじいさんは、首を横に振りしました。

「何度もやってみたよ。腕のいい医者や、有名な魔法使いを呼んでな。だが、剣はわしの体の一部なのじゃ。普通のやりかたでは取れない。無理に取ろうとすると、取ろうとした者を切りつけてしまう」

「それは、外から剣を取ろうとするからでしょう？　ぼくなら、あなたの口から体のなかに入れるよ。そして、根元を嚼かみ切つて剣を取ってみよう」

「無理じゃよ。剣を取ることにしたいが、不可能なのじゃ。いいか、わしは、わしが、剣そのもののなのじゃよ」

「やってみなければわからないよ」

「だめじゃ。おまえも死んでしまうぞ」

言いながらおじいさんは、手で口を押さえました。久しぶりに誰かと話したというだけで、喉の奥の剣が外に飛び出そうとむずむずしていることがわかったからです。ただ剣の力は強く、手で押さえても口は勝手に開いてしまいました。

「あっ……」

おじいさんが叫んだのと同時に、開いた口から、燕が体のなかにすべり込みました。体のなかで、激しく暴れる様子がわかり、おじいさんは腹を抱えてうずくまりました。

苦痛の時間が流れ、やがて、身体の中が静かになるのがわかりました。

（やっとできた話し相手を、わしはまた失ってしまったのか……）

おじいさんは、泣きたくなりました。でも、生まれてからいちども泣いたことがないので、どうやって泣けばいいのかもわかりません。

そのうち、体の奥からなにかがこみあげてくるので、おじいさんは、体をふたつに折り曲げるようにして、口を開けました。

すると、口から、真っ赤なルビーのような色の剣が、ずりりと吐き出され、足下に落ちました。

「おお、この赤は、さっきの燕の血なのか」

おじいさんは慌てて、剣を拾おうとしました。が、剣はするするとかたちを失い、血のように地面にしみこんでゆきました。

なにが起こったのでしょうか、剣が出ていった体のなかは、なんだか空っぽで、すべてが無くなってしまったような感じがしました。

そして、体が軽く、軽く、空気のように感じられました。

おじいさんの目は涙でうるんで、すべてがぼうつと滲んで見えました。やがて、滲んだ視界が再びはつきりしてくると、すべてが遥か下の方に、小さく見えていました。

（これは、どうしたことだ）

いままで立っていた、お城のバルコニーも、教会の尖塔も、荒れ果てた畑や森も、領土のすべてを見下ろして、いま、自分は空を飛んでいました。

体は、羽根を持つ小さな燕になっていました。

そのまま城郭を超え、国境を越え、燕は見知らぬ土地に向かってゆきました。

それら見知らぬ土地、見知らぬ国々でも、また別の争い、別の悲しみがあることを、燕は知っていました。だけど、自分にできることは、人々のそばに降りたち、自分の見てきたことをさえずり話すことだけだ、ということも、いまや燕には、わかつていたのです。

物語を聞き終わった時——自分では思っても見なかったことだが——気がついたら、アージュヴェダは涙を流していた。

（泣くような話でもないのに、ただの昔のお伽話ではないか）

そう思い、袖口で乱暴に頬を拭った。

花嫁に対して、恥ずかしい、という思いがよぎった。

（しかし、この女の語ることは、なぜこんなにも鮮明に瞼の裏に像が浮かぶのか。

まるで、母親に寝かしつけられる子どもが夢に描く世界の世界のようではないか。——いや、俺には、母親なぞいないのだから、寝物語を聞かせて貰ったことなどない、はずなのだが

↓

少々混乱しながら、アージュヴェダは、再び袖口で頬を拭い、顔を上げた。
すつ、と、女が立ち上がる気配がした。

「では、また明晩」

そして、女の気配が消え、馬の蹄の音が遠ざかっていった。

（やれやれ。何と思われたものか）

目隠しを取りながら、もう泪跡もない顔を何度も掌で撫であげる、アージュヴェダであつた。



第三夜

ドラゴン
龍の来ない夜

「昨夜も、とどこおりなく儀式が済んだとのこと、なによりですな」

宵闇に満たされた包の中で、祭司がアージュヴェダに目隠しをしながら話しかける。

「ええ、ですが、」

アージュヴェダは少々言いよどみ、

「昨夜は花嫁のものがたりを聞いて泣いてしまったのです」

と、不本意そうな調子で言った。

「ほ、ほ。なにも、泣いてはいかんとまでは、決められとりやせんでしょう」

祭司は可笑しそうにそう言い、訊ねた。

「なにか、おまえさまの心に触れるような、ものがたりでしたかな……」

「いえ。さして他愛もない、昔に異国であったことのような、お伽話でした。妻を娶ろうと

いうような男が泣くものがたりではありません。花嫁には、何と思われたことやら」

「気になさらずとも良いことですじや。ものがたりを聞いて泣くのは、そのものがたりが哀しいからとか、その筋立てが悲しいからという理由ばかりではありませんまいて。ものがたりのどこかに、おまえさまの心や、おまえさまが心の中に覚え持っていることと、触れあう部分があつたのでしょうか。」

まあ、どんな話のどこで泣こうと、どこで笑おうと、それはまったくまったく、ものがたりを聞く側の自由なことじゃ。おまえさまのように、素直な心でひたむきにものがたりを聞くのは、感心このうえないことですじゃ……」

噎^{しやが}れてはいても優しさのこもった祭司^{さいし}の言葉に、アージュヴェダは勇気づけられた。

しかし、祭司^{さいし}が再び出てゆき、包^{ゲル}の中にひとり残されると、再びあれこれ想いを巡らせずにはいられなかった。

（俺の心の中の何かに、昨夜のものがたりが触^{さわ}った、というのか……。だが、今となつては、何が触^{さわ}ったのかもわからない。

あの女の語り調子は、目を閉じて聞いていると、ひとりでに絵が浮かんでしまい、ものがたりの中に連れていかれてしまいそうになる。そうなると俺は、まるで子どもだ。子どものように心を震^{ふる}わせてしまうのだ。話の中に入ってゆき、現世^{げんせ}の自分を見失い、やがて夢の世界にからめとられて、寝付いてしまうような。――

まあ、寝付いてしまわなかっただけでも、ましとするか。だが、今夜も涙を見られてしまふはめになったら、やはり恥^{はづ}かしいな……）

第三夜 ドラゴン 龍の来ない夜

龍（ドラゴン）。

それが娘の名前だった。

力、富、幸運の守護神しゅごしんとされる龍を名に持つその娘は、しかし、その名とは正反対の、瘦やせこけて貧相ひんそうな、不器量ふきりょうな娘で、町外れの機織はたおり工場で働く両手はいつもひび割れていた。

そして、その左手首には、赤いリボンをくると巻いたかのように見える、奇妙な痣あざがあった。

その痣あざは、もとより孤独いそなその娘を、ますます人々から遠ざけていた。

だが、人々は知らなかった。娘の胸にくすぶる、秘められた、巨おおきな夢を。

この痣あざは選ばれた者の印——そう、娘は信じていた。

いつか、魔法の王国から遣つかわされた龍ドラゴンが、私こそを王女とみとめ、その黄金色の背に乗せて、この街からさらってゆくだろう。その時こそ、この灰色の暮らしは終わり、人々が私をあざ喰わうことも二度とないのだ、と。

その夢は、娘にとつて、ただひとつの真実であり、祈りだった。

黙々と機織り機に向かう時間も、娘の心は、龍ドラゴンの背中に乗って舞い上がる瞬間だけに重ねられていた。

十六歳の誕生日。

誰にも祝福してはもらえないその日を、娘は自分で祝おうとした。

折しも祭りの日。娘は、少ない工賃をためて買った黒繻子くろしゆすの靴を履き、目尻めじりに紅べにをさし、髪を高く結い上げて、町の大通りを歩いた。

娘の胸は、息苦しいまでの予感に満ちていた。

出会うべきなものかに、必ず出会える、という予感に。

（今日こそ、きっと、龍ドラゴンが私を迎えにくる。私は、そして、その輝かしい世界の王女として生まれ変わり、ほんとうの私になるのだ）

街の賑わいにぎは群れ飛ぶ羽虫はむしの音のように娘の耳を塞ぎふさ、娘には自分の心のつぶやきしか聞こえなかった。

九色の風船、露店ろてんの甘い菓子、道化師だうけしのパレード、サーカス。それらは娘の目を引きは





したが、娘を魅入らせ、足を止めさせるものではなかった。

(もつとすばらしい世界、そこで生きるべき本当の世界が、私を待っている)

娘は顔を上げ、胸をはって歩いた。その姿は、いつもよりは美しく見えたかもしれない。それでも、娘を気に留める者は、誰ひとりいなかった。

不意に路地から飛び出した、青い仮面の道化が、娘の鼻先に花を一輪差し出した。娘がつんとそっぽを向くと、花は、雀に変化して空に舞い上がった。道化は、甲高い笑い声を残して走り去った。

やがて日没。そして夜。

パレードは町の中心に移動してゆき、露店は売り物をたたみ、代わって酒場のテーブルが、道端に処狭しと並べられる。

歌と笑い声が闇をかき乱し、踏みしだかれた花吹雪が夜風にゆると踊る。

私は萎れた蕾だ、と、娘は思った。龍どころか、誰一人私を見出さなかった。

踊りの列に加わる気力もなく、差しのべられる手もない。

うなだれて、町外れに向かい歩く娘の背に、どこへ帰る、と、声が掛かった。

振り返ると年若い少年、道化の青い仮面をはね上げて背中に垂らしている。

余計なお世話よ、と、娘は足を早めた。

——あんたこそ、家はあるの。

少年は娘の前に、軽やかに廻り込んだ。

——僕はまた、次の祭り、見知らぬ町さ。夜から夜へ。……

ふと見ると、少年の手首には、赤いリボンに似た痣があつた。

娘の視線に、少年は微笑した。

これか？ 赤ん坊の時、一座のライオンの子どもとじやれていて、嚼みあとがついたものらしい。ただどね、僕は、小さい頃は、この痣こそが、いつか母さんに見つけてもらうための目印だと信じていた。僕を捨て、サーカスの暮らしから逃げだした母さんにね。……

娘は思わず、少年の眼を見た。

その眸には、似合わぬ紅をさし、痩せこけて荒れた肌の、しかし眼ばかりがきらきらと輝く少女が映っている。

その少女の眸ひとみに映る、青い道化服どうけふくの少年は、引き寄せられるように手を伸ばして、娘と自分の手首の痣あざを、かさね見ようとした。

すると、二人それぞれの赤い手首の痣あざは、手首を離れ、生きたリボンのように絡まりあい、ふたつの手首を固く結び合わせたかと思うと、月光を受けてほどけるように消えた。驚き、見つめあう二人だったが、とりあつた手をそのままどちらからも離せないでいた。

満月が中空高く昇り、二人の足下から遥かな地まで遠く続く道を、白く浮かび上がらせた。

「では、また明晩」

そう言い残し、女が去ったあとも、アージュヴェダの胸は、ほのかに温かいもので満たされていた。

——ねえ、ねえ、それから、そのふたりはどうなったの？ しあわせになった？

そんな風に、ものがたりの続きをせがむ小さな子どもが、自分の中に確かに息づいていることに、今夜改めて気づくアージュヴェダであった。



第四夜

風の謡^{うた}うたい

目が覚めると、もう太陽は真上をやや過ぎたところだった。

アージュヴェダの常の仕事はこの集落しむつらくの男のほとんどがそうであるように、牧羊ぼくようであるから、夜も明けぬ前におきるのは習慣になつていた。

しかし、婚礼ぎしきの儀式の間は仕事は免除されているので、今は早起きをする事もない。まして夜毎よごとの花嫁はなめの話は夜がうつすらとあけるくらいまで続くので、ついついこんな時間まで眠りこけてしまう。

それだけでなく若い時期は眠いものである。

そういえば儀式の間は祭司さいし以外とは口をきいていない。

(不自由なものだなあ)

しかし、包ゲルのなかでごろごろ過ごすのも、気鬱きうつな感じがしてアージュヴェダは外にでて仲間の男達が働く草原の方にいつてみようとおもつた。

しばらく歩くと、聞き覚えのある若者達の声にまじつて集落しむつらくの娘たちの華やいだ声がきこえてくる。

(そうか、昼飯ひるめし休みなんだ……)

アージュヴェダは日常の時間の感覚さえ、もう薄れてきていることをあらためて感じた。

愉し^{たの}そうな声を遠くから聞いているだけで、早くそこへ行ってその輪の中に加わりたい
気持ちと同時に、なにやら自分だけが疎外^{そがい}されている気持ちもわいてきた。

このあたりの娘達はみな、陽に焼けた力強い男達を好む。

酒を好み、勇気があり、おおらかで女を力で守れるような男こそが「強い男」なのだ。

（俺はなあ……）

アージヴェエダはあまり陽にも焼けない己の腕を見やった。

彼等にあえば、婚礼の首尾をきくと問われるであろう。それにこたえるのも面倒だ。

どういうわけだか、男性的というよりはむしろ中性的な容貌の彼が仲間のなかでは最初
に花嫁^{はなよめ}（それも異部族^{いぶぞく}の）を娶^{めと}ることになってしまったのだから。

もっと他に甲斐性^{かいよう}のある若者はいたし、彼自身がそれほど女を娶^{めと}ることを強く望んだわけでもないのに。

それゆえ皆の興味は並大抵^{なみなたい}のものではなかった。

あたたかな陽射^ひしの元、集う若い男女の姿が遠くに見えてきた。きつとこちらが手を上げ振れば彼等も気づくだろう。

しかし、なんとなくすべてが億劫^{おっくう}におもえてきて彼は自分の包^{ゲル}にもどることにした。

(まあ、いい。すべては婚礼のおわつたあとだ。)

包^{ゲル}にもどると手持ちぶたさに、胡座^{あぐら}をかき、部屋を眺めまわした。

(それにしても、物のすくない部屋だな……)

ここはこの先、花嫁^{はなよめ}となる女と共に暮らす新居となる場所であつた。今はまだ、所帯道具というほどのものはない。アージュヴェダ一人が暮せるだけの物が、まだおちつきなくその部屋にあるだけだ。

(ここで、いったい俺達はどんな風にくらすのだろうか……)

「俺達」という言葉を使つてみて、少々^{少々}のぎこちなさも感じてしまつたアージュヴェダはそこから先の想像が追いつかなくなつて、もう、考えるのをやめた。

そのとき、細く開いた戸棚の中に、ふと眼にとまるものがあつた。

(あ、あれは……)

それは、半年ほど前にアージュヴェダが行商の男から手に入れた青竹を、細く細くナイフで裂き、それを更に精密に張り合わせて作つた横笛であつた。

(糊^{のり}を乾かすために、置いてあつたのを忘れていたんだ)

すっかり乾いた未完成の笛を手にしたアージュヴェダは、水を得た魚のようにそれに

滑らかにやすりをかけ、磨き上げ、美しい音色がでるように慎重に穴をあける作業に没入した。

男にしては細く白い指が丹念にそして柔らかに動き、まるでその手業は笛に命をあたえるかのようであった。

眼を細めては、細部のくるいを見出し、息を吹きかけては、その出来映えをたしかめる。そんな静かな、しかし、なにもかも忘れて過ぎていく時間にアージュヴェダは包まれていた。

(できた)

ヒョウと、試しに音をだしてみた時には、もうたそがれ時になっておりその音色は夕闇をつらぬくように響いた。

みづか
自らが作り上げたその音色に満足したアージュヴェダは、にやつと子どものように笑ってその笛を懐にしまった。

(なんだか、すっかり夢中になってしまったな)

そんなことが、嬉しくてたまらない風のアージュヴェダだった。

夜の帳とばりが降り、女がやってくる時間が近づいてきた。

強い風を耳に聞きながらアージュヴェダは女がやってくるのをまつた。今宵ゲルに限って包ゲルの外の風にはなぜか少し、異質な音がまじっているような気がした。

(なんだらう?)

(なんの音だ?)

どこかで聞いた覚えのある音なのに、なぜか、思い出せないもどかしさ。だが、耳慣れた馬の蹄ひづめの音がして、アージュヴェダは居ゐずまいを正した。

嫋じょう (じょう) ……………

風にまじり聞こえてきた異質な音の正体はこれだったのか。

(弦げんの楽がくの音おとか……?)

「こんばんは。今宵こんやはこんなものをもつてまいりましたの。今宵こんやのわたくしは謡うたうたいでございますわ。」

嫋じょう……… 嫋じょう………

細い弦をしなやかにかき鳴らす音、女がゆるりと座る衣擦れの音がして、今宵もまた、ものがたりが始まった。

第四夜 風の謡うたい

とある森深き国に、風の謡うたいと呼ばれた男がおりました。

この謡はその男の風のような愛の謡。儚くたゆとうような愛の謡。

嫋、嫋、嫋、嫋、
.....

孤独な謡うたいがおりました。

一人ぼっちのその男、季節の移ろいや人の喜び悲しみを

彼の言葉で紡ぎ出し謡うておりました。

甘く切ないその声、けれども人々は耳を傾けることはなく、

謡うことだけが彼の支えだったとしても、彼の心は、閉ざされた岩戸のよう。

月色の髪の少女に逢いました。

少女は彼の心を月の光のようにあでやかに彩り、慈しみ

彼は愛という言葉をそうしてしるのです。

そうして彼の謡、言葉のすべては、少女への愛に満ち溢れ、

彼の謡に言葉に身をゆだねながら、少女は孤独な彼の全てを柔らかに包むよう。

すべての言葉をそこにいる少女のために

すべての調べをそこにいる少女のために

彼の謡は風に乗るかにように、人々の心をも掴みはじめるのです。

すべての言葉をそこにいる少女のために

すべての調べをそこにいる少女のために

草の上を走り、風の声を聞く恋人達に他に何もいらななくても、



すべての言葉をそこにいる少女のために

すべての調べをそこにいる少女のために

愛し合う気持ちは言葉を越え、そして美しい季節をすごすのです。

幸せは不意に切り裂かれるもの。

二人を引き裂くのは時の権力、抗えぬ為政者の気まぐれ

少女は彼の手の届かぬ世界へ連れゆかれ、

二度とあいまみえること叶わず、彼の心は千切れ軋み、

なす術もなく、それでも時だけが遠く離れた二人の上に非情に流れゆくのです。

すべての言葉をそこにいる少女のために

……捧げていたのに

すべての調べをそこにいる少女のために

……奏でていたのに

引き裂かれた二人に残る物は涙だけ。彼をまた孤独こどくが包むのです。

もう、謡うたはつくれない。もう、謡うたはつくれない。

彼は謡うたうことをやめたのです。彼は謡うたうことをやめたのです。

「新しい恋をお探さないな。」

誘う女たち。

「この世の楽しみなんて、ごまんとあるさ」

気楽な男たち。

けれども、どんななぐさめも彼の魂たましいを癒いせはしないのです。

嫫じよう

哀しみは消えるものでしょうか。

ようやく涙も枯れた頃、彼が心から欲したのは、謡うたうこと。

新しい季節の息吹の力をその身に受けて

心からの叫び、祈りにもにた、溢れ湧き上がる言葉、調べ

凍てついていた彼の心を、ようやく緩やかに融かすようにほどけさせたその謡

すべての言葉を、そこにいない少女のために。

……捧げて……

すべての調べを、そこにいない少女のために。

……捧げて……

彼の謡はさらに風に乗る人々の心を魅惑しつづけるのです。

嫋、嫋、嫋、……

「あなたを愛しているわ」

誘う女たち。

「幸運の女神は、お前の思いのままだな」

気楽な男たち

彼を包んでいた孤独は、音をたてて消え去ってゆくのです。

すべての言葉はだれのために。

………止むことのない喝采かつさい

すべての調べはだれのために。

………それは神に選ばれし榮譽えいよ

なにかが少しずつ、彼のわからぬままに動いてゆくのです。

運命はそうして動いてゆくもの。

最高の風の謡うたうたいと呼ばれ、為政者いせいしゃに召され謡うたう榮譽えいよ

人の喜び悲しみ、季節のうつろいの謡うた、

そして恋の謡うた。神が憑ついたかのごとく、その歌声その姿。

満座まんざの喝采かつさいの中、感極まった彼は両の腕かいなで天を突き、神に感謝を捧ぐのです。

すべての言葉はだれのために。

………止むことのない喝采かつさい

すべての調べはだれのために。

……それは神に選ばれし栄誉

すべての言葉はだれのために。

……あの悲嘆の日々

すべての調べはだれのために。

……訪れた栄華

嫋、嫋、嫋。……

為政者の傍らには昔愛した少女が。

二人の視線は宙で交わり、蘇る懐かしい時間そして風景。

あの頃二人で駆けぬけた草原の風の匂い。

かつての少女がわずかにに首をふり、小さく呟いた言葉、

一筋の涙とともに、わずかな空気を震わせ、彼だけに彼一人に届けたその言葉。

すべての言葉はだれのために。

……………（あなたの言葉じゃないわ）

すべての調べはだれのために。

……………（あなたの調べじゃないわ）

（わたしの好きだったあなたの歌じゃないわ）

彼から全ての音が消えました。

彼の魂は、今、深い暗黒の海に沈んで行く意識の塊にすぎず、

さかのぼ
遡れない時間、ひろがるのは永遠の暗闇。

時の寵児よ、最高の謡うたいよ、その誉れの意味は何処に。

その後の彼の消息を知る者なく人知れず命を絶ったという風の便りが残るのみ

もう、歌はつくれない、その言葉をのこして。



愛する少女がそこにおりました。

一人ぼっちだった男は、少女の深い愛で擁いだかれておりました。
そうしてはじめて謡うたうことの意味を知ったのです。

すべての言葉をそこにいた少女のために

………彼は愛を謡うたった。

すべての調べをそこにいた少女のために

………彼は愛を謡うたった。

それは真実に輝かしい日々だったのでしよう。

嫋じょう、嫋じょう、嫋じょう……



女は謡い語り終わった今も、弦を爪弾きつづけている。

ときおり、息のまじったちいさなささやきのような声で旋律をくちずさんでいる。

謡が語りであり、語りが謡であり、その世界にアージュヴェダは引き込まれていた。

樂の音は包の中に満ち溢れ、二人をしなやかに包む。

アージュヴェダの手は今、懷にあり、横笛をつよく掴み、心は大きく揺れていた。

唄れた祭司の声が脳裏をかすめる。

「決して言葉を交わしてはなりませんぞ、禁忌はまもってくださいよ」

嫋……………

女が弦がはげしくかき鳴らしたその時、アージュヴェダは、心を決めた。

（かまうものか。話さえしなければ、いいんだ）

アージユヴェダは懐^{ふところ}から自^{みずか}らが作り上げた横笛をとりだし、唇にあてた。
ヒヨウ……………

アージユヴェダの笛の音を、女の弦^{げん}の音は、少しの驚きと、喜びをもって応^{こた}えた。
女のかき鳴らす、弦^{げん}の切ないまでの音色^{ねいろ}。

アージユヴェダの笛のつきぬけるようなさえさえとした音色^{ねいろ}。

二つの音色が重なり合い、響^{ひび}き合い、絡^{から}み合い、溶^とけ合う。

いつまでも、いつまでも、飽きることなく続く音色のふれあい。それは純粋な心からの
ふれあい。

アージユヴェダは今、この心のふれあい、この温かさに酔っていた。

（これが一人じゃなくなるといふことなのだろうか。そうしてこれからはずっと……）

ふとそんな甘いような気持ちがわいてきたとき、ピシという鋭い音がして、弦^{げん}の音が途
切れた。

「痛^つうつ……」



(どうかしたのか！)

アージュヴェダはあやうく声を出しそうになり、しかし、その身は女の元に駆け寄っていた。

「失礼いたしました。少々爪を折ってしまいまして……でも、大丈夫ですわ。今宵は本当に楽しゅうございましたわ。では、また明晩………」

女はするりと立ち上がり、アージュヴェダの耳元に痛みをこらえた声でそう囁くと、去っていった。

その後は砂を踏む蹄の音がかすかに聞こえただけだった。

しばらくは、呆然としていたアージュヴェダもはつと我に帰り、すばやく目隠しの布を取り、戸口から身を乗り出し女を見送ろうとした。

眼をこらすと、夜気に溶けゆくような女の後ろ姿がみえた。

アージュヴェダは今宵はじめて、その姿を、間近でみたいと強く思ったのだった。

(こんな気持ちにもなるものだな……)

射しこめる月明かりで、女の座っていた敷布の上になにか光る物をみつけた。

（これは、なんだ……？）

朱く細長い、それは女の折れた爪であった。

「きれいだな……」

つい、そう言葉が出てしまうほど　なにやらなまめかしい気がして、そつとそれを懐紙かいしに包み、香辛料こうしんりょうの入れてある木の箱の中にしまいこんだ。

（返す……というのも変か……）

そんな風に考えて少し微笑ほほえんで、いつものようにアージュヴェダは深い眠りに落ちた。



第五夜

蝶ちようの記憶

花嫁^{はなよめ}を迎えるための目隠し^{めかくし}をする前に、アージュヴェダは、かまどで茶を沸かし、山羊^{ヤギ}の乳を注いで、飲み物を作った。

このような形のもてなしをすることすら、禁じられているわけではない筈^{はず}だ。

触れたり、ことばを掛けることが禁じられているのなら、せめて温かい飲み物を供^{きょう}すること、歓迎と労^{ねぎ}いの気持ちを現したかった。

やがて日が暮れ、月が昇り、現れた女は、室内に入ると同時に、

「おや。良い香りがいたします」

と、よろこびの声をあげた。

アージュヴェダは、飲み物をこぼさぬように、女と手が触れあわぬようにと、慎重^{うづやう}に器^{うつわ}を差し出した。

「まあ、いただきます、おまえさま」

女の弾^{はす}んだ声^{こゑ}がする。

（こんなに喜ばれるのなら、はじめの日から用意しておけばよかった。どうして気がつかなかったのだろうか）

アージュヴェダは、胸のあたりが温かくなるのを感じた。だが、すぐに、女が小さく息を呑む^の気配がし、しずかに器^{うつわ}を置く音がした。

（熱すぎたのか？ 口に合わなかったのか……）

気になったが、問いただすわけにもいかない。

しばらくの間、沈黙が続いた。香草茶^{しょうそうちゃ}の芳^{かん}ばしい匂いだけが部屋に満ちていた。

やがて女は、今夜のものがたりを語りはじめた。

第五夜 蝶^{ちょう}の記憶

カイルは、狩の達人であつた。彼の狩のやりかたが他と違つていたのは、彼があらゆる動物から狩の技を学び、それを活か^いしているところにあつた。

つかまえた動物に、逃がしてやるからおまえの力をくれ、と迫ると、たいていの動物は彼にその能力を分け与えた。

狼はその残忍な牙を。熊は獠猛な爪を。野兎ならば、遠くの足音を聞きわけける耳を。

昨日、新たに覚えたのは、蜘蛛の巣の張り方であった。早速試してみようと、大きな木の枝の間に透明な糸を張り巡らせた。そして、一晚眠つて、獲物がかかるのを待った。

朝、昨夜張った巣を見てみると、一匹の巨大な蝶がかかっていた。

蝶は、粘着性のある糸に絡めとられた瑠璃色の羽根を小さく震わせながら、朝露がびつしりついた巣の中央に、飾られた宝石のように磔られていた。

「ほほう。みごとに蝶だ。こんな美しい蝶は見たことがない」

カイルは満足そうに呟いた。

すると、蝶は、ぐったりしていた頭を持ち上げ、かほそい声で、

「わたしは蝶ではありません」

と、言い返した。

「おや、生きていたか。だが、おまえは、どう見ても蝶だ」

「……………」

蝶は、それには答えなかった。とても弱っているように見えた。

「この罠にかかったからには、可哀想だが、おまえは俺の獲物だ。しかし蝶は食べるわけに

もいらない。どうだ、おまえのその羽根を俺に出来ないか。そうすれば逃がしてやる」

あまりにも残酷なこの取り引きに、蝶は応じなかった。あるいは、それに答える力が残っていないかったためであつたかもしれない。

「羽根をよこすのがいやだと言うなら、おまえはここで朽ち果ててゆくしかない」

カイルは言つた。蝶はやはり答えなかった。

強まりゆく朝の光のなかで、カイルはいま一度しげしげと、蝶を見た。

羽根の瑠璃色は、光を浴びていつそうまばゆく、湖の表面のようにきらめきながら、根元から端に向かつて水色に変化していった。

その美しさに、カイルは思わず手を伸ばし、羽根にそつと触れた。羽根の表面はしつとりと柔らかく、弾力があつた。

触れた手を見てみると瑠璃色に染まつていたので驚いたが、その瑠璃色はすぐに、はらはらと落ちた。鱗粉であつた。

暫く魅入られたようにその鱗粉を見ていたカイルの内部で、その美しさのまゑに平伏したい気持ちと、その羽根を原型を留めぬほどに引き裂きたい気持ちとが、同時に、そして急激に湧き起こつた。

その感情の振幅は地震のようにカイルを揺さぶり、彼を身動きできなくしたが、やがて互いに相殺しあうかのように波が収まっていった。我に帰ると、呼吸が乱れていることに気付いた。

カイルは、怯えたように、蝶にくると背を向けると、今日の狩に出かけていった。

夕刻、狩から戻ったカイルが、蜘蛛の巣のところに行ってみると、蝶は朝の姿勢と同じ状態のまま、巣にはりついていていた。

蝶の下の地面に、落ちた鱗粉が溜まり、銀色の池のように見えた。

手を伸ばし、羽根に触れると、僅かな震えが伝わってきた。

カイルは、腰に着けた革袋の中から蜜の塊を取り出すと、それを蝶の口元にあてがった。

「食え」

蝶は沈黙していた。

「食え」

カイルは、蜜を、蝶の口に押し付けた。

蝶は、蜜を、すこしだけ吸った。しかし、すぐに口を離し、うなだれた。

（飛んで逃げる力はなさそうだ）

そう判断したカイルは、短剣を抜き、蜘蛛くもの巣の糸を断ちきった。

蝶ちようは、ばさりとカイルの足下に落ちてきた。

抱き起こすと、蝶ちようはうつすらと目を開け、何か小声で言った。

「羽根を、とれば、いい」

そう聞こえた。

カイルは首を横に振った。

「おまえの羽根を取るのはやめた」

そして、こうつけ加えた。

「おまえが気にいったからな」

カイルは、蝶ちようを背負い、自分の家に連れて帰った。

暖炉だんろに薪まきをくべ、部屋を温かくすると、羽根は張りを取り戻し、再び瑠璃色るりいろに輝いた。

（美しいものを手に入れた）

カイルは、そう思い、満足した。

そして、針を取り出し、蝶ちようの手の一本と、自分の左腕を、蔦つたの糸で素早く縫ぬい合わせた。「これで、おまえは、逃げられない。飛びたければ、おれを連れて飛ぶしかないが、二人ぶんの重さは、その羽根では支えきれまい」

カイルの言葉に、蝶ちようははじめて顔を上げて彼の目を見た。驚きと怯おびえで眸ひとみが震えていた。カイルは、こういう時に言えいいのではないかと、思い出した言葉、はじめて使う言葉を言った。

「おまえは美しい。愛している」

蝶ちようはカイルを見たまま、何も答えなかった。カイルの眼の奥にあるものを、ひたすら見きわめようとしているかに見えた。

季節は夏に向かつていた。

カイルは、自分を蝶ちようと縫いあわせてからも、変わらず毎日狩に出た。腕力もあり、沢山の狩の技術を使いこなすカイルにとって、蝶ちようはたいして足手纏あしでまといにはならなかった。むしろ、引きずりまわされる蝶ちようのほうが、一日の狩が終わるとぐったりしていた。蝶ちようは、血の匂いを嫌ったが、カイルは頓着とんちやぐせずに獲物の腹を裂き、肉を解体した。

彼はいつも、体から血の匂いを立ちのぼらせていた。その匂いは、いつしか蝶にも染みついた。

獲物の肉を蝶に与えても、蝶は決して口をつけようとしなかった。時折、蜜の塊を吸うだけだった。

「蜜しか喰わないとは、やはりおまえは蝶だ。いつか、自分を蝶ではないと言っていたが」

カイルがそう言うのと、蝶は、最初の日と同じ口調で、

「違います。わたしは蝶ではありません」

と、答えた。

「蝶でなければ、何だというのだ」

「蝶という名前は、あなたたちの言葉。わたしたちの国では、……」

蝶は、なにごとか名前めいた言葉を唇に乗せた。しかし、それはカイルの耳に響かなかつた。

ある時、カイルは大きな狼を追っていた。その、ひととき巨大な狼の、精悍な顔つきと見事な毛並は、カイルを虜にした。それで、いつもは入らない森の奥まで、つい深追いし

てしまった。鹿から貰った脚の早さを、少々過信していたこともあった。

森に分け入りすぎたかと思つたときには、遅かった。一瞬のうちに狼を見失い、引き返したのかと思案する暇もなく、カイルをぐるりと取り囲むように、一斉に複数の狼のうなり声が響いてきた。

声はどれも近かった。既に追い込まれていた。おそらく、カイルが追つていた狼は群れのボスで、手下の狼たちを応援に呼んだのだ。いや、獲物としておびきよせられたのは、カイルのほうであつたのか。

（してはならん失敗をしてしまった）

カイルは青ざめた。

（おそらく、どつちに逃げてもだめだろう。いちかばちか、うなり声が薄い右のほうに逃げしてみるか。しかし、それも奴等の罠で、その方向にこそ、あのボス狼が待ち伏せているかもしれない）

そこまで一瞬で思いを巡らせると、カイルは急いで小刀を取り出し、蝶と自分の腕が縫い合わさつた部分にあてがつた。そして、力まかせに小刀を引いた。しかし、縫いあわされた部分は、いまやぴつたりと付着しあつて固い組織に変型しており、小刀を引いても殆

ど切れなかった。蝶^{ちよう}の青い血と自分の赤い血が混じった、紫色の液体ばかりが、どくどくと流れた。

蝶^{ちよう}は痛みに悲鳴をあげた。悲鳴の合間に、蝶^{ちよう}は叫んだ。

「こんな時に、なにをしているのです。血の匂いは狼を刺激する。逃げましょう」

「どのみち逃げられん。おまえひとりなら飛べるだろう」

カイルの答えに、蝶^{ちよう}は驚いた。この残忍^{ざんにん}な男が、自分だけを逃がそうとしてくれているのだ。

そうしている間にも、うなり声はどんどん近づいてきた。狼^{あせ}たちの歩調には焦りがなく、獲物を完全に追い詰めたという確信からくる優雅さがあった。

蝶^{ちよう}は突然、カイルを背中から抱きしめた。そして、たん、と、地を蹴^けると、羽根を大きく羽ばたかせ、高く舞いあがった。

みるみる間に、蝶^{ちよう}とカイルは、木々の梢^{ちよう}の天辺あたりまで浮かびあがった。さきほどまでふたりが立っていた地点を中心に、十数頭もの狼がぐるりと円形に潜んでいる様子が見おろせた。

木々の梢^{ちよう}ほどの高さには、地上より速い風が吹いていた。蝶^{ちよう}はその流れにのって、空を

泳いだ。

「……驚いた。飛んでいる！」

はじめて見る空からの眺めに感嘆しながら、カイルは叫んだ。

「俺を抱えていても飛べるのか！」

「とべましたね」

蝶は微笑んでいた。

風の爆音に包まれながら、ふたりは素晴らしい速さで森を抜け、カイルの家に戻った。着地してから、蝶が腕を離すと、カイルは足をふらつかせながら、愉快そうに笑った。

「俺はもう、羽根を手に入れたも同然だ。さつきは逃げてきてしまったが、いつそ空からあの大きな狼を射てやればよかったなあ。これからは、どんな凶暴な奴も空から攻めれば恐れるに足りん」

しかし、蝶はしずかに首を振った。

「ふたたび飛べるかどうかは、わかりません」

実際、蝶がカイルを連れて飛ぶことはそれから二度と無かったのだ。

カイルと狩をともしにする蝶の羽根は、日に日に破れ、ほころび、みすばらしくなっていた。そして、かつての、透明な湖のような、瑠璃色、水色、青磁色に変化する輝きも失われた。光る霞のように蝶の動きの後を追っていた鱗粉も、今は見られなくなってしまった。

それと並行して、蝶の身体は徐々に太り、重くなっていた。

重い身体をひきずるようにして付き添う蝶は、冬の間の食糧にする獲物を探し廻るカイルを苛立たせた。

しかし、いつかのように、腕の繋ぎ目を切断しようとは思わなかった。蝶とカイルの腕は、今や一本の腕であるかのように、一体化して固くなっていた。そこを切断すれば、あの時にも増して夥しい血が流れ、命を落としても不思議は無いように思われた。

(この身体の中で、蝶と俺の血は混じって流れているのだろうか)

そう考え、己の指を小さく切ってみた。

紫色ではなく、赤い血が、ひとすじ流れ出た。

ある夜、蝶が眠っている時に、カイルはしげしげと蝶の羽根を見た。今では、ぱさぱさ

に乾いて茶色くなっていた。あの春の朝、蜘蛛くもの巣にかかった宝石のような姿を思い浮かべるにつけ、眼のまえにあるものと同じものだとは思えなかった。

そつと手を触れてみた。しつとりと湿ったしなやかな感触のかわりに、腐食ふじよくした枯葉かれはのような弱い手ごたえがあり、すこし力をこめると、そこから、ぱりぱりと破れた。

破れ目を中心に、蜘蛛くもの巣のような形にひびが入り、あつという間に羽根全体がこなごなに壊れて落ちてしまった。

さつきまで羽根うねだったものは、うつすらと積もった埃ほこりとして残っているだけだった。

カイルはうろたえ、寝ている蝶ちょうを起こした。

「おい、起きろ。おまえの羽根をこわしてしまった！ すっかりなくなってしまった！」

蝶ちょうは、薄く目をあけた。

「羽根など、はじめからありません」

「馬鹿言うな。おまえの、あの美しい羽根うねだ。蝶ちょうの羽根うねだ」

蝶ちょうは、こんどは答えなかった。見ると、蝶ちょうの身体全体が、なにか固い膜まくのようなものに覆われていた。カイルが揺ゆすつても、物体のように揺ゆすられるだけで、沈黙していた。

「どうなったんだ。おまえは、何なのだ。あの美しい羽根をもったおまえは。俺を、空高く

飛ばせてくれた、あの羽根をもっていたおまえは？」

蝶は沈黙していた。

そして、その状態のまま何日かすぎた。固い殻の色は、薄い肌色から濃い茶色へと変色してゆき、ますます、ずっしりと重くなった。あまりの重さに、カイルは抱えて歩くこともできず、狩にも行けず、食糧も乏しいまま冬を迎えてしまった。

家のなかで、カイルは身動きもできずにすごした。もともと少なかった薪も尽き、寒さと静寂のうちに、カイルは気付いた。

（これは、さなぎではないか。蝶が、なぜ再びさなぎになるのだ……）

もの言わぬさなぎと並んで横たわりながら、カイルは薄れてゆく意識のなかで、蝶のこ
とばを思い出した。

——わたしは、蝶ではない、と。

ばかな、と、カイルは力なく呟いた。では、自分が見たものは何だったのか。

ひと目見て魅了された、あのすばらしい羽根は。空を斬り、風とひとつになったあの時
間は。

さなぎは沈黙したまま、カイルの隣にあった。固く重いそれは、時間の経過とともに、巨大な石のようにも思えてきた。自分の腕と繋がったところから、自分の身体まで石になつてゆくかのような妄想に囚われ、カイルは苦しんだ。

長い時間が経った。

やがて、途切れがちな意識のなかで、カイルは己の耳に、小さな振動のような物音を感じた。

霞む目を開けると、さなぎの中央に亀裂が入っているのが見えた。

（新しいなかが姿を現すのか？）

亀裂はみるみる大きくなつてゆき、ぱつくりと中央から割れた。

なにかが、殻の中から現れ出た。

黒く、蝶のときよりも遥かに巨大な生き物の姿が現れた。それは、ふるふると軀を震わせ、殻を振り落とすと、軀の両脇の湿り気を帯びた翼をゆつくりと広げた。鳥のように見えた。

（……鷺？ 鷹か？）

衰弱したカイルに、それらが何であるか見きわめるのは難しかった。

（いや、もとより、俺の知る名前などは意味を持たぬのかもしれない……俺は、あれを蝶と呼んではいたが、蝶ではなかった。俺が蝶だと思っていた、それだけだった）

巨大な鳥は、翼を何度かはばたかせた。狭い室内に風が巻き起こった。

おもむろに、鳥は舞い上がり、窓の棧にとまると、そこから外にはばたき出た。

鳥の影は、一瞬、空を雲のように覆って暗い日陰をつくり、やがて、彼方に飛び去って、姿も見えなくなった。

「奇妙な物語ですね」

女は珍しく、物語についての意見を口にした。

アージュヴェダは、同意の言葉を口にすることも叶わず、黙っていた。

「このあと、この物語はどうなったと思いますか？」

「……」

「わたくしはね、このように思うのです。」

さなぎの中から、怪鳥は飛び立っていった。そして、残った殻からの中には、女が残っていたのです。魔性ましようを解かれた、人間の、普通の女が。

女は、自分にかけられた呪いが鳥とともに飛びつ去たことを喜びました。そして、カイルと結婚し、子どもを何人も産み、いつまでもいつまでも、幸せに暮らしたのです」
いつまでもいつまでも、と、女は強調して喋しゃべった。

アージュヴェダには、それは突拍子とつびようしもない考えに思えた。

だいいち、愛しているからといって勝手に腕を縫ぬい合わせるような男が、善い人間だとは思えない。蝶ちようの美しい羽根が滅ほろんでしまったのも、そんな無茶なことをしたからではないのか。カイルという人物には、「愛している」と言う資格などないのではないか。

最後に怪鳥が出てきたとき、カイルはその鳥に喰くわれてしまったに違い無い。——そんな風に思い、じつと黙っていると、女はぼつりと、

「縫ぬいとどめることで、そばにいられるものなら、わたくしもそうすることでしょう」

と、言った。

アージュヴェダは、思わず顔を上げた。

その気持ちは、一体、誰に向けられたものなのか。

一瞬、嫉妬に似た感情が自分の中にわき起こり、うろたえた。

しかし、女はそれ以上語ることをせず、すっと立ち上がり、

「では、また、明晩。——お茶を、ありがとう」

と言に残し、去っていった。

馬の蹄の音が十分に遠ざかってから、彼は目隠しを取った。

そうして薄明の中にひとり座っていると、女が来たことも、そこで語っていたことも、すべて夢だったのではないか、という思いに囚われた。

ふと、女に供した茶の器を見ると、茶は、なみなみ注がれたままの状態でそこに置かれていた。

器の縁に、紅が残っている様子もなかった。

（口に合わなかった、ということか——）

アージュヴェダは、いたたまれぬ思いで茶器を片付け、その動作の続きで香辛料の入った木の箱を開けた。

そして、昨夜そこに入れておいた懐紙かいしの包みを、そつと開いた。

そこに確かにある、朱い爪あかの欠片かけらを目にして、安堵あんどした。

（せめて、名前を呼ぶことができれば。……ああ、わたしは、まだあの女の名前を教えるも
らっていないな。）

わたしは、蝶ちようではありません、という蝶ちようの顔は、アージュヴェダの空想のなかで、まだ
見ぬ花嫁の顔と重なった。

その像は白くぼやけ、霞かすんでいた。



第六夜

巫女王伝説

（あの艶やかな声には、俺を眠りに落とす力があるな）

いつもの時間を前に、やはり今宵も花嫁となる女のことを考えていた。

見知らぬ世界の話に心踊るも、なぜかしらいつも心地よい眠りにひきこまれそうになり、その誘惑とも戦わねばならないそんな自分にアージュヴェダは苦笑した。

（普段は、なかなか寝つけない性質なのに）

月もかなり満ちてきて婚礼の夜はもう六日を数える。

アージュヴェダにとって、声だけが確かな存在の女が心の真中を占めるようになっていて、そのことは彼にとつてすでに自然なことでもあった。

呼吸をするのとおなじくらいに、女、これから先、自分と常に在る女のことをいつも考えていた。

「ではまた、明晩、また同じ時刻に……」

アージュヴェダは女の声色をまねて言葉をだしてみた。

そして、小さく笑った。更に自分の小さな笑い声に可笑しくなつてまた笑った。

夜半の月の光と冷やかな夜気がやわらかくテントの中に射しこんできて、女がやって

きた。

「まあ、おまえさま？ なにか楽しいことでもありましたの？ 微かに笑い声がしましたよ
うな……」

アージュヴェダは、頭をふった。目隠しをされたままうつむいて、どうにかやりすごしたが、ゆるんだ顔がなかなか元にはもどらなかった。

そんなアージュヴェダの気持ちには気づかないように、女はいつものように澄んだ声でものがたりをはじめた。

第六夜 巫女王伝説

一年で一番昼が長い日だった。

高い角度から太陽が照りつけ、影が黒々と乾いた砂地に横たわる。

旅人は帽子を深くかぶりなおし、まばゆい太陽から目をそむけた。

「少し休むか、せめて日差しが和らぐまで……」

今日はこの国の「夏至祭」。

一年で一番太陽高いこの日に、女王の「御成り」があるという。

「こんな日に旅人としてこの国にはいったのもなにかの縁だろうな。」

旅人は思い、前方に見えるバザールへ足を速めた。

バザールでは色鮮やかな野菜、果実、衣服、手の込んだ工芸品、細工物などから、學術書にいたるまで、ありとあらゆるものが商売されていた。

また、一つ裏路地にはいれば、そこには怪しげな商いも交わされているらしく、異国の旅人を遠目で避けるような、もしくは引きつきたいのか、そのような奇妙な雰囲気満ちていた。

ともあれ、売り買いの聲がさまざまな言葉で響きあい、旅人にとっては魅惑的な異国風情であることには違いなかった。

にぎやかなバザールの中ほどあたりに、誰からも忘れられているかのようにぼつねんと坐りこんでいる老人がいた。

赤銅色に焼けた顔中に深く刻まれた皺が彼の生きてきた人生の長さを、深さを物語るように思えた。

旅人は、そんな老人の姿に目をとめ、彼の背負ってきた過去を、現在を推し量ろうとした。

「いかなな、また、悪い癖だ」

旅人は、故郷で、医師を生業にしていたが、それはそのころ急激に進歩した身体を切り刻み病をなおす医療ではなく病んだ心を診ることが彼の専門分野であった。

「人とみるとすぐに、分析してしまうな。」

仕事を離れ、旅をしているにもかかわらず、ふとあらわれる元来の職業意識におもわず、苦笑するのであった。

バザールでよく冷えた発泡酒を手に入れた旅人は、唇をまずしめらせてから喉をならし、身体中に涼やかな感覚が広がるのを愉しんだ。

ふと、先ほどの老人が目線だけでこちらをうかがっていたのに、ふと気が付いた旅人は、もう一杯同じ酒を買い、老人の隣に座りこんだ。

（なぜ、この老人にこんなにも心ひかれるのだろうか？）

答えのでぬまま、旅人は独学で習得したこの国の言語で話しかけた。

「ひとつ、いかがですか？」

旅人の言葉は通じたようで、老人は、緩慢にそれをうけつとた。

手指の痙攣の具合、おぼつかなさからみると、外見よりもかなりの高齢のような印象を受けた。

ゴクリと一口飲むと老人はいった。

「あんた、心を読める人だね」

老人の瞳は意外にもするどく、旅人は自分の老人への興味を見透かされたような気がした。

「まあ、心を読む……というか、……故郷では、病んだ心を診る医師をしておりましたので。もしかあなたも、御同業なのですか？」

老人は、旅人の質問にはこたえず、はるか彼方をみつめ、「ホウ」と息をはいた。

そのまま、眠り込んでしまっても不思議ではなかった。

「あんた、旅の途中にこの国に来なさったんだな。旅の土産に、わしの話を聞くとよいだろう。」

老人の顔には無数の深い皺が刻まれてはいるが、秀でた額の持ち主であった。おそらくは元は高貴の出なのであろう。

「では、ようこんで……」

旅人は、持ち前の好奇心に抗うこともできず、老人の話にひきこまれてしまった。



巫女という言葉をご存知か？

神の声を聞く事のできる女性のことじゃ。

この国は代々巫女である女王が治めておられる。もちろん、現女王も巫女であられる。その起源にまつわる巫女王伝説について話をしよう。

はるか昔、この国を治めていたのは武勇に長けた王であった。

王の妃は他部族から献上された王女であったが、王はこの美しい妃ひとりをご上なく愛し、幸せな時間を過ごしていた。

やがて、王は妃に生き写しの姫を得たのであるが、妃は姫を産み落とすと、ほどなくその命を終えてしまったのである。

残された王は、姫にこの国一番の気高い名前を与え、姫を慈しんだが、姫を失った哀しみは薄れる事はなかった。

臣下のものは、いかにすれば、王の気持ちを和らげることが出来るかを、様々に試みたが、どんな享楽にも、どんな美しい女にも、王は見向きもしなかった。

幾日かが過ぎ、姫をとりあげた老女が、姫を擁ぎ王の間へ参上した。

「おそれながら、申し上げます。」

彼女はこの王をも取り上げた老練な産婆であり、靈的なことにも通じている巫女であった。

「母君の命と引き換えに生を受けた女兒は能力の高い巫女になると申します。

そのうえ姫様はこの美貌。まこと将来がたのしみでございます。」

老女のいうように姫は赤子とは思えぬ高貴な顔立ちをしていた。

やわらかな象牙色の肌、つやつやと濡れたような黒い髪と長いまつげ、そしてなによりも、妃に生き写しの深い碧の瞳。

「この瞳で見つめられて、心動かぬものはおらぬだろうな……」

王は妃の在りし日の姿をおもい、そして決心したのである。

「我が姫を、最高の巫女にいたそう。そのためには、いかなることもいとわぬわ。貴様に姫の薫育を命じる。命がけで任務を果たすがよい。」

老女は、ははっ、と畏みひざまづいた。

「まずは、姫様を俗から遠ざけねばなりませんまい」

赤子は自分の運命が決まったことなど露知らず、すやすやと安らかな寝息をたてていた。さっそく、王の命令により、姫のための特別な宮殿が造られることとなった。

宮殿は高い崖の上につくられ、空の宮と呼ばれた。

そこへいくには、王宮から、高い梯子を使って登るしかなかった。

梯子が掛けられるのは昼の間だけ。もちろん梯子番には常時数名の屈強な兵士がついている。

そして、この梯子を登ることのできる男は当然、王ただひとりである。

夜になれば、梯子は王宮の倉庫に厳重に保管され、つまりは何人も勝手に、姫の宮殿には近づくことはできないのである。

姫は空の宮で、大勢の家臣に囲まれ大切に慈しまれそだった。

老女をはじめ、御付の女官、教育係、いっしょに遊ぶ童、犬、猫、小鳥にいたるまで、そ

こは、女だけの世界。

いっさい「男」というものの存在はなかった。

つまりは、王だけが姫の目にうつる唯一の男であった。

姫は力強く精悍な父王が大好きだった。

王も、毎朝の執務が終わると、空の宮へ行き姫の成長をみるのを無上の愉しみとしていた。

そうして姫は、時の流れの中で幼女から少女へ、少女から女性へと美しく変身していった。

王は、勇猛で、武術には長けていたが凡庸な知性の持ち主であったから、姫には、芸術、哲学、文学、歴史、天文学、物理学などあらゆる知性を惜しみなくあたえさせた。

多くの学者達の教えのもと、姫は砂に水が染み入るように、あらゆる知性を我が物としていった。

生来の美貌に知性が磨きをかけ、神々しいという他に形容しがたい姿であるといえた。

また、もって生まれた靈感の高さもあますところなくあらわれ、五才ですでに、天の氣

をよみ、八才で天体の配置から運氣をよみ、十才で様々な予言を的中させた。

靈感を高める様々な困難な修養も、姫には少しも苦ではなかった。

まさに、神から選ばれた巫女ふじよといえよう。

そのころ、髪（とくに黒髪）には靈力が宿るといわれており、十四歳になった今、姫のその髪は十重とえはたえ二十重と豊かにたゆとうのであった。

（巫女は髪を切ることはない）

王はその姿にひたすら満足であった。

姫の靈力は王が治める国を幸せにする力があつた。

姫の眩まばゆいばかりの靈力の導きと王の武運で、この国はこれまでにない栄えしきを誇っていた。

さらに四年の月日が流れた。

この国はさらなる発展をつづけ、王はとうとう、念願の空の騎士軍きしぐんをもつことに成功した。

空の騎士きしとは、秘術で成形された翼を身につけ、空中でたたかう技術を身につけた兵達である。

それは強靱^{きやうじん}な肉体と精神をもった選ばれた男達にしか体得できない技能であつた。

彼等は王の精銳部隊^{せいゑいぶたい}にして、この国の最強の兵士であつた。

ある、春の嵐の吹く日。空の騎士^{きし}軍は、嵐の中の風の流れをつかみ乗りこなすという、非常に困難な演習を行つていた。

あまりにひどい強風であつたので、多くの騎士^{きし}は風をつかむことなく地にばたばたと落ちるのみであつた。

ただひとり、一番年若くはあるが才たけた騎士^{きし}が風を翼につかみ、高く舞い上がった。しかし、舞い上がることに成功しても、さすがにその風を御^{ぎよ}することはむずかしく、その騎士^{きし}は風に巻き込まれ、あらぬ方向へ飛びさつていつてしまった。

若者は、遠く高く果てしなく飛びつづけた。風の渦に巻き込まれた若い騎士^{きし}にとって今や勇気だけが唯一の武器であつた。

かなりの距離を飛ぶと、風の谷間にいきあたり若者はうまく狙^{ねら}いをつけ、張り出している岩場へと降り立つことができた。

「いったい、ここはどこなのだ……」

かなりの高地であつたから、人家を探すのもむづかしい事だと若者は思った。

(もしや、異国まで、来てしまったか……)

若者は翼をつけ、武装したまま慎重に、あたりを探索した。

ひとつ岩場をこえようと、若者はそこに美しい石造りの宮殿をみいだした。

「こんなところに宮殿が……いったいこは、……どこなんだ？」

そこがまさしく空の宮であつた。

彼のような武骨な若者はその存在など知らなくて当然だったが、天上の樂園のような萌黄色の樹々が茂り真白な花の咲き乱れる宮殿にしばし若者は目をうばわれた。

若者は好奇心を押さえることができず、空の宮を探索しようとし、裏庭側へまわりこむと、すぐに、水の湧きだすような音に気がついた。

「はて……」

音のする方へ足を進めると、若者はそこで目の前に広がる情景に息を止め、立ち尽くした。

石畳の広がる中庭の中央に水霧をただよわせる泉が湧き出でている。

水霧の向こうにはかすかに人影が映っている。若者は目を凝らした。

かすかに聞こえてくる女の歌声、それは、若者も知る故国の唄である。

涼しげな風が吹いて全てがあらわになると、そこには、一人の美しい乙女が水浴する姿があった。

(……女神なのか……)

立ち尽くす若者に姫が気づいたのはしばらくの時がすぎてからであった。

姫の目に若者が写った。

背に白い翼をつけ、陽にやけた逞しい四肢、涼やかな眼のその男は、瞬きもせず、こちらをみている。

はじめてみる父王以外の男であった。

いや、その時、若者を「男」であると理解したのかどうかは定かではないだろう。

姫は泉からあがると、そのまま、なにも纏わずに若者の傍までゆつくりと歩んだ。

豊かな濡れた髪が姫に纏わりつき、水滴を滴り落とす。

若者は魔法にかかったように息もできず、身動きがとれなかった。

ただただ、心臓だけがかかってないほどの鼓動をうち、それを押さえることはできなかった。

姫は無垢な瞳で若者を見上げた。

「おまえさまは、いったいどなたなの？ どうやってこの宮へ？ まあ、そのような翼をおつけになって……まさか、天からお越しになったお方なのですか？」

姫の鈴の音をころがすような無垢な声を聞き、若者はさらに緊張の度を高めながらも、考えた。

（もしや、このお方は、王が至宝ともいわれて大切になさっている、姫君……。そうだ、そうに違いない……）

目の当たりにした数々の神秘的な光景がようやく理解できはじめた。

「わたくしは、王の精鋭部隊、空の騎士軍のものでございます。演習中に不測の事態でこちらまで流れついてしまいました。知らぬ事とはいえご無礼いたしました。」

と、その場に最高の敬意を表す様式で跪いた。

「まあ、お顔をあげてくださいな。」

姫は柔らかい手を若者の頬にあてた。若者の日に焼けた顔がさらに紅潮した。

姫の髪からは、ぽたぽたと滴がおち、若者の髪や首筋をぬらした。

姫は若者の顔を見つめた。彼に触れる手指から、あたたかい血潮を感じ、なにやらない

ようなない感情が自分の中に湧きあがっていることに姫は気づいた。

それは、かつてない甘く、狂おしい、支配しがたいものだったが、その正体を計り知ることができなかった。

そのとき、コツコツと石畳を歩く音がして、近くまで女官達のくる気配を察した姫は、はっと我に帰り、跪く若者に小声ですばやくいった。

「人がきます。そつとお帰りになりなさい。そうでないときつと大変なことになりますわ。あなたなら、できるでしょう。」

若者は跪いたままうなずくと、『ご免』とその場を駆けさり、その後、羽ばたきの音がした。

軽やかな羽ばたきの音を聞いて姫は「ホウ」と安堵の息をついた。

やってきた女官達は、泉から出たままの姫をみて、あわてて、衣を被せた。

姫の身体は震えていた。女官たちは寒さのせいとおもい、「部屋に火を焚くように」といいつけ、姫の身体を温めるようあわただしく支度をした。

だがしかし、だれも姫の心の内に生まれた渦巻くような暖かい感情に気がつく者はなかった。

夜になっても姫の心は乱れたままであった。

「あのお方はいつたいたななのでしょう？ うつくしい方だったわ。翼をつけられたお姿はまるで隼神はやぶさしんのよう……」

と、うつとりとあらぬ方をながめたり、鏡に見入ったり、衣ひのすそを揺ゆらしながら部屋を歩き回ったりとおちつきのない様子であった。

心がこんな乱れ方をするなどこれまでの姫には一度もなかったのだから……あたかも己おのれの身のうちに、別の生き物がうごめいているようなまめかしい感情の湧き上りを、どう御ごしていいのかは、巫女ふじよである姫自身わからなかったのである。

空の宮から隊きかんへ帰還した若者として、気持ちはおなじであった。

「この世での最上の女性、いや、女神にあってしまったのか……」

そうおもうと、無事に帰還きかんしたことを喜んでくれる上官や仲間の言葉など上の空なのであった。

宿舎へ帰り、一通りの装備を解き、休息の許可を得ても、神経だけが高ぶり続けている

のである。

「もう一度なんとしても会いたい。」

若者は強く願った。

（しかしどうやって？）

翼の武具をつけ勝手に隊を抜け出すことはできない。では、あの高い、空の宮までどうやって登っていけばいいのか……。

（なんとかなるさ。）

若者は夜をまつた。

日が落ち、夜が訪れた。今宵は満月。若者は、情熱の赴くまま闇にまぎれ、空の宮をめざし歩いていった。

（俺はいつたいたいのだ………）

空の宮へ向かう道すがら、自問するも、答えはでない。しかし、若者の歩みは前へ前へと加速を増してゆくのであった。

若くして空の騎士軍に選ばれた彼は、故郷にいるころから、武人としての際立った才能

をあらわしており、将来の出世も囑望しよくぼうされていた。

そのため、幾多いくたの若い娘達からの甘い誘いなど日常茶飯事にちじょうさはんじだった。

日に焼けた彫りの深い顔、しなやかな体軀たいく、涼しげなまなざしでどんな娘も大抵は若者のおもうままであった。

（女など、誰もこんなものなのだ。……）

若者はいつもそうおもしろい、それでいて、どこか醒めた自分を感じていたのであった。

ようやく、空の宮の真下にたどりついた。

そそり立つ岩壁がんぺきが若者を見下す。

この高みをこえねばと、岩肌いわはだを登りはじめたが、鍛え上げられた若者をしても困難な崖がけは、自然の要塞ようさいともいうべき、鉄壁てつぺきの守りであった。

わずかな岩の窪みくぼみや角に指や足をかけて身体を運びあげ、ようやくあと少しのところ、宮殿の窓灯まどあかりが手に取るようにみえるほど近くまで登って来たものの、そこから先は手をかけるどころすらもなさそうだった。

若者の屈強くつきやうな腕も、そろそろ限界を示すようにピリピリと痙攣けいれんし続けていたが、立つて

いられるほどの小さな足場をようやく見つけられたのでそこにひとまず休息することにした。

満月の光で空の宮の様子がはつきりとうつしだされ、バルコニーに人影が見えた。

「姫だ。」

若者は息をのんだ。

（どうか、たのむ、気づいてくれ……）

願いを込め、指笛ゆびふえで「チィ」という音をたてた。

その願いが届いたのか、姫はバルコニーから身をのりだし、若者のいる岩場に視線を落とした。

一目で、昼間の若者だとわかった姫は、息のみ、小さな声で呼びかけた。

「いったい、どうやってここまでこられたのです。あなたというお方は……」

「心のままに参りました。あなたにもう一度おめにかかりたくて……」

熱い視線がお互いをつらぬいた。

銀色の月光が二人に降り注ぎ、この距離をもどかしく感じさせた。

姫は結い上げた豊かな長い黒髪をほどき、若者に向かってたらした。

「これを伝っていらっしやい」

髪は命あるもののように、しなやかにゆるやかに若者の前に下りてきた。

若者が、かぐわしい髪をつかみ、掌てのひらに巻きつけると、なにやら不思議にあたたかなものが若者の軀からだを、腕を胴みぞを、そして足へと貫き、すると思ひもしなかつた跳躍力ちようやくりょくがわきあがり、強く岩場を蹴けりあげ、そこからはいとも簡単に一気に姫のバルコニーに辿たどりついた。

若い二人はみつめあい、手を取り、いだきあつた。

月明かりの下、もう言葉はなにもいらなかつた。



「巫女まじふである姫は男との愛をしってしまったのだ。」

老人は、それまでの口調を急に緩ゆるめ、またホウと遠くに視線をおよがせた。

（なかなか上手い語り口だ。）

旅人はおもった。

（これはきつと、彼の若き日の恋の物語なのであろうな。老人の回想と伝説との混在か

……。

旅人がそんな分析を思い巡らせていることが老人につたわったのだろうか、睨みつけるようなキツしたまなざしが老人の目にもどってきた。

老人は、ビクツとする旅人にかまわず話を続けた。



若い二人の愛はとどまるところを知らなかった。

夜毎、若者は姫を訪れ、姫はその激しい情愛を受け入れた。

蜜月ともいえる時間を二人は過ごし、朝日の前にくちづけ、夜までのしばしの別れを惜しんだ。

それは、誰にも決して明かすことのできない秘密の恋であった。

若者の愛を受け入れた姫は、さらに美しさを増し、霊力はむしろ、いまだかつて無いほどに高まっていた。

初めて知った愛の喜びが放つ光に姫は包まれ、その輝きは、いつまでも隠し通せないの

は無理からぬことであつた。

（姫様はどこか変わられた……）

そのうち、老女一人が、そのことに気づきはじめた。

（王に御相談するべきかどうか……しかし、この宮でなにがおこるというのだ。）

悩んだ挙句、ある夜老女は、バルコニー脇の小部屋に潜み、寝ずの番をして姫の様子を
覗^{うかが}うことにした。

その夜も、遅くに姫は、バルコニーへ出た。

（はて……）

不審におもう老女をよそに姫は髪をほどき風に漂^{たぐひ}わせた。

チィと小さな音がすると、姫は待ちわびたようにあでやかに微笑^{ほほえ}み、その豊かな黒髪を
バルコニーから垂^たらした。

（なんと……）

老女は固唾^{かたず}をのんだ。

髪をつたわり、美しい若者が軽々と飛び込んできた。

熱い抱擁ほうようをかわす二人に顔をそむけ、そつと老女はその場をさつた。

（なんということ。たいへんなことになつてしもうた。………）

姫の変化をただ一人かぎとつた程の直観力のある老女とはいえ、目の前で起こることを直視することも、ましてや制する勇氣もなかったのである。

翌朝、老女の口により、姫の恋は王の知るところとなり、その驚き、怒りは天地をつらぬくほどであつた。

たかだか、一兵士ごときが、かけがえのない姫を汚したのである。

（許すわけにはいかぬわ……）

王は老女に代々王家に伝わる秘薬ひやくをもつてくるようにいつけ、自身は一番の強弓こわゆみを用意した。やじりの先には秘薬ひやくを含ませ、そして、夜をまつた。

「他言たごんは無用むようじゃ」

老女は黙つて頷うなづき、しずしずとその場を去つた。

そして、王は夜をまつた。その日は夏至げし。一年で一番夜が訪れるのが遅い日である。

王にとつても長い昼の時間が過ぎた。

普段通り、王宮での執務の後、空の宮で過ごし、日暮れ前に一度王宮にもどるふりをし、空の宮のバルコニー脇の大木の枝の中に潜んだ。

(王ともあろうものが、あさましいまねを……)

背中に強弓をたずさえ、自嘲気味に呟いてはみるものの、この目で全てを確かめなければ気がすまない。できれば、その下郎をこの手で引き裂いてやりたい。そんな猛々しい気持ちに支配されていた。

いつものように深夜、姫はバルコニーにでた。チイという音にあでやかに微笑む姫をみて王は心乱れた。

(そのようなうつくしい顔をして、つまらぬ男をむかえるのか……)

身を隠していることも忘れそうになるほど王は激情にかられた。王は大きく息を吸い、渾身の力で弓を引いた。

(下郎めが、思い知るがよいわ……)

姫が垂らした髪を、若者が手にした瞬間、ヒュンという音が、闇夜を引き裂いた。

一本の矢が、若者の身体のちょうど心臓のあたりを射抜いた。

矢の先に塗られた毒が若者の身体に入りこみ、瞬く間に全身を駆け巡った。

(ひ・め……)

若者は、姫を見上げるだけが精一杯で、そのまま、夜気の中をまっさかさまに落ちて行つた。

「いやああああ………」

姫の声が闇を引き裂き、その身は今にも宙へと後を追わんばかりであつた。

「なにをしておる、しつかりせぬか！」

飛び出してきた王が姫の両肩を掴み、叱咤し、強く抱きしめた。

王の腕の中で、姫は呆けたように涙を流した。

「とうさま？、なぜ……？ ああ、お気づきになっていらしたのね。

それで、あの方を……ひどい、ひどうございます………」

王はなにもいわず、姫を抱き上げ、寢所に運び、横たえた。

「もうなにもいわぬ。眠るのだ。そしてすべてを忘れてしまうのだ。わかったな。すべては、終わりののだ。眠るのだ。」

みどりひとみ
碧の瞳からは、涙が溢れては流れた。

（人の世にこのような悲しみが他にあるものか。それとも、どんな悲しみもいつかどこかへ流れて行くともいうのか……………）

一番短い夜が明けようとしていて、新しい朝の光がいつもと変らぬ風景を照らし出しはじめていた。暁の光に蕩かされるように姫は意識を閉じ、眠る事で己を封じこめた。

以来、姫の心は氷のごとく、何事にも動じなくなつた。

しかし、空の宮の日常は以前とかわることなく、続いたのである。

あの夜ことは、王、老女以外誰も知らず、姫は変らぬ靈力で国の運氣を見取り導き、この国の栄華は続いた。

姫自身、哀しみが癒えることはなくても、虚ろな心と魂を凍らせながらも、変らずこの先を生き続けていける己を不思議におもった。すべてが終わり、いや、元にもどつただけなのであるから。なにもなかったころにもどつただけなのだから。姫の心の中はそのよう

な言葉で凍りつけられていた。

（愛というものが、突然に終わりを迎えたとしても、わたしをとりまく時間はなにも変わらずに流れて行く。所詮、私とはこういう女、人と人との魂のふれあいに酔いしれることもできぬ女。）

ただ、あの宵のような満ちた月の輝きを浴び、封じた記憶の蓋が開こうとするときだけ、虚ろな心は軋むような痛みを覚えた。

王も「すべては終わった」そうおもっていた。

いや、そう思いこみたかったのだろう。

姫の氷のように研ぎ澄まされた表情を目のあたりにし、留まるところを知らぬ、恐ろしいほどの霊力の高まりを感じながら、その凍りついた心に気付かぬふりをせざるをえなかった。

それ以外はなにもできぬということもわかっていたのだから。

また血の通い合った親子でありながら、その絆が何処かで潰えてしまったことにも気付かぬふりをする事しか、王の平静を保つ手だては無かったから。

ある蒸し暑い夏の日、王は老女から告白をうけた。

さすがの老女も歯切れの悪い物言いであった

「王よ、姫様は、……まもなく……御母おんははになられます」

王は変わろうとする表情を押し殺すため、だまつてうなずいた。

「身体をいとうように、と……」

顎あごを緩慢かんまんに動かし、人払いをし、広間にはだれもいなくなつた。

王は心の中で亡くなつた妃きの名をぼつりと呼んだ。

「あれが、わたしの元へ来たのもちようど今の姫の年頃としがらだつたか……」

なつかしい、あでやかな妃きの姿が心の中にひろがつた。

厳しく人を射るような王の隻眼せきがんから涙が流れた。

王は妃きの死以来はじめて泣く自分に気づいた。

春を前に姫は美しい女兒を産み落とした。黒髪の深い碧みどりの瞳ひとみの赤子であった。

赤子を抱いだき母の顔になつた姫は王にいった。

「とうさま、わたくしも母になりました。親になりたいま、とうさまのお気持ちもいくらかわかるようになりました。もう、とうさまを恨む気持ちもすてとうございます」

王は姫の手をとり握り締めた。

心をそのままに現す言葉が見つからず、姫の瞳ひとみを見つめることしかできなかった。

（わたしを、許してくれるのか……）

「とうさま、あのことがあつてから、わたしの靈力はこの世の闇やみの部分をも感じ司ることができるようになりましたのよ。」

この闇やみの力をも、これからはとうさまのお役にたてとうございます。とうさまの愛するこの国の榮いさかえのために、いつまでも、いつまでも」

王は、声を詰つまらせた。王はこの一年程でずいぶん歳をとったようにみえた。

人の心はその容貌ようぼうに容赦ようしやなく貼り付くものである。今や何層くじゅうもの苦渋の相が王の皮膚となつてその顔を包んでいた。

「でも、とうさま、あなたも、すこしだけ悲しみを知ってくださいませね。」

姫が唇をぎゅっとかみしめると赤い血が滴り落ちた。

姫はその細い指で、王の顔に触れ、引き寄せ、血の滲にじむ自らの唇で王の唇をふさいだ。

王の喉がゴクリとなり、血の香りが王の鼻腔から体内に広がった。その時、宮殿に一陣の風が舞いこみ、姫の豊かな髪を吹き上げた。その艶やかな黒髪はまるで生き物のように宙にうねり踊った。

かつて、愛しい男を招き呼んだその髪は、その男を殺めた王を怨むかのように次第に王の身体を絡めとり縛りあげはじめた。その髪は漆黒から血の色に変わり、王は声にならない悲鳴をあげ、呼吸は止まりその身体は小刻みに痙攣し、脳髓に激痛がはしった。

自分という存在が微塵に碎かれていくのを感じる中、王には姫の囁きが確かに聞こえてきた。

「とうさま、どうか、わたしの子どもたちの行く末をおまもりください。この国は代々巫女がおまもりするでしょう。」

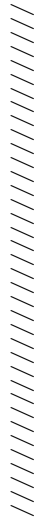
とうさまは、この国の砂の数ほど齢を重ねてそれを見守ってくださいませ。

巫女の血がいつまでもいつまでもとうさまの齢をささえますゆえ」

「いかがなされました、王よ！　どうか気をお確かに！」

大臣の声でようやく我に帰る王であったが、身体に残る痺れが先ほどの光景を蘇らせる。

だが、姫はなにこともなかったように静かに微笑^{ほほえ}んでおり、その髪は少しも乱れてはいなかった。



「それが、この国の巫女王^{ふじよ}伝説ですか。」

陽^{ひざ}はかなり傾き、陽射しも少しは和らいできた。

「ああ……………」

老人はうなずくと眠るような表情になった。

（歴代女王の国か……なるほど興味深い話だ。「国産み伝説」や、「起源伝説」の類^{たぐい}は各地に語り部とともに存在するものだからな。）

旅人は知識人らしく考えを整理した。

老人はなかなかの語り部であつたので、旅人の知的好奇心は存分に満足させられた。

「では。」

旅人が礼をいい、そろそろ出発しようとしたときバザールがざわめきだした。

「お成りだ。お成りだ。」

人々が沿道にひざまずき、ひれ伏す。女王の顔を拝むことは許されてはいないのだ。

夏咲きの薔薇をかかえた御付の少女と衛兵達を従え騎乗の女王が近づいてきた。

（わたしも余程、女王に縁があるらしい）

旅人も沿道にかしづき、女王を迎える人並みに加わったが、不思議にも行列は旅人の前で一度歩みを止めた。

（なぜだ？！）

旅人は、好奇心をおさえられず顔をあげ、女王の姿を盗み見た。

（ほう、やはり女王は碧の瞳か……）

旅人は想像どおりの結果に満足そうな笑顔をなんとか、押し殺した。

少女から純白の薔薇を一本うけとった女王は、その茎を咥え、赤く薄い唇をそのトゲで傷つけた。

女王の真つ赤な血が思いの他多くしたり、薔薇の花を赤く染めた。

沿道の人々の間にはなにかしら神秘的な緊張感がただよっていた。

小さく小さく、人々は各々になにかしら祝詞のりとのような言葉を唱えている。

旅人にはわからぬ異国の言葉のそれはさざなみのようにひろがり、響きを生み出している。さながら、女王を崇拜、賛美する儀式ぎしきのようだ。

血のしたたる薔薇ばらは痛みに顔をしかめた女王の手から、凜りんとした言葉と共に沿道へとなげられた。

あたりには、ますます厳肅げんしゆくな雰囲気が高まり、その後大きな鐘しやうの高らかな響きがして、女王の行列はそのまま歩みを続け、去っていった。

緊張の解けたバザールには、またもとの喧騒けんそうがもどってきた。

ふとみると、先程の老人が女王の薔薇ばらを胸にいとおしげにいだいている。

「夏至祭げしさいの幸運な男……というわけか……」

旅人は、ほほえましくおもい立ち去ろうとした。

が、そのとき、旅人は見た。老人が恍惚こうこうの表情をうかべ、薔薇ばらからしたたる血を啜すする姿

を……

心に冷い、恐怖に似た痛みが走り抜けた。

気がつくと、老人はどこへいったのか、そこにはいなかった。バザールの喧騒けんそうがすべてをかき消したかのように、どこにも老人の姿はなかった。

（砂の数ほどの齡よわいか……）

旅人はこうして巫女王伝説の国を後にした。

巻き上がる砂塵さじんが女の髪のように旅人に纏まとわり付き、夏至げしの太陽がいつまでも、歩き続ける旅人の背中を射さしていた。

「闇やみの部分を知ってしまった女ほど、哀しいものはございますまいなあ」

女は語りを終えてから、ぽつつと付け加えた。

「では、また明晩………」

アージュヴェダは、今この時、眼に前にいるはずのこの女の通りすぎてきた時間の全て

を知りたいと強く思った。



第七夜

十九の夏

「おまえさま、未来という言葉を御存知でございますか……」

女の言葉にアージュヴェダは小さく頭かぶりを振った。

「まだ、見ぬ、自分。とても、いいでしょうか……」

第七夜 十九の夏

彼は小高い丘から自分の国を見下ろしていた。

月が輝き、夜の空気は昼間の熱気を忘れたかのように、ひんやりしている。

三方を海に、後方を険しい山岳に囲まれた小さいが強い国、幾度いくどの他国の侵攻もはねのけてきた国。——それが彼の国だった。

長らく他国との交わりを拒み、独自の文化を尊重し誇ってきたため、彼の国の人々は、みな、褐色かつしよへの肌、黒髪ひつみ、黒い瞳を有していた。

彼の国、といつても、彼が支配者であるはずはない。彼の名はラウ、単なる一兵卒、それも明日ようやく兵としての資格を得る、あまたいる若者の一人に過ぎなかった。

それは「十九の夏の儀式ぎし」と呼ばれるもので、国中の十九才の男達が首都へと集まり、兵

として入隊し、国への忠誠を誓う儀式であつた。

(いよいよ明日が儀式だ……きつとこの国が俺を必要とするはず……いつか、きつと)

その想いがラウの心を熱くしていた。

なにげに肩まで無造作にのびた髪を指でもてあそび、ふと、ラウは故郷のことに思いを馳せた。

月が山の稜線を映し出している。

(俺のいた村からも、あの月がみえているのだろうか)

月の光が映し出すラウの容貌は、この国のそれではなかつた。

炎のように赤い髪、光の角度によつて鮮やかな翠から、真紅に色を変える瞳。

故郷の人々は、それを人を惑わす「魔性の瞳」と呼び疎んだ。

ラウにとつて際立つたその容姿はなに一つとして自ら望んだ物ではなかつたし、もちろん父親のことは、顔も名前も知らなかつた。

彼の故郷はこの国にあつても辺境の地であつたが、そのさらにはずれで、幼い頃より母とともに二人きりで細々と暮してきたのである。

故郷の人々は、彼の容姿をして、決して仲間として認めなかったばかりか、ことあるごと
にこの母子を——異形の子ども、そんな子どもをうんだ女——と侮蔑ふべつの対象にした。

「どうして、俺だけ黒い髪じゃないんだよ、こんな瞳なんだよ！」

幼かったラウが、そういつて嘆く度、母は、その黒い瞳に悲しみの色を湛たえて、ただただ、彼を抱きしめるだけだった。

その度、ラウは母の豊かな黒い髪をぎゅつと握り、そして涙をこらえるのであった。

彼は知リたかつたろう。この髪ひのこの瞳ゆえんの所以を。そして自分たちを捨てた父親のことを。幼いラウにとっては母のやさしさだけがすべてであつたし、それは、いつまでも変わらぬものと疑いも無く信じていた。

しかし、ラウが十になったある祭りの夜、賄い女まかなとしてかりだされた母は、めずらしく、泥酔でいすいし、そしてその瘦やせた顔に、痣あざをつくつて歸つてきた。

「かあさん、どうしたんだよ！」

眠らずに、母の歸りをまつていたラウはその姿に驚きかけより、抱きついたが、思いもよらず、母は我が子を擁いだこうとしないばかりか拒絶し、つきはなしたのである。

ラウの耳の奥になにかが、響いた。



(おまえなんか、いらぬ。もう、いらぬ……)

乱れた長い髪が顔にかかり、母の表情はよくみえなかったが、酒くさい吐息まじりの言葉がそんな風に聞こえたような気がした。

十ほどの少年には、母親になにがおこったのか、推し測るすべもなく、ただ、そこに立ちつくし、優しかった母親が、酔いつぶれて眠りこむ様をみつめるしかなかった。

(俺のこの髪が、瞳が、かあさんをも不幸せにするのか?)

やりばのない哀しみが、ラウにとり憑き、(おまえなんか、いらぬ……)母にそういわせた「なにか」に対する怒りが彼の身体のかなにわきおこってくるのがわかった。

(俺は、強くならねば……。誰よりも強く。誰もが、俺のことを認めるように、いつかきつと……)

ラウは、自分にそう誓った。

その夜は、うすい麻の布を寝所から持ってきて、床に横たわる母親の傍で一緒に横になった。

いろいろな物思いで眠れなくなってしまったラウだったが、母親の背中にそおと頬をくっつけて、その鼓動を聞くうちに、ようやく心も落ち着きはじめた。

(眼が醒めれば、誰よりも強い男になっていけばいいのに……)

幼いラウは、母親のぬくもりのなかでまどろみながら、そうおもった。

それ以後、ラウは自ら誓ったように、己を鍛えることを考え続けた。心も身体も鍛えぬくことが、それ以後の彼の中のすべてを占めていた。

母親は、そんなラウの誓いを知ってか知らずか、普段どおり温かく彼をみまもっていた。あの夜のこととは、なかったかのように、これまで過去を断ち切ってきたと同じく、日々の暮しの雑事に追われてすごした。

七年の時が流れた。

ラウも十七才。もう一廉の男になっていた。この国の、誰にも必要とされる強い男になろうとしたラウは、故郷の自然の中で、山を相手に、滝を相手に、自ら厳しい修練をかさね、憑かれたかのように、身体を精神を鍛えぬいた。

(あと、二年で、儀式だ。それまでに、もっともつと強くならねば)

ラウのような貧しく、後ろ立てもないような男が、自分の存在を強く知らしめるには、強

い兵士になる他はない。そのことが彼にはわかっていたから、日々の糧を得るための労働はもとより、なお一層の試練を自分に課し、その辛さと孤独にもたえた。

そんな姿を冷ややかに見つめる村人達の視線などは、彼にとっては、もはやどうでもよくなっていた。

「十九の夏」の儀式。そのことだけがラウの心を占めていた。

しかし、ラウがただ一人愛した母も、ある秋の日の明け方、彼が一人で生きていける事を見届けたのか、自らが機を織りつくった彼の儀式用の衣服と飾り帯を残しその家まででいった。

母の夜具が、もうそのぬくもりをなくしたところに、ようやくそのことに気づいたラウは、涙があとからあとから溢れたが、なぜか、またいつか母が帰ってきてくれると信じて疑わなかった。

自分さえ、「必要な人間」であると認めてもらえるようになれば、きっといつかあさんは誇らしげに帰ってきてくれるはずだから。

そう信じて、ラウはたゆまず故郷の自然を相手にそれまで以上に自らの身体を精神を徹底的に鍛え抜いた。結果して、その修練は実を結び、十九の夏の頃までには、誰もが見上

けるほどの長身で隆々たる筋肉の屈強な体躯の男となった。

その身体には、どんな相手をも打ち倒す腕力、誰よりも疾く、長く駆ける脚力持久力を兼ね備えており、そして、何人にも勝る強靱な精神力をも宿していた。

今の彼にとっては、例えば、三日三夜歩き続けることや、一晚中泳ぎ続けることなども容易いこととなっていた。しかし、未だ誰からも必要とされない孤独感からは解放されてはいなかったのである。

彼に出会う人達はみな、壮健な彼の肉体に目を奪われ、驚きの眼で彼を見上げる。

しかし、異彩を放つその髪と彩りを変えるその瞳を目にしたとき、誰もがその黒い瞳に嫌悪の色を浮かべる。

赤い髪が、人を惑わすというその瞳が、こんなにも強くなったラウを未だに孤独へ追いやるのである。

（おまえなんか、いらない、もういらない）

忘れていた、いや、忘れようとしたあの吐息まじりの声がどこからか聞こえてくるような気がするのだった。



強い風が吹いて、海の潮を巻き上げ、小高い丘に立つ彼の髪までも濡らした。

「夜があれば、儀式^{ぎし}だな……」

この言葉を今日幾度^{いくたび}つぶやいただろうか。

ラウは潮^{しお}を手でぬぐい、今度は未来の自分に想いを馳^はせた。

とうとう、自分は兵士になるのだ。そしてだれよりも強い兵士となり、誰もが自分のことを認め、必要とする、そんな日がもう、間違い無くやってくるのだ。

彼はそれだけを信じ、その思いに憧^{こころ}れつつけてここまできたのである。

海風に吹かれていると、高揚^{こうよう}したところも軽くなり、なにやら口笛でも吹きたくなる気分だった。

ぼつりぼつり灯る、眼下^{がんか}の街のあたりをみているうちに、ふと、昼間の街の情景を思い出した。

辺境^{へんきょう}の地の故郷を出発して三日目に都に入^いったラウは、ものめずらしさから、街の中をふらふらとさまよい歩いた。

国のあちこちから、明日の儀式^{ぎし}に参加するあらゆる若者が集まっており、なかには、豪奢^{ごうしゃ}

な衣に身を包んだ者達もいて、粗末な身なりの彼にからかいの言葉をかけた。

「おい、みろよ。山からでてきた猿も、布切れを巻きつけて、儀式に参加だよ。」

「おい、猿、餌をやるから、芸をしてみろ！」

母がてずからみずから整えてくれた衣服も飾り帯さえも、彼等からみればお粗末な代物にみえただけであらう。

しかし、その美しい衣からのぞく腕も足もラウのそれとは比べ物にならぬほど、弱々しかった。

（皆、この程度か。ならば俺は他の誰よりも、きつと強い。）

ラウは自分の目ではつきりと確信したのであった。

この儀式と時期を同じくして、みどり国では他国との交易をわずかな期間だけ行うことになっていた。

バザールには、彼の見たことのない珍しい品も数々でていたが、彼はそんなものに、目もくれなかった。

ただ、明日を待ち望むだけであつた。物売りの声もざつと雑踏もさらには、自分を見つめる奇



異の視線さえもラウには届かないほど、ただ、ただ、明日にむかって気持ちだけが高まっていたのだった。

昼間の興奮を、海から吹く風がゆるやかにさましてくれる。

ラウは、太い幹の木を選び、軽々と登ると、そこを今宵の寝所とした。聞こえてくる波の音が彼をやすらかな眠りへといざない、すべてが静寂にのみこまれていく。

張り詰めた精神がほどけていき、わすれていた疲労感が心地よくラウにのしかかった。

「明日になれば、俺は、きつと新しい自分に………」

海風に吹かれながらそう思い、彼の瞼は閉じた。

……………

突然に、女の悲鳴が夜の闇を切り裂き、まどろみかけていたラウの安らぎを破った。

木の上で半身を起こし、声のするほうを見やると、うつすらと人影が見え隠れする。

わずかな月光からみえるのは男達が三人、悲鳴の主は、どうやら若い女のように、抵抗

する声から女はどうもこの国の者ではないようだ。きつとバザールの女であろう。

意外にも彼は、なにも感じなかった。これからどういうことがなされようかということが、彼にわからぬはずはない。なのに、彼の心はもちろん身体も動こうとはしなかった。

あの遠目にも高そうな衣装は昼間にバザールですれ違った男達だろう。

「愚かな奴等だ……儀式の前夜にあさましいことを……」

そんな奴等に関わるつもりは毛頭なかった。

ラウは、見たくも無いものから顔をそむけ、また瞼を閉じようとしたとき、にわかに月の光が明るくなり、するどい月の光が地を這った。

そこに、必死で逃れようとする女の長い髪——鮮やかに赤い髪——が浮かび上がった。

彼の何がそう命じたのであろうか、驚くほどの早さでラウは木から飛び降り、女の元へ駆けより、なにもいわず、鋭い視線だけをなげ、男達の前に立ちはだかった。

予想通り、男達は彼の登場に苛立ち、その髪を瞳を見て侮蔑の言葉をはいた。

しかし、三人がかりでも、男達はラウの相手にはならないのは明らかであった。

男達は一斉に彼に殴りかかるも、結果して、足も腰も立たなくなるほど打ちのめされ、いざりながら暗闇のなかに消えて行くしかなかった。



(ふうう……)

乱れた息を整えラウは、木の根元にへたりこんで隠れている女の元へ近づいた。

女は、呆^{ほろ}けたように、彼を見上げたが、自分は助かったのかどうか、見極めかねているようだった。

(この男は、味方なのか、それとも、あらたな敵なのか……)

ラウも思った。

(こんな時、女は、どうするんだ？ 喜んで俺の胸に飛びこんでくる……のか……?)

しかし、ラウにはどうにもわからなかった。

互いの思いが巡^{めぐ}るうちにも二人の間には、微妙な距離ができてしまい、そのまま、黙って向き合ったまま静かな時間がながれた。

月の光の中、ラウは、ぶしつけなほど、女の姿を見つめていた。いや、目が離せなかったといつていいだろう。

ラウにとって、初めての同じ色の髪を持つ人間の存在だった。

その瞳^みも同じなのだろうか……知りたい気持ちを押さえることができず、ぎこちなくも、

彼は女に近づき腕を伸ばし、触れようとした。

しかし月の光が雲にさえぎられたそのとき、女はするつと身をひるがえ翻し彼の腕から逃れた。

ラウはなぜか、いままでのどんな拒絶よりも深い拒絶を受けたような気がした。

どのような侮蔑ぶべつの言葉もこんなにも彼を傷つけたことはなかっただろう。そのくらい心を精神を鍛えてきたつもりだったから。

(こうまでしても、俺はうけいられないのか……)

(おまえなんか、いらぬ。もう、いらぬ)

(この俺は、そんなにも、必要のない人間なのか……)

(おまえなんか、いらぬ。もう、いらぬ)

月はまだ雲に隠れていて、女の表情は見えなかった。

ラウは精一杯、平静をとりもどそうとし、なにもなかったかのように揺れる心を収め、元のねぐらへ戻ろうとした。

(こつこつものなのだ。……)

そう思うものの、チリツと胸の奥が痛むような気がした。

自嘲^{じちやうざみ}気味に彼が女に背をむけようとしたとき、また月が雲間から光をさしこめた。

そのとき、砂地^{すなち}を軽やかに蹴^ける音がし、気配を察した彼が振り向くと、女は彼の胸に飛び込んで来た。

動揺するラウにかまわず、女はそのしなやかな手を彼の首に回し、彼にくちづけた。

「……………」

女の赤い髪は、陽光^ひのような蜜のような匂いがして、柔らかな唇と舌の感触が彼の思考をあつという間に奪った。

「な、なにをするんだ……」

ぎこちなく、だが力任せに女をつきはなしたが、胸の鼓動^{こどう}は止めることはできなかった。息もできぬほどの感情に支配されてなお、彼は女から目がはなせなかった。

一方強い力で突き飛ばされた女はよろけ、膝からくずれおち、地面にへたりこんでいた。そのとき、女の懷^{ふたへ}から、まろやかな音色^{こほ}が零れ落ちた。

ラウはふしぎそうに、女をみつめた。

女は、懷ふところに手をいれ、なにか——その音の源みなもと——を取り出し、少し微笑ほほえんで、彼に手を差し出している。

何かを受け取れといわんばかりに。

ラウは、首を振った。

なにも欲しい物などないのだから。

再び女は、彼に近づき、二人はその赤い髪同士が触れ合うほどに寄り添った。

ラウは、もう動かなかった。いや、動けなかった。

女の近づいてくるまま、なすすべもなくそこに立ちすくしていた。

息をすることすら、わすれていたかもしれない。

女はラウの手をとり、小さな木の箱を握らせた。

その小さな木の箱はラウの手の中で、また夢のようなまろやかな音をわずかに奏かなでた。

彼を見つめる女の瞳ひとみは深い深い翠みどりであった。ラウもその瞳ひとみを憑つかれたように見つめた。

そしてもう一度、できれば、抱きしめたかった。

しかし、互いの翠の瞳が月の光をうけ、真紅に変わったとき、女は風に衣のすそをひるがえし、走り去った。

……彼にわからぬ、短い異国の言葉を残して。

不思議とラウは、女を追わなかった。いや、追えなかった。

なにかその場に縛りけられたように、動けなかった。

ラウの手の中に残った小さな木の箱。そつとふたを開けると、さきほどの音がつらなり、旋律を奏でた。

（これは、いつたいなんという代物なのだ）

辺境の地に育ち、己を鍛え上げることしか考えずに生きてきた彼に、その小さくも心ときめかす物の存在は、ただただ不思議であつた。

小さな箱から零れ落ちる音は、ラウの今まで耳にしたことのない、まろやかで、水の玉が柔らかな若葉の上をころげるような音だつた。

しかし、その音も、すぐに聞こえなくなつた。

（なぜ？ なぜだ）

ふと、箱の横についていたちいさなネジに気がつき、ギリギリとまわした。するとまた、あの音色がこぼれる。

音が止む、ネジをまく、音色がする。

音が止む、ネジをまく、音色がする。

これだけのことを幾度^{いくど}ラウは繰り返したろうか。

まるで、なにかに憑^つかれたように。

ラウは、この小さくやわらかなものの虜^{とりこ}になったかのように武骨^{ぶこつ}な指で、小さなネジを何回も何十回も、ギリギリまわした。

やがて、ばちん！ と音をたて、ネジはちぎれてしまった。

箱はラウの手から零^{こぼ}れ落ち、地面にあたり、命^{いのち}尽^つきるように、壊れてしまった。

いくつもの歯車が、土の上にこぼれ、気がつけばラウは地に這^はいつくばって、細かな細かな歯車を薄い月明かりの中、懸命に拾^{ひろ}っていた。

そんな彼の頬^{ほお}を知らぬ間に、いくすじもの涙が流れていた。

身体^{からだ}の力がするするとぬけていくのがわかり、地にすっと膝をつき、天を仰いだ。

これまでに聴いたことのない音が彼の魂^{たましい}を揺さぶったのだらうか。

ラウに、自分のなかで御することのできない感情が渦巻いていた。

強くなることをみを考えていた男が、今このような儂^{はかな}げな感情にすっかり支配されているのである。

それはあつというまに己^{おのれ}の手からこぼれおち失つたもの——まろやかな音色——に對する哀^{かな}しみだけではないただろう。

なにかが、きつと解りかけたはずだったのに……己^{おのれ}が本当に望み、欲するものが解りかけていたところで、砕け散つてしまったことへの、もどかしさがそこにあつた。

それでもまちがいなく解つたことは、彼の知らない世界がこの海の向こうに確かに存在することだった。

心が身体が今や、そちらへいこうと動きはじめていて、とめようもないうねりが、流れが、身体の底からわきあがるのを感じるのだった。

「俺のいる場所、俺の存在すべき場所はここなのか？ この地にしがみつくと、本当に意味はあるのか……」

天啓^{てんけい}のように、そんな思いが身体を貫いた。

ラウの手のひらにすっぽりおさまるような小さな木の箱が奏^{かな}でる、短い、美しい音色が

彼に——屈強な肉体と強靱な精神を得た彼に、新しい世界の存在を指し示したのである。

ラウは零れ落ちた箱の部品のすべてをひろいあげ、懷へしまった。

そして、空を仰いだ。

月は明るく輝き、彼を見守っているかのようだ。

飾り帯をキュツと締めなおし、眼を閉じ、静かに息をすい、そして彼は海岸沿いに走り出した。

自らの鼓動が血流が脈打つ音がはつきりとわかり、彼はどんどん加速していった。そして、ざんぶと黒い夜の海を切り裂き、飛び込んだ。もう、なにも迷いはなかった。

この海の向こうにある国へいこう。そこできつと求めるか何かにであえるはずだ。

一晚泳ぎつづけることなど、今の彼にとっては容易いことだった。

黒い黒い海を静かに、しかし力強く泳ぎ渡る彼を、月が道しるべのように、一筋の光で

照らしていた。

あたかも彼の行く末を導くように、祝福を授けるかのように、いつまでも、いつまでも。



アージュヴェダは「未来」という言葉を、つい正直に知らぬと答えてしまった自分が嫌になってしまった。

女があらゆる世界の話をするたび、自分の世界の小ささを実感してしまう。

（俺の未来か……）

自分の未来にはこの女がこの先ずっと存在することを漠然とおもった。

婚礼とは、女を娶るとは、そのようなものときまっているのに、そして、この女が存在が自分の中でこんなにも大きくなっていることもわかつているのに、未だに、誰かと共に暮すという事実がしっくりこないのになにかしら妙な気もしていた。

（これまで長いことずっと俺はひとりきりだったものな。）

ひとりきり……その言葉が脳裏を掠めた時、なぜか、なにか大事なことを捨て置いてきているような念がうずまいた。

なにかをおもいだそうとしたとき、

「では、また明晩……」

女の声に、思考は霧散してしまったのであった。

七番目の夜も、そろそろ明けようとして、アージュヴェダは小さくあくびをして、抗^{あらが}いがたい眠りの渦^{うず}にすいこまれていった。



第八夜

水みずきり
霧

いつものように、丘むこうの谷あいから汲^みんできた湧^わき水で水瓶^{みずがめ}をみたすと、アージュヴェダは、素焼^{あさはち}きの浅鉢^{こじやり}に小砂利^{こじやり}を敷き、水をそそいだ。

そして、水辺で摘^つんできた薄紫の花をつけた草を鉢^{はち}に根つかせ、光り苔^{こけ}を敷き詰めた。鉢^{はち}を部屋の窓辺にかざれば、そこに小さな水辺の景色が出来上がった。

（俺^{おれ}がこんなことをするようになるなんて……）

夜毎^{よごと}来る女のために、ただ待つているだけというのも芸^うがなからう。

「女^{おんな}つて奴^{やつ}は花がすぎだからな……」

そういえば、年かさの仲間がそんなことをいつてた気がする。

殺風景^{げつふう}な包^{ぱく}の窓辺^{まどべ}だけが、仄^ほかな灯^{あかり}りを受けてほんのりと柔^ならかく光をはなっていた。

「ただいま、まいりました」

柔^ならかい声で女がはいってくる。

（氣^きづいてくれようか……）

アージュヴェダは、子どものようにどきどきした。

「あらまあ、かわいらしい花ですこと。おまえさまが摘^つんで来てくださったのですか？

まあ、まあ、嬉しいこと。……一つ頂いてよろしいかしら」

水を入れた鉢からそおつと花を手折たおっている気配がする。

「まあ、ほんに、よい香りだこと。ふふふ。」

女の無邪むじゃ気な声を聞いてアージュヴェダは、目隠めかくしの中で、微笑ほほえんだ。

(やはり、女つて奴は花が好きなんだ)

女は、花を一枝胸むねに擁いだくように、ものがたりをはじめた。

第八夜 水霧みずきり

どのくらい想いを巡らせていただろうか。若き王は大臣おしの声で我に返った。

「ようやく、森林の国が我が草原の国の領りようとなりますな。この十年ほどで、近隣諸国ほぼ手
中にされ、我が王におかれましては、将まじに常しえの繁栄でございますな」

「うむ」

隻眼せきがんの王は頷うなずいた。幼少の頃戦いくで片目を失い、たった一つ残った眼は、見る者の心まで

も射ぬくようだと言われている。王には空を翔け飛ぶ隼神が憑いているという噂もあるほど、若さに似合わぬ豪胆かつ伶俐な勇敢さをもちあわせていた。

そんな王の治めるこの草原の国は、豊かな湖と川に恵まれた緑豊かな豊穡の地であった。あすの婚礼ののち、二つの国は一つになる。

深碧の森林の国を手中に治めることは亡き父王の時代からの長年の念願であったし、かの国の姫君は麗人との誉れ高いと聞く。

これで、近隣七方国をようやく自分のものと呼べるようになるのだ。

(それなのに、なんなのだ、この胸に残る得体のしれない感情は?)

「それにしても、王のお身体の回復は目を見張るものでございましたな……あのような深い傷をうけて湖に落ちていかれ、一箇月の間、行方も知れず、皆のものが酷く心配したことが、もう、ほれ、嘘のようですな。」

(そうなのだ。俺は……)

うつすらと、硫黄の匂いが漂ってくるのがわかる。これは幼い頃から慣れきった匂い。こ

の国を見下ろすように立ちはだかる火の山の放つその匂いはこの国にいることをなによりも実感させてくれる。

王は自身がどのようにしてこの宮に戻ってきたかは、大臣おとどから聞いたことからしかわからない。王が湖に落ちた位置のほぼ対岸に、傷一つない姿で打ちあげられていた……

そのことしか、わかっていない。

家臣達が昼夜、国の内外あらゆる場所を探していたというのに、ほぼ一ヶ月の間行方がしれず、ある時、湖岸に横たわっていた王を家臣の一人がみつけたのである。

もちろん、その場所は幾度も搜索されつくした場所であった。

宮殿に運ばれ、ゆるやかに覚醒かくせいしていく王は、慣れ親しんだ硫黄いわうの匂いに五感が急速に回復するのがわかった。

（俺は、帰ってきたんだ）

「王よ。よくぞ無事おもどりで……」

大臣おとどを始め家臣達が口々に喜びの言葉を伝える。意識は少し霽もやがかかっている。

半身はんみを寝台から起こし、あたりを見まわす。窓からみえる空、緑の木々、遠くに光る湖

面——それは、いつにもましてきらめいていたし、聞こえてくる湖の漣さざなみの音はあいかわら

ず、たおやかな女のささやきのようだ。

(なにも、かわっていない……ここは間違いなく俺の国だ)

そして、強い硫黄いおうの匂いがそれを確かに感じさせてくれる。

「王よ、昨今は、火の山が、不穏ふおんな煙を吐くことが、多くなりましたぞ。お氣がつかれたばかりの時に申し訳ございませぬが、いかがなさいますか、御婚礼の御予定は……あと二週間後ではございますが。王の御身体のこと考えれば、日延べということも、止む無しとおもわれますが……」

その言葉に鋭い眼光がんこうを投げて王は応えた。

「俺は、このとおり大儀たいぎ無い。すべては、予定通りに、だ。」

まったく精悍せいかんで伶俐れいりな王に戻ったと周りは誰もおもった。

しかし、王にとっては、あまりにも不確かなことの多い、それでいてなにやら懐かしげな思いだけが脳裏のうりに残るものの、失われた取り戻せぬ記憶の時間が多すぎて、それがどうにもどかしかった。

以降、王はゆつくりと、日々記憶たどを辿ることを続けた。むしろ好んでそういう状況に自

分を置いたともいえよう。

婚礼の前日でもあるこの日もそうであった。

（あの感覚は、いったいなんだったんだろう。俺は、どこで、なにを……）

ぼおっと、視界がやわらぎ、またもや王は記憶を辿り、思考の渦に吸いこまれるように落ちてゆくのである。

確か、それは狩の途中だったはずだ。

手負いの野獣にわき腹より肩口をえぐられ、俺は湖に叩きつけられたのだ。

その時意識は、まだあつたはずだった。

「落ちていく……」

そんな感覚があつたことを覚えている。傷口から血が噴出し、俺は朱の帯のように湖底へとただ沈んで行った。

（この程度の傷で、気を失うものか……）

強く、念を集中させたが、どうも霧散^{霧さん}してしまう。

そしていつしか、空気なのか水なのかわからない、そんな流れの中をいつまでもいつまでも俺は流れていた。

そのうち流れはゆるやかになり、柔らかに俺を包み、ようやくある場所に留まった。そこは本当に芳^{かんば}しい場所だった。

俺は身体の痛みを水の中に放っているかのように、そこで安らぎまどろんでいた。

「王よ、明日の晴れ姿を楽しみにしていますぞ」

この声に、また記憶への思索が途絶えさせられた。

（集中力を途絶えさせられるほど、不愉快なものはないな。）

王は優秀だが気の効かないこの大臣^{おとし}、かつての自分の爺やに苦笑した。

「うむ、おまえも、いろいろとご苦労であった。下がってよいぞ。」

（これ以上こやつに記憶を辿^{たど}るのをじゃまされると、俺はきっと激昂^{げききよう}してしまうだろう。そうなれば、きつとこやつを酷く殴ってしまうだろう）

王はすんなり、大臣^{おとし}が下がってくれるように、わざと丁寧^{ていねい}なねぎらいの言葉をえらんだ。

大臣^{おとし}は案の定一札をすると、御簾^{みす}の外に下がった。

王は一人きりになると、ホウと息をはき、黒テンの毛皮を敷いた椅子にその身を大きく委ねた。

気の強そうな唇をきゅつと結び、またも記憶を辿りはじめた。

王は「行き先の定まらない」この記憶の渦に入っていくことを特に好んだ。

（あの時俺を、痛む身体を癒したものは……）

細い、細い、白い糸をたどるように、あの時の心地よさをもとめるかのように、王は記憶をたどることを続けた。

柔らかな水はとてもいい香りがした。痛みが少しづつ身体から排出されるのがわかる。

とてもとても、心地よかった。こんなに安らいだことは今までにあつただろうか。

幼い頃から戦塵の巷を彷徨し続けた俺にとって、このやすらぎは稀有なものであつた。

人から慈しまれ、そのなかで安心することの心地よさよ。

そうだ、なにか聞こえてきたんだ。歌？ 言葉でもなく、そう、直接頭の中に語りかけ
てくるもののように。

「酷く痛むでしょうに。お気の毒に。でももう大丈夫。ここでゆっくりおやすみなさいまし

な。その傷がいえるまで。」

俺は幼子のようにその言葉のとおりに意識をやわらかく閉じていった。

水の塊かたまりは俺を球状につつま守っていた。

ある時、俺は己おのれを包む水がゆつくりとある形を作り上げ始めたのに気がついた。

俺を擁いだっている水の塊かたまりのまわりを同じく小さな塊かたまりが少しづつ少しづつ、くつつき、離れ、

緩ゆるやかな曲線を描くように形をとりはじめた。名のある彫刻家——その姿は見えない——が

不思議な塑像そぞうを作り上げているかのようなのだ。

そして俺はその「像」の内側から、「像」が形をなしてゆく様さまを、ゆつくりとみている。

まるで生まれ来る赤子のようにまどろみながら。

そうしてできあがった形は、女……のようだった。いや、はたしてそうなのか？俺がそ

う思いこんだだけなのか、……わからない。

水でできた女……そんなものがあるとして、俺はその後もそこに擁いだかれていた。

それは本当に不思議な存在だった。しかし、それはいつも優しく俺に語りかけてきた。

言葉さえ慈しみて柔らかく響く、俺を包み込むその存在。

いったいそれがなんであるかは、依然としてわからなかった。

しかし、わからなくもその存在を俺はしっかり感じていたし、欲してもいた。

いつまでもこの温もりのなかに安住したいとさえおもったろう。

ともあれ、俺はそのなかで、癒^いされ、回復したのだ。

女が俺に語りかける。俺が言葉を返す。それだけの行為が俺を癒^いし、力を与え生かしてくれた。

俺の身体はみるみる活力をとりもどしていった。

そして、身も心もこの上ないほどに、満たされて行った。

「俺は、若くして部族^{ぶぞく}の王^{わう}だ。望むものはすべてこの手に握^{にぎ}むことさえ可能だ。」

俺はいった。

「汝^{なんじ}を俺の元へ伴^{とも}いたい。ここより、出でて俺の宮へ」

水が形つくつた女はおどろいたように俺を見つめた。初めて見る、その女の悲しそうな表情だ。そして頭^{かぶり}を振ると女はいったのだ。

「わたくしは、ここからは、この姿のままに何処^{いずこ}へとも出ることはかないませぬ。」

「なにゆえだ。」

「わたくしは、異形の身でございます。あなたの世界では、この姿を形つくることは、叶わぬことですもの」

「なにを、申す。お前はここにいるではないか。今ここに。わたしはこの眼に見える物しか信じはしない。それに、この俺が、汝なんじを欲しているのだ。どんなことをしても、汝なんじを伴いたい。俺が強く念じて手に入れることのできなかつたものはないのだから。なにか、きつと方法があるはずだ」

女はうつむいている。俺は女を引き寄せ強く抱きしめた。

「人の世に暮したいとは思わぬのか？」

早鐘はやかねのような女の鼓動こどうが俺の鼓動こどうと重なった。

「では、あなた。あなたの世界へ返った後、わたくしのことを思い出してくださいな。」

あなたの一番幸せな瞬間にわたくしのことを思いだして、そして、わたくしの名前を呼んでくださいな。そうすればその時、わたくしは、人の姿に、人の現世うつしよで生きられる身となりましょう。……

わたくしの名前はアシュウ、さもなくばわたくしは……」

記憶はいつもここでかき消え、途絶え、王をもどかしくさせた。

(しかし、こうも思い出せぬこともあるのだな……)

夜が音もたてぬように静かに更けていき、今宵の月の光は射すように強い。眼下の湖がゆるやかにその光をうけとめて、水霧までがその月の光の色に染まっているようだ。

(俺の記憶はまるでこの水霧のようだ。儚く、この手に確かに掴むこともできない……)

あてもなく記憶をたどることに王はそろそろ、倦怠感をおぼえはじめ、心を空にしてしまおうべく月の光満ちる夜気を、水霧立つ湖面を、いつまでも眺めていた。

そしてその空気にいつしか朝の陽の光が射しこめはじめたころ、まだ見ぬ花嫁と新たに君臨する深碧の森林の国を思い描き、新たな高揚感と期待にみたされて王はそのまま眠りについた。

そして婚礼の朝が来た。

王はしきたりにのっとった衣装を身に着け、戦いの化粧をほどこし、花嫁を迎えた。

民族の楽が奏でられ、花嫁が到着したことを告げていた。

終わることなく繰り広げられる祝宴、楽の音、賛辞、諸国からの貢物にも王は満足して

いたし、隣に坐す花冠と絹の衣装でかざられた花嫁の美しさは、噂以上であった。

長い睫を伏せた花嫁の横顔を垣間見、己の心の高ぶるのを感じた。

そのとき、湖面からキラキラと細かな水霧が天にむかつて立ち上りはじめ、そして人々の元に降りそそぎ、おりからの陽射しとあいまって大きな虹をつくった。

人々は歓声をあげ、水霧はやむことなく、柔らかに地上に人々に降り注いだ。

「ほう、湖からの祝福でございますな。隼神のみならず、湖の神をも、王はお味方につけられたか……王が御帰還以来、とみに水霧があがりますのもそのせいかな」

大臣が大仰に賛辞してみせた。

ならばと、王は立ち上がり、大きく両の手を天にむかつて手を差し伸べた。

すると、水霧が王にだけ向かってふりそそいでいるようで、皆からは、神々しくも王がそのまま天に上っていくようにみえたのであった。

それは、王にとって至福の時であった。

望む物を全て、その手に治めることのできた喜び―その喜びに王は身を浸していた。

（あなたの一歩しあわせな瞬間に、わたくしのことを思い出して……そして、わたくしの名前を呼んでくださいな……）

王の記憶の中のそんな言葉はもういずれか、彼方へとおいやられていたのだろうか……

水霧は滴みずきりとなつて王の頬ほおをなでた。

（わたくしはここにおりますのに……あなたとの約束を信じてここにおりますのに……）

まこと、人の世よの言ことの葉はの頼りなさよ………）

水の精アシュウは、見えない姿——水霧みずきりとなり、人の世に在ることを乞い願ひ、婚礼の間中王の傍かたわらにいたのだつた。

しかし王は水の精のことは思い出しはしなかった。それは王にとつては、裏切りでもなんでもなかった。未来だけを見つめる王にとつて、「過ぎたこと」はただ「過ぎたこと」でしかなく、終わってしまった事——ただそれだけのことだつたのだから。

婚礼の間中、水霧みずきりはたえまなく人々の上にふりそそいだ。それを祝福とうけとる王をはじめとする地上の民。いまや、水霧みずきりは、水の精につつまれた王の記憶をさらに、洗い流すだけでしかなかった。

（あなたの、一番幸せな瞬間に、私をおもいだして……）

……わたしは、本当に、王の傍に在りたいと願ってきたのだろうか……

アシュウは、自問した。

そして、アシュウは王と水底に過ごした時間をおもいだしていた。

傷ついた王を擁ぎ、癒し、とめどない暖かな気持ちの湧き上がりを感じていたあの時、あの時だけは、王は確かにわたしだけのものだった。

二人同じ時をたゆとうたことは、この身にこの心にも確かに刻まれているのだから。

……わたしは、本当に、人の形で王の傍に在りたいと願ったのだろうか……

答えはでなかった。

水の精アシュウは、湖に戻った。そして、その姿を二度と地上に現すつもりはなかった。

その後、湖は、あれほどきらめいていた水霧をあげることもなくなった。

王の婚礼は、形の上では「征服した国の王女を和平の証として献上させたもの」であったが、二人は互いに惹かれあい、ともに至福の時を過ごしていた。

ほどなく妃は愛らしい姫君を産み落とした。

王は、人生において、新たな宝を一つ手にいれたことを実感していた。

盛大な祝いの宴が、昼夜の境無く、延々と繰り広げられた。

「王よ、我が王の御運の強さには、まことに恐れ入りますなあ」

祝い酒で、酔い心地になった大臣が、何度も同じことを語り掛ける。もはや無礼講、宴もたけなわである。

「御婚礼のあと、すぐさま、姫君のご誕生でございますものなあ。それにつけても、姫君の御器量のよろしい事、母君様の美貌をそのまま引き継がれたかのようにすなあ」

「うむ」

王も気をよくし、さらに杯を重ねる。

「さて、王よ、姫宮さまのお名前はいかがいたすおつもりでしょうか」

「うむ。この世で、一番気高く美しい名前を……と考えてはおるのだが、なかなか良いものがおもいつかぬ。大臣なら良い智恵がうかぶか？」

「いえいえ、わたくしごときの思いつくものなど……しかし、王の御武運と御妃様の美貌を受け継がれるにふさわしい名前となると、むづかしいものですな。」

その時、暗闇の中、湖面を強い風が吹きあらい、歌うような漣の音がして大臣がその音

に耳を傾けいった。

「さて、御婚礼いらい、ぷつぷつと消えてしまった水霧を、凶兆だの、吉兆だのという輩がおおございましたが、王の今のご幸運をみるに、あれはやはり、吉兆でござりましたの
でしょうな」

「一番、それにこだわっておったのは、大臣、お前ではないか。」

俺は何時もいうようにな、この眼に見えるものしか、信ぜぬわ。この手で掴めるものだけが、俺のすべてだ。」

宴は夜おそくまで続き、星がまたたく夜空をあまたの篝火が赤々と照らしだしている。

王は、杯を傾けながら、幸福の絶頂にある自らのために、そして我が嬰兒の為に誓った。
もつともつと強く富んだ国をつくりあげようと。

王が新たな誓いを胸に擁いたまさにそのとき、突然の地鳴りが宮殿をおそった。

「敵の夜襲か!!」

たえず、自国を守り他国を奪ってきた王が本能的にそう思ったのも無理からぬことだった。
しかし、今の王を襲う力のある国など、どこにもないはず……

そして、次の地鳴りがきたとき、全てが明らかになった。

火の山が、この国を見下ろすあの火の山が巨大な火の柱を天に向かつて吹き上げたのだ。さらに続く地鳴り、揺さぶられる大地、降り落ちる火の粉。

巨大な火柱は漆黒の夜空を焼きこがし、炎の流れが渦のように、大蛇のように王国めがけていまにも押し寄せてくるのがわかる。

慌てふためく人々、逃げ惑う人々。盛大な祝宴は一瞬にして、阿鼻叫喚の坩堝となった。

「逃げよ！ 皆の者！ なにもかも打ち捨て、逃げるのじゃ！」

そう言い放つと王は、大臣に妃を、乳母に嬰兒を托し、安全な場所に逃げるように指示し、自らは馬にのり、側近を引き連れ、逃げ惑う民の避難の指揮の先頭に立った。

王の顔や頭、身体を選ばず、無数の火の粉が襲いかかる。

息をすれば、その肺のなかまでも焼けつくような熱気の中、王は懸命に我が民を指示し導いたが、人知のおよばぬ自然の強大さの前には、王の存在などちつぽけな、取るにたらないものであることは、明白であつた。

みるみる間に、王の領土は焼き払われ、大地が死にゆく様が見える。

川は次々とその姿をなくし、緑の沃野は次々と紅蓮の炎に蝕まれる。

「俺の、俺の国が……俺がこの手で、力で作り上げたこの国が……」

王は馬を蹴りながら、己の無力感に押しつぶされそうになっていた。

止める側近の声もきかず、がむしゃらに馬を蹴った。

領土を狂ったように馬を走らせる姿は、この焼け尽くされつつある地を、なおも我が統べるべき地であると確かめようとする本能なのだろうか。

焼けた樹が倒れこみ、王の行方をふさぎ、馬からさえも落ちころがり落ちた。

それでも、王は己の足でがむしゃらに炎の中を駆けぬけずにはおれなかった。

「俺の……国が……燃えて、燃えてゆく」

いつしか王は、湖畔の小高い丘に一人立ち尽くしていた。

眼下には、燃え、煉獄となり、崩れゆく我が王国があった。そして、王は今一人だった。

妃は、姫は、どうしただろうか。どうして、傍をはなれてしまったのだろうか。

大臣は、忠実に従ってくれた家臣達は、どうしただろうか。

皆、あの紅蓮の炎に喰われてしまったとしても不思議ではない……

身を心を、その魂をも斬られるような、痛みが王の全身を貫き、王の隻眼から、とめどなく涙が流れた。

王は、今、子どものように、この恐怖からただ逃げたかった。怖い夢をみたあとのように、なにもかも忘れさせてくれる術はないものか……

呆けたように、ずぶずぶと王は湖に歩をすすめた。

湖水が焼け爛れた王の皮膚をするどく刺して、新たなる激痛が襲いかかるのがわかった。

……痛い……痛い……痛い……

この痛みを癒してくれるものはないのか……

……痛い……痛い……痛い……

……誰か……俺を……

王は湖水に崩れるようにうずくまった。たった膝ほどの深さであつたにもかかわらず、もう立っていることもできなかった。

……痛い……痛い……

王はそのまま、流され、湖底にゆるやかに沈んでいくばかりだった。ゆっくりと静かに落ちてゆく王。そして、湖の中は炎も熱風も、恐ろしい物はなにもない、

蒼ざめて透明な、やわらかな世界だった。

……痛い……痛い……

湖底に小さな水の球が産まれ、沈み来た王を柔らかく受けとめるべく少しずつおおきくなり、そして王の痛む身体を擁いだいた。

（ああ、あなた、また、そんなにも傷ついて、さぞ痛いでしょうに……）

「ああ、俺を擁いだいてくれるのは、いつも汝だ。ここは、いつも、ここちよいな……ああ、お願いだ、あの時のように女の姿となって、俺を擁いだいてくれぬか……」

「わたくしは、もうなんの姿にもなれはしませぬ。あなたがわたくしのことを思い出してくださらなかったのですもの。名前をよんでくださらなかったのですもの」

それでも王は水の球に擁いだかれていた。じつとここにいるとあの時のようにゆるやかに癒いやされてゆくのがわかる。

（ここに、ずっといたい。ここならば、なにも恐れるものはないのだから）

そうおもったのもつかの間、静寂せいじやくの流れるこの湖底にも業火かつかが国を焼き尽くす音と熱が伝わってくるのがわかった。

「俺の国が、俺の国が消えてしまう……」

身を魂を斬られるような痛みが再度王を貫いた。

「俺の国が……俺の全ては……なくなってしまうのか。ああ、アシュウ……俺を助けてくれ、アシュウよ……」

王は水の球にしがみつки、幼子のように泣きじゃくった。

（ああ、あなた、あなたの国が焼き尽くされる、その時はじめてわたくしを、わたくしの名前をよんでくださるのね。）

アシュウの心を表すかのように水の球は、更に一層大きく膨れ上がっていた。

（……それでもわたしの名前をよんでくれた貴方……）

冷たくて、冷たくて、それでもいとおしい……あなた……）

王を包む水の球はゆるやかに浮上し、王を湖畔へ運びあげた。

やすらかに眠りにおちている王を安全なところに横たわらせると、水の球はやわらかくほどけ、ぼんやりと光をはなち、アシュウはひととき、女の姿を形作った。

アシュウは横たわる王に頬をよせ、短くくちづけた。

(それでも、いとおいしい、あなた……)

もう一度光をはなつたアシュウは自ら天高く飛翔し、そこから一気に湖の水を空まで引き上げ、天高い位置から鋭角に地上へと降らせた。

それはアシュウの持てる力の限りであった。

湖水は瞬^{またた}く間に、業火^{ごうか}に逆巻^{さかま}く国中に激しくふりそそぎ、白い渦を巻き上げ、炎を包みこみはじめた。

ほどなく、紅蓮^{ぐれん}の炎は蒼白^{あおしろ}き水によつて封じこまれ、火の山の噴き上げる火柱も、もぎ取られ、ブスブスと忌^{いま}わしい音を残すのみであった。

やわらかな水霧^{みずきり}が国中にたちこめ、炎の恐怖は、そうして終わったのである。

焼け尽くされた原野には、やさしくいつまでも水霧^{みずきり}が降り注ぎ、大地はその一滴さえも全て残さず受け止めようとしていた。

やがてその地に緑の命を宿す事を確かにするために。

もう一度生きる事を確かにするために。

焼き尽くされた王国は、今静かに再生を念じて、すべてのものがやわらかな水霧^{みずきり}にいだ

かれていますのだった。

王はようやく目覚めた。降りしきる水霧みずぎりに頬ほおを撫でられ、意識を取り戻し立ち上がり、湖畔こはんの丘の上から我が国をじつと見据えた。

全ての命が奪い去られたかのようにみえたが、降りしきる水霧みずぎりによつて新しい命が今また与えられているということが、今や目にはみえなくても、王にははつきりと理解できた。「アシュウよ……」

声にだして、その名を呼び、二度までも自分を救つてくれた水の精の事を思い出した。うつすらと覚醒かくせいしかけた折りに、アシュウの薄く光る姿をみたような気がした。

水の精アシュウがその命と引き換えに我が命、国を救つてくれたことは、目の前に広がっていたはずの湖が涵かれ果て、広大な砂丘さきゅうに変つてしまっていることが、なによりも明確に教えていた。

あの豊かな湖。この国の人々を潤してくれた美しい湖はもうないのだ。あの煌きらめく水霧みずぎりを立ち登らせていた蒼あおざめて透明な湖は永遠に失われてしまったのだ。王の隻眼せきがんからは、涙がとめどなく流れては落ちた。

その後、王は大臣わしじを始め、生き残った家臣たちと再会し、妃きさきが姫おのれを己が命と引き換えにして守ったことを聞かされた。

（俺の愛したものは失われ、俺を愛してくれたものも、もう帰らない……）

王の胸を新たな哀しみが貫いた。

「我が子よ、ここに、美しく豊かな湖があったことを、いつかお前に話してきかせよう。この国を守った水の精のことを後世に伝えるためにも。」

王は、妃きさきが守りぬいた小さな命を抱きしめ、新たな生命いのち溢れる国家を再建することを、妃きさきとアシュウの名にかけて誓った。

その後、姫君はアシュウと名づけられ、父王にたいそう慈しまれて育ったという。

美しい湖は涸れ果てようと、水の精の名はいつまでも人々に語り継がれ、王とこの国の人々の心から消える事はなかったという。

柔かな水に擁いだかれ、そこに安住する心地よさ。

アージュヴェダにそんな体験はあるはずもなく、まして、彼はこの内陸の部族ぶぞくの民のほとんどがそうであるように、大きな湖もおおいなる水の流れも眼にしたことはない。

(まるで、俺が水に擁いだかれたように、ゆるやかな、やわらかい気持ちになった)

女のものかたりの何がアージュヴェダを心地よくさせたのか、彼にもよくわかつてはならず、ただ女の話の余韻よゐんに漂ただようだけであった。

「水の精は、名前をよんでもらって、どんなにかうれしかったことやら……」

女はそういつて、しなやかな衣擦きぬずれの気配とともに今宵こんしやうも立ち去ろうとした。

(そうだ、名前だ……)

アージュヴェダは、おもわず立ち上がり、駆けかけより、その名前を問おうと唇を動かしかけたそのとき、女は手にしていた薄紫の花をアージュヴェダの唇に押しあてた。

「今は、まだ……」

女の吐息といきまじりの声とともに、花粉の粒子が鼻腔にゆるやかに広がり、頭の奥が痺しびれるような感覚に落ちた。

「では、また、明晩……」

その声は、いつもより艶かしく聞こえた気がした。



第九夜
夢の女

その晩はめずらしく蒸し暑く、肌にまとわりつく湿気がアージュヴェダの不快感を煽っていた。

「ものがたりの夜」も、もう九日目。

ふと、これはこのまま終わらないこととして、いつまでもいつまでも続いていくのではないか……という思いが頭をよぎる。

（長いな……）

とりとめのないことなのに、なぜか考えが広がってまとまらず、彼の額にはまた汗がたまり、ゆるやかにその顔ににじんでいく。

（喉が渴いたな。）

そうおもったとき、包の布が上がり、一塊の湿った夜気とともに花嫁の気配がした。

「今宵はすこし、遅そうになりました」

第九夜 夢の女

（わしはいつたいなにをやっておるんだ。ゴウゴウというこの音はなんだ……）

水の音か？ そうだ、水の中をながれておるんだ。なぜだ……わしは確か……そうだ、鯨獲りだったはずだ。なんで、こんなところを流れているんだ。鯨のヤツに海に引きずり込まれたか……

男は、自問しながらも白い水流に翻弄されて、どうにも抗うことはできなかった。ただ、男をつつむ水は海のそれではなく、透明で、なんの味もなく顔に肢体に巻きつくように男をつつみこんでいた。

水は痺れを作りだし、手足の感覚はまったくなかった。

激しい水流のなかであつたが、不思議と呼吸はできた。周りを見ることができた。ただ、身体の内はきかず、流されていくだけであつた。

（えーい、海の中など、自由自在に動き回れたわい……）

生来の気の荒さで、この身の不自由さを毒づくが、どうにもままならない。

男はチツと舌打ちし、不本意ながら激しい流れに呑みこまれるままであった。耳に聞こえるのはゴウゴウという音だけ。着衣のほとんどが、水の流れに剥ぎ取られており、裸で流されて行くことにも男はイライラしていた。

さらに、大きな水の渦が男に向かつてかぶさってきた。

一瞬で、息ができなくなり、なにも見えず、なにも聞こえなくなった。長い時間が過ぎたような気がした。

ふと顔面が空気に触れたような感じがして、男の五感がよみがえったが、まだ身体は水の中にあつた。

先程と違うことは、男の腹だけがぶつかりと水面に浮き、空をみあげているということだった。淡い陽射しも感じる事ができた。

水の流れは、さらさらとゆるやかになり、男の身体もゆっくり流れていった。

(いったい、なんだっていうんだ。わしはどうなっちまったんだ)

水に流されながら、男は相変わらず自由にならない身体を呪った。

男は、村で一番の腕の良い鯨取りであつた。

粗野、蛮勇、強欲そして気短かな性質で、自分の為には他人を欺くことも少なくはなかつた。

鯨獲りの腕がよいことで、周りが一目おくことも、男を気ままにふるまわせていた。

獅子のような強面であり同時に非常に好色な男であつた。

水面を流れて行く男の目に、美しい湿地帯が広がるのがみえた。

（おお、これで、水からでられるか。）

しかし、あいかわらず、言葉は発せられなかつた。さらさらと水の流れる音は心地よいはずだつたが、男にはなにもかもが不愉快だつた。

ふと、流れ行く男の目に一人の女が細い足を水にさらし、すわっているのが映つた。

（おおっ、なんとかあの岸边につかんか……）

男は強く念じた。そのせいかどうか、ぶかりぶかりとただよいながら男は女のほうへ流れて行つた。

（よしよし、まあ、なんとも情けない姿だがいいだろう）

ようやく男は女のほんの際まで流れ着いたが、やはりぶつかりと腹を浮かせたまま身動きはとれなかった。

女はさして驚きもせず男をみつめた。

浅黒い肌の瘦せぎすの女の衣服はみすばらしくひきちぎれていて、濡れて肌にびつたりとはりついていた。

まだうら若いといつてもいいようなその女は、片方の乳房やうきだしたあばらがみえるほどの半裸で、男は、早くその濡れそぼった長い髪の間隠れる女の顔がみたかった。（こんな目にあつてゐるんだ。きれいな女の顔でも見んとやつてられん……）

そんな男の気持ちが必要な水音をたたせた。

バシヤツ…………

女はビクつと身をすくめ、その顔があらわになった。

(なんてこつた。ひどい醜女^{しごめ}じゃ…………)

げっそりと痩せこけた頬^ほ、顔中のあばた、うつろに濁った瞳^{ひとみ}。乾き荒れた唇。

男は眼をそむけたかったが、それすらも自由にできなかった。

(こんなところに、もう用はない…………こんな醜い女^{みにく}などみたくもないわ)

男はさつきと行き過ぎてしまいたかったが、どうしたことが、先程からの流れはぱたりと止んでしまい、男はそこにぼっかり浮いたまま女の顔を見上げる格好になってしまった

のである。

女がしゃがれた声でひきつったように笑い、いった。

「まあまあ、おまえさま、ここで、わたしの話をお聞きなさいまし」

水に足をひたしたまま女は歌うようにいった。

「誰かが、こうやってながれてくるのを、ずっとずっとまっていたのじゃ」

女は男の気持ちなどおかまいなしに話を始め、男は情けない格好で女を見上げ、いわれるままになった。その時間はあたかも拷問（ごうもん）のように感じられた。

「わたしの名前はウヅメと申します。このとおりの醜女（しうにょ）で、小さい頃から醜（みにく）いといつては親にも疎（うと）まれるほどでございました。しかし、わたしがいったいなにをしたというのでしょうか。醜（みにく）く生まれついたのはわたしのせいではありませんのに。それでも、心ばえを美しくしようなどといったしましたが、それも無駄でございました。誰しも、目にみえる姿しか

愛してはくれませぬ。」

男はうんざりだった。

(こんな醜女の泣き言などたくさんじゃ)

しかし、身体の不自由さはいかんともしがたいものだった。

「いく度、この姿を嘆いて命を絶とうとおもったことか……。

かなしいかな、死に至ることなくここまでながらえましたのじゃ。」

女はためらい傷のある両手首と首筋をみせたが、男はそんなものはみたくもなかった。

「ある時、流れ者がもちこんだ外つ国の毒薬を手に入れ、飲んだのでございます。すると、すぐに臓腑の焼けるような苦しみにつつまれ、ああ、これでこの命を了えることができる。この姿を了えることができると思ったのでございます。次第にわたしの意識は遠く宙に浮

かび、薄れ、透明になり、そのうちたいそう朗らかな気分になりました。それもそのはず、わたしは、美しい白い鳥に姿をかえていたのです。美しい翼をおもうさま羽ばたかせ、空を斬るごとく飛び、さえずるのでございます。」

（ああ、わかったわかったよ。もうこれで終わりか？ おわりにしてくれ……）

せめてもの抵抗に男は眼を堅く閉じていた。だが、しだいに恍惚感に満ち溢れてきた女の声は容赦なく男の耳へ入りこむ。

「そのとき、一人の男の方が私に近づいてくれました。そして私に手招きをしますのです。

『ここへおいで』と。

それはそれは、りりしく、美しい御方でした。

わたしは、その御方の腕にとまりました。

『なんと、うつくしい鳥なのだ。』

そういつてその方はわたしを愛でてくれました。

誰かに、愛されることなどわたしにとっては初めてでしたから、それは無上の喜びにおもえました。たとえ、それが鳥のすがたであつたとしても。

私たちはいつも一緒でした。朝も、昼も、夜も。

わたしは、あの方の為に歌い、あの方の廻りを飛び交い、あの方の腕に抱かれて眠りました。しあわせな時が流れておりました。」

（なぜ、わたしはいつまでも浮かんたつきりなんだ。）

自分の滑稽こっけいともいえる姿に男は業ごうを煮にやしていた。

（身体さえ動けばこんな女、痛めつけてやるものの……）

男は自分がこの醜みにくい女を虐しいたげる様さまを想像し、憂うさをすこしでもはらそうとした。

「ある時、わたしに激しい痛みがやってまいりました。それはあの毒をあおったときの苦し

みでした。あの方の瞳ひとみにむかつて、（助けて……）と伝えたくとも伝えられないまま、のたうちまわりました。その挙句あげく、わたしは正気にかえりました。

正気。そう、そのときわたしは、もとの醜みにくい女にもどつていたのです。」

（ああ、そうかい、そうだろうよ。おまえは、醜みにくいんだよ、だれよりもな。へっ。）

醜女しこめの話などで、この男の心が動くはずなどないのであつた。

「わたしは、声をあげ泣きました。

ああ、あれはすべて夢だったのか。

ああ、もう一度あの方に逢いたい。

そして、あの優しい声で愛でていただきたい。

いつまでもいつまでもあの方の腕に抱かれて眠りたかったのに。

そのためなら……そう、どんなことでも厭いとわない。

わたしは心をきめました。」

(きつさと、いつてしまえよ。あの方つて奴のところへよ。わしはもつといい女んところへいくからよお)

「それから、あらゆる毒薬を試しました。

何度かはうまくいきました。でもあの方にお会いできても、それはつかの間。すぐにこの姿に引き戻されるのです。うう……っ」

女ははじめて涙をみせた。唇をぎゅつとかみしめ、顔を歪めて涙を流した。

涙は男を浸している水にポトポトと音をたてて落ちた。

(つまんねえ話だ)

相変わらず男は女から顔をそむけていたままだった。

ひとしきり泣くと、女は、腰まで水につかり、水音をズブズブたてて男に近づいた。

枯れ枝のような、ぐつぐつした指で男の顔をいただき、自分の方に向けた。

そして、喰くわんかなとばかりに男の耳にくちづけ、ささやいた。

ひどい臭しゅう気きがたちこめた。

「ねえあなたは、もう死ぬのよ。だって、知ってる？　もう両足と片腕がちぎれてしまっていないのよ。ほら……ごらんよ」

男の身体にまとわりつく水が針でさすほどに、冷たくなった。

（なんだと！　なにいつてるんだ。わしは……）

男もようやく自分の身体の変異に気づいた。

己の身体が胴かたまり体だけの小さな塊かたまりになっていて、傷口からはうつすらと血が流れ続けている。血は水を薄紅に染め、男は自分の血の臭いをはじめて感じ取っていた。

「ねえ、あんた、わたしも連れて行っておくれよ。このまま一緒に流されて死のうよ……お願い……もうわたし目覚めたくないの。いつまでも醒めることのない夢の中へ……これから……」

女は男の身体へおおいかぶさった。

（いっしょにつれていっっておくれよ……）

水底から大きなうねりが沸き起こり、二人の身体を持ち上げ流した。

（わしが死ぬだと……）

（ばかな……）

（ふざけるな、おまえなんかと死ぬもんか……）

男は流れのなかで女にのしかかり、残された片腕を使い、渾身こんしんの力で、女の首をしめた。

（おまえなど、こうしてやる。）

女の鉤かぎのような爪が男の頬ほおに深くくいこみ、肉をえぐった。ゴウゴウとうねる水流のなかで男は女の悲鳴を聞いたような気がした。

それは、歓喜にも似た叫びだったかもしれない。

（……わしは……、……つく……ものか……）

男の意識も水の流れに吞まれるように、薄れていった。

肉の焦げるような匂いが鼻をつき、男はゆっくりと眼をひらいた。視力がもどるのに時間がかかった。いや、時間というものの感覚が全くとりもどせなかったのかもしれない。

（ここは……どこじゃ、そうじゃ、水の流れはどうなったのだ。）

視界がはつきりするにつれ、そこが、村長の家であることがわかった。

（村へ帰ってこれたんか……）

薄明かりの中に、医術の道具がならんでいる。村長は呪医師だった。

（そうか、やはりわしは……）

男は自分の身体を眺めた。剛の者といわれた男の身体は両足を失いすっかり小さくなり、胴にただ一本腕がのこるだけであつた。

「おおつ、おおおおおつ……」

男は泣いた。押し殺した声で泣いた。自分が声を失っていないことに気づくまでいつまでもいつまでも泣きつづけた。

涙を流しながら、水の中の自分と同じほど無力な今の自分が、更に微塵みじんに碎くだかれていくような感覚に襲われていた。

村長むらおさが男の鳴咽おえつに気づき、次の間から枕辺まくらにやってきた。

「おう、気が付いたか。酷い目におうたことよのう。もう大丈夫じゃ、安心せい。さすがは海で鍛え上げられた身体からだの持ち主じゃ。ほかのもんなら、とうに命をおとしとるぞ。」

村長むらおさは男の生命力せいめいりきを褒め称たたえた。

男は寝台から、残った片腕で半身はんみをおこした。

「水が、水が、ゴウゴウながれてて、わしは、女にあった。ひどい醜女しじめだった。わかんねえ

話してやがった。一緒に死んでくれ、つれてつてくれっていった。冗談じゃない。なんであんな女なんかと……。わし……。あいつの、あいつの首をしめて、わしは帰ってきたんだ。……」

男は、頬ほに指を這わせた。深い傷がまだ、乾ききらず、ジユクジユクとした膿うみをだしていた。

「かえって、きたんだ……」

ぶつきらばうな男の声にかつての力強さはなかった。

「おまえは、死出しでの川をながれたんじやろう。よくかえってきたことじゃ。

身体は、しょうがない。あきらめろ。しかし、おまえの鯨獲いさなとりの知恵と技は他のもんがきつとひきつぐき。おまえはまだまだ、必要な人間じゃ。身体と心をよう休めて、眠れ。なにもかんがえるな。とにかく、眠れ。なにも考えるな。」

呪文じゅもんのように男に語りかけると、村長むらおさは男の身体を横たえさせた。男も呪しゅにかかったように、コトリと眠りにおち、それから、三昼夜眠りつづけたという。

村長むらおさは、部屋の灯りを吹き消し、外へでた。遠くに光る海をみつめて、男の語った水の流れを思い描いた。

めずらしく古傷が痛み、かつて左腕があつた場所を、ゆっくりさすると、村長むらおさの遠い記憶がよみがえった。

「ウヅメは、まだあそこにいるんか……。不憫ふびんな女じゃ。」

そして、この先、壊れて行くだろう男の心をおもった。

「ウヅメに逢うてしまった男は、皆……………」

村長むらおさの前を、白い鳥が青い空を鮮やかに斬きって飛び去り、ビュウと小さな風が舞った。村長むらおさの麻の衣服の前がはだけ、白い羽をかたどった護符ごふの刺青いれずみがこぼれた。護符ごふを避け

るかのようにつけられた古い爪あとを村長は自分の指でなぞった。

(醒めることのない、夢のなかへ……か……)

その後、男は不自由な身体のまま、魂が壊れたかのように呆けて暮らしたという。



今宵も長い語りを聞き終わり、アージュヴェダは、なぜか脈がトクントクンと乱れ打つような奇妙な感覚にとらえられていた。

身体にまといつく汗がいつしか冷えて、自分も先ほどまで渦まぐ水の流れにいたような錯覚さえ生みだした。

「おまえさま、昨晚のものがたりをおぼえてらっしゃいますか？」

アージュヴェダは、コクリと頷いた。

(わすれるはずがないだろう……)

「同じように水底に死線をさまようても、人の宿命は一つとしておなじものはございませんね。おまえさまの宿命もまた、おまえさまだけの特別なものでございましょう。」

アージュヴェダの脈はまだ乱れたままであった。

「では、また明晩」

女の別れの言葉を聞くなりアージュヴェダは、睡魔に掬めとられるように眠りに落ちた。
(俺の夢にはなにが潜んでいるのだろうか……)



第十夜
狼の踊り

（あと、今夜を入れて二夜、か。）

アージュヴェダは、幼な子のように己の指を折って、婚礼の残りの日を確かめた。

今夜で十夜目となる。

しかし、もつと長い間、女の語りを聞いていたような気もする。そして、明晩が婚礼の最終夜となると思うと、どこか名残り惜しい思いもあつた。

女が話す物語は、いずれも、彼が知らぬ世界の話ばかりであつた。あるいは、その一部、または全てが、空想のものなのかもしれない。

婚礼が無事に終わり、女と日々を過ごすようになったら——そんな日がすぐ明後日に迫っているという実感もなかったが——、それら物語を、彼女がいつ、誰から、どんなふうに聞いたものなのか、ぜひ訊ねてみたいものだと思つた。

やがて、馬の蹄の音が外で止まり、今や慣れ親しんだとも言える、あの美しい声がした。

「いれてくださいましな。」

第十夜 狼の踊り

一

そこから先は人が住めぬ極北、地の果てだ、と、人から呼ばれている辺りに、女——名前をソフィと云った——と、その娘アユラは住んでいた。

たしかに、ちやうど二人が住んでいた場所あたりから、わずかに生えている下草もまばらになり、むぎだしになった凍土が、鉛色の空と溶け合う地平まで続いていた。

しかし、それを「地の果て」であると決めたのは、村落をつくった男たちだ、ということ、ソフィは識っていた。

自分と娘が二人で暮らしてゆくのを支える地の恵みは、たとえ僅かであっても、そこを地の果てと呼ぶにはまだまた豊潤すぎるくらいだ、と、ソフィは思っていた。

ソフィは粗末な家の内部を暖かく整え、太陽が空にとどまっている短い昼の間中は外で休みなく働き、夜はランプの油を細くともして手仕事をした。そうして、満ち足りて暮ら

していた。

娘である少女アユラは、母を助け、同じようによく働いて暮らしていた。馬やヤギたちの世話は、大部分がアユラに任されていたし、また少女自身、それを誇りに感じていた。

そうして、日々は巡り、少女の眼前には、無限と思える時間と、茫漠ぼうばくと広がる痩せた平原があつた。少女は一年中、母親が継ぎをあてては着せる古着を纏まとつていたが、貧しくも、また孤独いそへでもなかつた。

時折、父親というものを思つてみるものがあつた。それは、村の中心から、時々思い出したように何かの用件を伝えにやってくる村長や、行商の男たちを、見た折などであつた。彼らは、あるときは、少女に、未知の世界の話を語つて聞かせた。少女は喜んでそれらに聞き入つた。またあるときは、彼らは少女を、その太い腕に抱き、柔らかい頬ほおにこわごわした髭面ひげつらをこすりつけもした。少女は、くすぐつたがり、身をよじつて笑つた。

だが、だからと云つて、少女は「自分の父親」が欲しい、と思つたことはなかつた。なぜなら、「自分の父親」は、この世のどこかに存在しているはずだから。そして、待つていれば、いつか、少女と母親のもとに、父たる男は戻ってくるはずだと信じていたから。

しばしば、平原の空を巨大な夕焼けの朱色しゅいろが覆おほう時刻などに、母親が作業の手を止め、遠い一点を見入っているときがあることに、少女は気付いていた。その遠い視線の果て、地平が途切れてなめらかな大地の曲線に吸い込まれてゆくあたりに、おそらく自分の父親がいるのだろう。少女は、そう理解していた。

ちようど、そのときも、夕刻のそんな時間だった。馬にやる水を井戸から汲んできたバケツを、少女は、ふらつきながら足下に置くと、ちようど作業の手を休めて立っている母親の視線が、遙か遠くまで泳いでいるのを見た。

「とうさんは、いま、どこにいろの？」

ふと、その問い、何度も口の中で転がしては決して外に出ることのなかった問いが、唇からこぼれ出た。言ってから、慌あわてて、両手で口を押さえ、母親を見た。

母親は、しかし、思ったよりもやさしく、少女を見つめ返した。少女は、急に胸の動悸が激しくなるのを感じた。

「さてね。ほんとうの『地の果て』を探して、いまもどこかをうろついているんだらうよ」

母親は言つて、再び地平を見据みすえた。

「世界の果てがどうなっているのか、この平原がとぎれた先、氷の大地のそのまた先には

いったい何があるのか、見てこないでは気がすまないって言ってね。毛布と食料を詰め込むだけ詰め込んだ犬ぞりに乗って、たったひとり、出て行っただよ」

「それは、いつのこと？」

「おまえが三才になる前のころだったかね、アユラ」

少女は、いつそう強く、口に手を押し当てた。

自分は、いま十二才だ。三才からは、九年も経っている。そんなに長い間、犬ぞりでうろつくことなど、できるものか。地の果ては、ここよりも遥かに厳しい、氷だらけの冬、いや、一年じゅう、すべてが真っ白に覆われた冬なのだと聞く。それでは、帰ってこられるわけがない。

（父さんは、ほんとうは、死んだのかもしれない）

そう考えることは恐ろしかった。もとより、ものごころついた頃から父親は家にいなかった。だが、家にいないということと、この世にいないということは違う。まったく違う。

「だいじょうぶさ」

母親は、少女の心を見すかしたかのように言った。

「どうにかなったっていう噂は聞かない。どこかわからないが、どこかには、いるん

だよ。もしかしたら、ほんとうに、この世の果てに行きあたって、別な世界の扉を開けて、そっち側にいつちまったかも知れないね」

母親が、少女のための気休めを言っているのか、それとも心からそう信じているのか、少女にはわからなかった。

「どうして、あのひとは、そんなにも『地の果て』が見たかったんだろうね……、莫迦^{ばか}な」と

投げ出すように、母親はそう呟^{つぶや}いた。

「母さんは、見たいと思わなかったの。一緒に行こうって、思わなかったの」

母親は、こんどは、目をまるく見開いて、ちよつとの間、少女を見たかと思うと、はじけるように笑いだした。

「あははは！ 莫迦^{ばか}だねえ。小さいおまえを置いて、そんなことができるもんかね。今はもういない、おまえのお婆のためにスープをつくり、おまえをおんぶしながら馬の世話をし、薪^{まき}を運び、糸^{つむ}を紡いでいたのは、母さんだよ。ほかに誰がいるものかね！」

「それは、そうだけど、それは、わかってるよ、だけど」

少女は、言葉につまった。胸も苦しかった。

(そうじゃなくて、母さんは、見たくなかったのか、ってこと。地の果てを。もうひとつの世界を)

母親の瞳^{ひとみ}は、まだ笑みを含んでいた。少女の無言の問いに答えるかのように、ほら、と、掃除のために汲^くんでおいたバケツの水を指し示した。

少女は、バケツをのぞきこんだ。

バケツにたつぷりと汲^くまれた水は、深い朱色の空を、円く小さく、しかし完璧に、映していた。のぞきこんだ少女の頭もまた、そこに円く歪^{ゆが}んで映りこんだ。少女の背後には、高い針葉樹の梢^{しづえ}が、黒く広がっていた。そこから、鳥たちがいつせいに飛び立つのもまた、円い水面^{みなも}は捉えていた。ちいさな、円い朱色の世界のなかに、落ちてゆくのか昇ってゆくのかわからないような浮遊感に、少女は目眩^{めまい}がして、顔をあげて母親を見た。

母親は、このうえなく満ち足りて、微笑^{ほほ}んでいた。

「ほら、あるじゃないか。世界の果てだろうと、果てのそのまた向こうだろうと、そのなにもかもが、あたしたちの足下に、さ。これが世界さ。あたしたちが立つてるところが。ほかに何があるんだい？　どこへ行こうっていうんだい？　何をどう追いかけたって、そんなものはずんぶ、このバケツの中におさまっちゃうようなもんさ。はじめから、あるんだ

よ。見えているんだよ。見えているものを見ようともしないで、あさつてのほうへ追い掛けてゆくなんざ、莫迦ばかなことさ」

言つて、母親はふたたび、笑つた。

母親の微笑ほほえみ、その大きな笑みは、彼女の言葉通りすべてを内包しているかに見えた。彼女にとつて、世界は、ほんとうにバケツの中の水のようなものかもしれない、と思わせるような微笑ほほえみだった。

夕闇ゆふやみがいつそう濃くなつて、風景から色彩を奪つてゆき、彼女の微笑ほほえみも、その闇の中やみに溶けてゆこうとしていた。

二

母親と少女が、そんなやりとりを交わしてから、幾日かたった夜のことだった。

真上に来ていた太陽が、またゆつくりと傾きはじめる頃、地平線あたりに、黒い染しみのように見えはじめた『それ』は、徐々に、熊のような人間のような輪郭をとりながら、ふたりの女が住む家の方に近付いてきた。

最初、少女が、それを見つけた。

母親にそれを伝えると、母親は、目を細めてその黒い塊かたまりを凝視し、それから、娘に、

「待っておいで」

と、言い残して、一番足の早い、若い牡馬おすうまに跨またがるが早いのか、その黒い塊かたまりに向かつて駆け出した。

少女が、母親の駆け去った方向をじつと見守っていると、母親はそれに出会い、しばらくそれと向き合つて何ごとかことばをを交わす様子を見せていたが、やがてそれを馬の尻に乘せて駆け戻かつてきた。

身じろぎもせずに待つていた少女の元に戻つてきた母親は、馬から降りると、乗せてきたその塊かたまり、その熊のような人間のようなものを、かつぎ下ろした。

それは、ぼろ布に身を包んだ、人間だった——かろうじて人間のように見える、汚れ、衰弱した、男（おそらくは）だった。

自分の足で立つのがやつとの様子だった。

「湯を沸かして、たらいに入れて頂戴ちようだい。そして、寢床をもうひとつ作つて」

母親が言い、少女は慌あわててそれに従った。

纏まとっていたぼろ布を剥はがし、湯で絞った柔らかい布で身体を拭ぬぐってやると、男は、人間らしく見えた。しかし、肌は凍傷とうしょうのためか顔も首もぼろぼろだったし、唇はひび割れ、目は半眼はんがんのまま、どこを見ているのか判らない空虚くうきょな表情をしていた。

そして、終始口をきかず、何を尋ねても、うう、と、低い唸うなり声をあげるだけだった。暖めたヤギの乳を与えると、三口ほど啜すすり、また横になって眠すってしまった。

母親と少女は、呆然ぼうぜんと男を見下ろし、それから、やっと、目を見合わせた。

「とうさん、なの？……これ」

少女は、やっと、そう聞いた。

「違うよ」

母親は、きつぱり答えた。

少女は、落胆らくたんし、同時に安堵あんどした。

「いったい、どうしちゃったんだろうね、この人」

「さあ。話せるようになったら、聞いてみな。どうやら、莫迦ばかな男はおまえの父さんだけじゃないようだね」

男の寝顔を見下ろしながら、母親も、失望したような楽し気なような表情をしていた。

三日もたつと、男の顔色は目に見えて良くなった。

そして、すこしずつ、話もできるようになっていった。

男の話すことばは、どこか違う地方のことばだったが、男は、このあたりのことばも少しはわかるようだったので、片言かたことで話ができる。

「白い。どこまでも、ずっと、白い世界にいつてきた。氷だった。氷の大地だった。大地は、ゆっくりゆっくり、動いて、いた」

部屋に少女とふたりでいた、ある時、時間をかけて、男は、それだけ言った。

ストーブの上のスープをかきまぜながら、少女は一生懸命耳を傾けた。

男は、若いのか年をとっているのか、よくわからない風貌ふうぼうだった。自分の父親の像を、男に重ねようにも、娘は父親の顔を覚えていなかったたので、重ねようもなかった。

「なぜ、そこに行ったの？ 帰ろうとして、まちがえてこつちに来てしまったの？」

少女は、そう訊たずねてみた。

だが、こんどは、男は曖昧に笑うように、頬の筋肉を緩めただけだった。そうして、再び仰向けになり、屋根裏を見つめながら、

「鯨も見た。おまえは知っているか？ 海面に巨大な飛沫をたて、波を打って泳いでくる。そうして、高い、深い声で、歌い交わす」

と、喋った。たくさんの質問を、どれから尋ねようかと思つて少女が振り向いたときには、男は再び寝息をたてていた。

「あなたの名前を、まだ聞いてない」

寝顔を見下ろしながら、少女はそう呟いた。

四

一週間経ったあたりから、男は急速に回復し、顔色が良くなり、普通に食べ、昼間は起きているようになった。起きている間は、家の雑用や馬の世話も手伝うようになった。

健康を取り戻した男は、もはやぼろ屑のようではなく、がつりした体躯の居丈夫だった。褐色によく焼けた肌、大きな口からのぞく歯は白く、薄い青色の眸は機敏そうに輝き、

体軀たいくに似合わぬ少年じみた雰囲氣まどを纏まとっていた。

ビョルク、と、男は自分の名前を名のった。

少女と母親の名前も、アユラ、ソフィ、と、綺麗な発音で呼んだ。

男が話した事柄を総合すると、男は、ずっと西方の国から仲間と犬ぞりで探検に出発し、途中で仲間とはぐれ、犬やそりも失い、命からがら帰還したとのことだった。男の故郷は、はるか遠い異国だった。

勇敢な探検家であるはずの男だったが、この家にあつては、ソフィの言うことをよくきく、役に立つ息子のような存在になっていた。

二週間、ひと月と経つても、男はまだ家にいた。故郷に帰ろうにも、帰る方策が無いからだった。もちろん、村長むらおさに頼んで、男が帰るためのそりや犬を手配してもらふことはできたろうが、ソフィはあえてそうしなかった。この家に、男の存在なじがすっかり馴染なじんでき
ていたからだ。

「もつと元気になったら、そりを作ればいいさ。どのみち夏は動きようがないさね。そして、こんど産まれる子馬の程度がよければ、隣村で犬と交換すればいい」

ソフィはそう言ったが、娘とふたりでやつとつましく暮らすために必要な最低限の家畜を、そのために差し出してもらおうことを、男はよしとしなかった。そこで、何とはなしに、傍目には家族のように、その小さい家に居続ける格好になっていた。

時々、夜中にふとアユラが目を覚ますと、ソフィとビョルクがひとつの寢床に寝ているのを目にすることがあった。ビョルクはソフィの頭の下に腕を回し、ソフィはビョルクの肩先にぴったりと鼻を寄せて、ふたりは同じリズムで寝息をたてていた。母親のそんな姿を見てアユラは不思議な心持ちになった。そして、いつも、その違和感をふりほどくように、目を閉じて眠ろうと専念するのだった。

五

そうしている間に、季節は夏へとうつろっていった。灰色の凍土を覆いつくした緑の草原は、日中はもえたつ太陽に照らされて、風にそよぐたびに金色の波頭をはじけさせた。そこかしこから野うさぎが顔を出し、アユラが追いつけようとすると、また、緑の波の下に姿を消した。ウサギを逃して悔しそうに首をかしげるアユラに、ビョルクは屈託なく

声をあげて笑った。そして、地面にしゃがみ、「きてごらん」と、手招きをした。アユラが駆け寄ると、ビオルクは、草の薄くなつた地面の窪みから、ほら、と、野いちごをひとつまみ掴み出し、アユラの掌に乗せた。

凍土の冷気で氷のように冷えた野イチゴは、アユラの掌にぴりりとした感触を与えた。

ビオルクはいつの間に野イチゴを入れておいたのだろう。

「つめたい」

アユラは、ビオルクの目を見て微笑んだ。

「ずっと冷やしておいたからね。しゃりしゃりするよ」

ビオルクは、すこし自慢気に微笑みかえした。

二人が野イチゴを食べていると、ソフィが呼ぶ声が響いてきた。

「おいで、揚げパンができたよ」

アユラとビオルクは目を見合わせ、ぱつと立ち上がって兄妹のように息をはずませながら駆けだした。

眩しい空の下にテーブルを出し、揚げパンにイチゴの甘いジャムをつけて、三人で

頬張^{ほおば}った。アユラは、かつて味わったことのなかったような幸福に身を浸していた。

（ビオルクは、父さんではない。でも、もう、父さんかどうかなんて関係ない。こうして三人で暮らしているのは、なんて楽しいんだろう。夏が終わって冬がきても、またつぎの夏がきても、ずっと、こうして三人で暮らしていられればいいのに）

アユラは、強くそう思った。あまりに強くそう思ったので、口にできないほどだった。ソフィが、みんなに薬草のお茶をいれた。柔らかに結い上げた髪に陽がさし、薄い金色に輝いていた。

（かあさんは、きれいになった）

アユラは、そう思って、母親を眺^{なが}めた。きつと、ビオルクもそう思って母さんを眺^{なが}めているはずだ、と、ちらりとビオルクの表情を窺^{うかが}ってみた。

しかし、ビオルクは、アユラの意に反して、瞳^{ひとみ}を伏せ、どこか虚ろな表情のまま、カッブに口をつけていた。

いつもの快活なビオルクとは別人のような陰が、その横顔に差していた。

悪いものを見たような気がして、アユラは目をそらした。そして、

「ビオルクのそりの犬たち、今頃どうしているのかしらね」

と、喋^{しゃべ}つてみた。

すると、ビヨルクは伏せていた目を上げ、答えた。

「ぼくのそりはね、犬じゃなくて狼が引いていたんだ」

「ええ！ 狼が？」

アユラは、目を輝かせて身を乗り出した。

「冗談でしょう？」

ソフィがゆつたりと口を挟^{はさ}んだが、ビヨルクは首を横に振った。

「ほんとうだよ。六頭とも、よく僕になついていた。銀色の毛並みが見事な、大きくて、賢い狼たちだ。可愛がつていた。だから、気になるよ、やつらのことは。でも、今もどこかで生きているんじゃないかと思つている」

真面目にそう語るビヨルクを、ソフィは、すぐ嘘とわかる作り話をする子どもを眺^{なが}めるかのように、笑みを含んだ優しい目で眺^{なが}めるだけだった。

母親が醸^{かも}したそうとする静けさを覆^{くつがえ}すように、アユラはビヨルクに質問をした。

「さいごに狼といつしよに行つたのは、どこ？ どこまで行つてはぐれちゃつたの？」

ビヨルクは眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せた。

「それがどこだったか、っていうのは、もう、わからないんだけれどね」

視線を遠く泳がせながら、話を続ける。

「何日も続く地吹雪ぢふふきの中で、僕は、自分で雪の中に掘った横穴に、じつと留まっているしかなかった。相棒は既に、氷の裂け目に落ちて、助からなかった。そりは、その時に、壊れてしまっていた。狼たちは、身じろぎもせず、毛並みをできる限りに膨らませて雪の中にうずくまっているだけだった。

ようやく地吹雪ぢふふきが止んだと思ったら、なにもかもが、白い光おほに覆われてしまった。雪でも霧でもなく、無数の小さな氷のかけらが、いっぱいに浮かんでキラキラ光っていた。降ってくるでもなく、昇ってゆくでもなく、漂いながら光っていた。

すべてが白だ。空も大地もなく、浮かんでいるような感覚だった。寒さすら、感じなかった。身体の痛みも空腹の感覚も、極限までいつて途絶えていた。死は恐ろしくなかったが、まだ死ねない、と念じていた。だけど、どこかで不意に意識が途切れたようだ。僕の記憶は、そこで終わっている」

「それは、もしかしたら天国だったんじゃないの？ ビョルク、あんたきつと、いちど死にかけたのよ。それで、奇跡みたいに助かったんじゃないの」

「アユラ！ プリシーに餌をやつといで。それから水汲みだよ」

アユラの言葉はソフィの苛々した声に鋭く遮られた。プリシーは、母子が普段いちばんよく使う馬だ。

「はい」

アユラは、しぶしぶ立ち上がった。

「プリシーの餌はぼくがやるよ」

ビオルクも、身軽く立ち上がった。いいんだよ、と、ソフィはビオルクを制したが、ビオルクはすたすたと歩いて馬小屋に向かった。ビオルクの姿を見たプリシーは、自分から鼻先をすりつけながらビオルクに寄っていった。アユラはその様子を横目で見ながら、（ビオルクって、人も動物も関係なく、みんなをひきつけてしまう力があるみたい）と、胸のうちでつぶやいた。

優しく声をかけてやりながら、プリシーの世話をしてやるビオルクの横顔には、テーブルで一瞬見せた濃い影はなかった。けれども、あの一瞬の影は、アユラの心に投げ込まれた重い石のように、胸の奥底にとどまっていた。

六

白い夜が続いた。太陽は地平線を横にすべってゆくばかりで終日沈まず、再び高く昇っては大地に照りつけた。しかし、徐々に日が没している時間もでてきた。短い夏が瞬く間に過ぎてゆき、その間に、草も木々も動物たちも、地上の生あるものたちは全て、生命のたけを燃やしつくそうとしているかに見えた。

そんなある夜だった。

深夜にふと目が覚めたアユラは、寒さに身震いし、肩先まで毛布を引き上げた。

（こんなに寒いなんて。まだまだ夏だと思っていたのに……）

毛布をかぶっても、寒さは変わらなかった。なぜか、身体の芯から凍えてくるような悪寒が全身を捉えていた。

（風邪をひいてしまったのかしら……）

自分の腕で、身体を抱いた。どこか、身体の動きも凍てついたようにもどかしく、思うようにならない気がした。

(それとも、どこかから隙間風が吹き込んできているのかしら)

ぐるりと首を巡らせて、家の中を見るのも骨折りだった。白い闇に沈んだ室内で、ビョルクと母親がそれぞれのベッドに寝ているのが見えた。今夜は一緒に眠らなかったようだ。白い闇の、白さが、いつもより濃いような気がした。

視線を更に滑らせると、扉が開け放たれていたの、アユラは驚いた。

(おや、なぜ？ 風で開いてしまったの？)

ぼんやりとしか見えないが、開け放たれた扉から、白い霧のようなものが室内に流れ込んできていた。それらは、天井の低い狭い室内に、今や充満しつつあった。

この異常な冷気は、その霧が引き起こしているものらしかった。

霧は、室内に流れこんでいては、ゆつくりと渦を巻くように床の上に溜まってゆき、やがて、中心から立ち上がるように、いくつかの塊をかたちづくりはじめた。

ソフィは、目を見開いて、霧が徐々にになにかの形へと変貌してゆくさまを見守った。咽がひりつくように乾き、心臓は激しく波打った。しかし、きつく自分の身体を抱いたままの腕も、足先も動かすことができず、身体は固まったように動かなかった。

白い霧は、尚もゆつくりと集まり、濃くなってゆき、やがて何匹かの生き物のかたちを

とつた。

銀色に輝く毛並み。敏捷びんしょうそうな四肢しし。尖とがった耳、大きく開けられた口。

（——狼——！）

それらが、六頭の狼、おそらくは吹雪の中でビョルクとはぐれた狼たちであろうことを、アユラは一瞬で悟った。

いまや完全に狼のかたちとなつたそれらは、一体一体が鋭い冷気を放ちながら、眠るビョルクの周りを、踊るように、優雅に跳ねはじめた。動くたび、残像のように白い靄もやが後足から離れ、光る雪の結晶となつて飛び散った。

音も無く続けられる、それら狼のかたちをしたものたちの踊るさまを、アユラは、声も出せず、ただ凝視ぎょうししていた。

恐ろしいというよりは、ただ美しい眺めだった。

ビョルクは、目を覚まさない。眉間みけんに皺しわをよせ、彼もまた、声を出せぬまうなされて
いるようだった。

狼のかたちをしたものたちは、列をなして廻りながらビョルクの周りを跳ねつづけていたが、やがて、そのうちの一匹が、美しい輪舞りんぶの調和ちやうわをうち破るかのように円を離れ、ゆつく

りと踊りかかるように、ビョルクの心臓のあたりに喰らいついた。つづけて、波を打つように、残りのものたちも、次々と胸の中心に向かつてとびついていった。

六匹の狼たちは、もつれあい、ビョルクの心臓を奪い合うようにして、身体に首を突っ込んでゆく。

それらは、心臓から肉を食いちぎるたびに、歓喜に咽^{のど}を鳴らし、白く透明に輝く眸^{ひとみ}をぎらぎら光らせた。

狼たちは、心臓の上の一点に集まり、ひとつの白く輝く塊のように見えたが、しかし、その白い光を透かしてビョルクの身体を見ることができた。ビョルクは苦し気に表情をゆがめていたが、実際には身体を喰いちぎられてはいなかったし、血の色も見えなかった。狼たちがあげる血しぶきは、跳ね上がった氷の結晶と化して空気中に消えてゆくばかりだ。そうしているうちに、狼のかたちは、再び徐々に、もとの靄^{もや}のように朦朧^{もろろ}としはじめ、刻々とうねるようにゆらぎ、かたちを失ってゆきながらも、いつまでもビョルクの心臓に喰らいついているのだった。

最後は、心臓の上あたりに一匹の狼の首だけがかたちをとどめ、内臓の血の最後の一滴までもを噉^{すす}り尽くしているのが見えた。

やがて、その首のかたちも輪郭^{りんかく}を失ってゆき、最後は、ビョルクの身体に吸い込まれるかのように消えていった。

白い霧^{もや}は、すっかり消え去った。

静まり返った室内には、もとのように、ビョルクが静かに横たわっていただけだった。アユラは、ひゅうつ、と、息を吸い込んだ。今なら声が出せる、と思った瞬間、

「ビョルク！」

大声で叫んでいた。

少し離れたところに寝ていたビョルクは、うつすらと目を開いただけで、再び目を閉じ、元通り静かに寝息をたてはじめた。

アユラは、ベッドから出ることもできず、自分の身体を抱いた腕をほくくすることもできずに、小刻みに震えていた。

恐ろしさが急激に込み上げ、涙が溢れた。

しかし、四肢^{しし}の緊張が解けると同時に、頭の芯^{しび}に痺れが訪れて、アユラは再び眠りに落ちた。

七

翌朝、夜の恐ろしい光景の余韻のうちに、じつとりと汗をかいて目覚めたアユラは、ビヨルクがいつもと変わらぬ様子で起きているのを見て拍子抜けした。

あれは、夢だったのか、と自分に問うてみたが、そんなはずはない、と打ち消した。

朝食のテーブルでじつと自分の顔を見ているアユラに気づくと、ビヨルクはおどけて眉を上げ見せたが、アユラが笑わないので真顔になった。

「僕の顔に何か書いてあるかい？」

「氷の大陸の地図が描いてあるわ」

ビヨルクの眸が、奥深いところでさざめくように輝いた。

「昨夜、ビヨルクの狼たちを見たわ。あなたを連れ戻しにきたのかしら」

「死に損なつたあるじを、黄泉の国に誘いに来たんだろう」

ビヨルクの答えに、アユラは息を呑み、彼を見つめた。

しかし、ビヨルクは再び、いつものように淡々と、パンとスープを食べ続けた。

ソフィは、なぜだか、なかなか起きてこなかった。

アユラは胸騒ぎがおさまらないまま、ビョルクと薪まきをつくり、水を汲くみ、馬の世話をした。陽ひがすっかり高くなりつつあった。

ふと、ひとり、ひよいとプリシーに跨またがり、いつかビョルクがやってきた地平線の方に、軽く走らせてみた。

先端から黄色く枯れはじめた草原が、視野の続く限り広がり、彼方あそこで蒼あおい空と出会って一本のぼやけた線となっている。

父を呑み込み、ビョルクを吐き出した地平線。

これまで、それは遙か遠くにぼんやりと引かれた線でしかなかった。

けれども、いまは、その地平が、極めてくつきりと目に入った。

それは、ただの線ではない。限り無い奥行きを持って、地平の果てへ、新たな世界へと導いてくれる、巨大な入り口なのだ。

今さらのようにそのことに気づくと、指先から痺しびれが廻るような感覚を覚えた。

興奮し、吐き気すらした。

目眩めまいを抑えようと足元に視線を移すと、そこにはバケツがあった。

なみなみと水をたたえたバケツ。

丸い小さな完璧な世界が封じこめられたバケツが。

アユラは、鞭^{むち}で、そのバケツを叩いた。

バケツは倒れ、水が跳ね上がり、水滴が舞い、太陽の閃^{ひらめ}きを受けてきらきらと輝いた。

家に戻ると、ソフィが起きていて、アユラを咎^{とが}めた。

「どこに行つてたんだい」

「ちよつと、外を見てただけよ。朝の用事は済ませてあるよ」

母親の鋭い視線に、心の中を見すかされたような気がして、アユラは話題を変えた。

「顔色がよくないよ、母さん」

不審そうに顔を覗^{のぞ}き込むアユラに、ソフィは微笑^{ほほえ}んでみせた。やや頬^{ほお}がこけているため、やつれて見えたが、眸^{みゆ}は強い力を持つてきらきら光っていた。

「まだ、べちゃんこだけど、あたしのお腹には、あんたの弟だか妹だかが、入ってるよ」

アユラは驚いて目を見張った。扉の外で、水やり場の桶を修理しているビョルクへと、視線が泳いだ。

「ビョルクが父さん？」

「そうさ」

自信と、幸福感に満ちた表情と声で、ソフィは答えた。

「おめでとう、母さん」

アユラは、どぎまぎしながら、やっとそれだけ言った。

弟が妹が生まれることは嬉しかった。だが、

（ビョルクは、赤ん坊のお父さんになって、ここでみんなと一緒に暮らすのだろうか）

疑念がふつふつと湧いた。

（ビョルクは、それでいいのだろうか）

ビョルク、ソフィ、そして自分。まだ見ぬ赤ん坊。この夏がいつまでも続いてほしいと願った、みんなで囲む食卓。

そのはずだったのに、それが現実になりかけると、それは違う、という思いに囚われて息苦しくなってしまうのだった。

八

再び夜が来た。

アユラは、寢床ねどこにもぐり込んで眠れず、じつと自分の指を嚙かんでいた。

今夜もまた、狼たちが来るだろうか。

それとも、狼たちは、昨夜自分が見たように、ビョルクの心臓を喰くらおうとして逆に取り込まれ、彼の胸の中に封じ込められてしまったのか。

うとうとしはじめた頃、何か動く気配を感じた。

背後にごく静かな足音を感じ、振り向けば、ビョルクが扉を開けて出てゆこうとしている姿が見えた。ビョルクは、厚く毛皮を着込み、ごく簡単にまとめた荷物を背中に結わえつけ、後ろ手にそつと扉を閉め、姿を消した。

アユラは、静かに素早く起き上がり、上着を羽織ると、ビョルクを追って外に出た。扉を閉めた彼は、大股で歩いて馬小屋に入った。すぐに、プリシーが目を覚まし、静かな鼻息をたててビョルクに頭をすり寄せた。ビョルクが素早くプリシーに遠出の支度をする様

子を、アユラは手品の種あかしを見るような面持ちで眺めていた。

立ちつくすアユラの気配に気づいて振り返ったビョルクは、格別驚くでも目をそらすでもなく、短く、鋭く、アユラに笑いかけた。それは、彼がこれまで、この家で見せたことのないような眩しく閃く笑顔だった。

しずかに、ぴたりとプリシーに寄り添われながら、馬小屋を出てアユラのほうに歩み寄ってくるビョルクの前に、アユラは立ちはだかった。

「行くのね」

ビョルクは頷いた。

「世話になったね」

静かにそう答え、ビョルクはアユラの側を通りすぎようとした。その時、アユラは強い力でビョルクの腕を掴んだ。

「わたしも行く」

「プリシーに二人は無理だ」

ビョルクは穏やかに、しかし、きつぱりと断った。

「隣の集落までならプリシーだって持つわ。そこで、犬ぞりを手に入れて乗り換えるつもり

「なんでしょ？」

「もう、ここには戻らないつもりだよ」

「わかってる。わたしも戻らないもの」

アユラの強い視線を、ビョルクはまっすぐ受け止めた。自分の腕にくいこむアユラの指をそっと引き離すと、革のグローブのような大きな掌に、アユラの両手を包んだ。

「ずっと一緒にはいけないんだよ」

優しい声、うらはらに氷のようにつめたく澄んだ目。

「僕のたましいをやつらに捧げにゆくための旅だから」

アユラは頷いた。

やつら、とは、あの夜見た狼のことだとわかっていた。

「この村を出るまで一緒に行ってくれば、それでかまわない」

アユラは言った。

ビョルクは、短く頷くと、アユラの掌を包んでいた手をほどき、アユラの手をとりなおした。

「よし。急ごう」

プリシーに跨^{また}がり、二人は白い闇^{ぐみ}のなかに駆^かけ出した。

いつもよりも重い背中にかかわらず、プリシーは弾^{はじ}かれた矢のように走った。

夢中でビョルクの背中にしがみつくアユラの頬^{ほお}に、手の甲に、どこから舞い来る白い氷礫^{こおりつぶ}がぼつぼつと当たっては、背後に流れていった。

腕の中の大きな背中越しに、アユラは、はつきりと感じた。

彼の身体^{からだ}のなかで猛^{たげ}り狂う、狼たちの存在を。

休むことなく、彼方へ彼方へと、人を駆^かり立てる巨^{おお}きな力の存在を。

その力の種子^{しゅし}は、間違い無く、自分のなかにもあった。

その鼓動、その渇^{かわ}き、はげしさに、抗^{あがら}うこともできずおし流されてゆく自分を感じていた。

生まれ育った村は、いつしか背後に遠く影になり、白い地平に吞まれ、そして、見えなくなつた。

女が話し終えてひと息つく沈黙の中で、アージュヴエダは考えていた。

——この物語には、二種類の人間がでてくる。動く者と、留まる者。あるいは、去る者と去られる者。

どちらの人間にも、理由があるだろう。

どちらの生き方も、良い悪いという判断はできない。

しかし、アージュヴエダの感情は、どうしても「去られる側」に重ねられた。

留まる母親。

見捨てられた子ども。

己の生おのれの出発点は、「捨てられた子ども」としてであった。

捨てた父親にも理由があっただろう。

捨てた母親も、最初はこの物語のように気丈きじょうに育ててくれたかもしれないが、結局は自分を手放した。捨てたのか。やむをえなかったのか。――

アージュヴェダの想いも知らぬ氣に、女はやがて立ち上がり、

「では、また明晩」と言い残し、氣配を消した。

その袖を引きつかみ、まだここに居てくれ、と懇願したい氣分をやつとの思いでねじ伏せ、アージュヴェダはじつとその場に座っていた。

(また明晩、か)

それは、確かな約束に違いなかった。そのことが、アージュヴェダの胸に希望の灯をともした。

なんとしても、この婚礼を首尾よく成功させよう、と祈るような気持ちで、アージュヴェダは夜明けの浅い眠りについた。



第十一夜 生長する影

婚礼も、十一の夜を数えるまでになった。

最後の夜である。

東の空から忽然と姿を現した、巨大な銀色の満月を、どこか感慨めいた想いとともに眺めるアージュヴェダの背後から、祭司がそつと声を掛けた。

「そろそろ、目隠しを」

「そうですね」

月を眺めるのをやめ、包に戻ったアージュヴェダは、されるがままに、固い目隠しをつけた。慎重に目隠しをつけながら、祭司は彼に語りかけた。

「では、無事に婚礼を終えられることを、祈っておりますじゃ。……影の刻がはじまるまでに、のう。」

いや、おまえさんは、これまでよく辛抱されましたじゃ。顔も知らぬ娘の語りを聞き続けるだけで心のうちに広がってくる、闇の深さに、耐えきれぬ者もいましたじゃ。結局、その者は、婚礼を終えぬうちに娘に触れてしまい、婚礼はとりやめになり、若者は災いを避けるために村を追放されたと聞きますじゃ……。

おや、自分はそんなことはない、と、微笑んでおられるな？ まだ、わかりませぬぞ。

影の刻は、人の心を狂わせますでな。最後の夜が一番気をぬけませぬぞ。

万が一、花嫁が精霊であつたなら？——用心深い精霊は、影の刻寸前まで正体を現しませぬ。精霊に気を許して、魂を喰われた者はどうなるか、お前さまも知らぬわけではありませんまい。穢された魂は、今生を終えることはおろか、来世に転生することもかなわず、永劫の闇の底に落ちる宿命ですじゃ。それは、この肉体の死にとどまらぬ、存在の消滅を意味しますでな。

ふう。……ちと、喋りすぎましたかな。気を悪くなさるな。この爺、長老さまにも負けずおとらず、お前さまのことを心配しとりますでな」

アージュヴェダは、感謝の意を示すために、ゆっくりと頷いた。しかし、彼には、女が精霊などではない、という確信があつた。あの艶やかに澄んだ声、柔らく温かな気配。ともにひとつの調べを奏でた、満ち足りた時間。——そこには、邪な気配は微塵も無かつたではないか。何より、女には、彼を幼児に戻つたように安心させ、和ませてくれる懐かしさが感じられた。運命の相手、という言葉があるのなら、その相手に自分は出会えたのではないか、という予感がしていた。

そんなアージュヴェダの心中を察してか、祭司は、優しく彼の肩に手を触れ、祈りの言

葉を唱えた。

「では、月神げっしんのご加護かごがありますことを」

祭司さいしは、己おのれの包ゲルに戻かへっていった。

村落中が、しん、と静まりかえった。

その中を、遠くから、少しずつ近付ひづめいてくる蹄の音を、アージュヴェダは、聞いた。その音は、アージュヴェダの鼓動うどうの音にも似ていた。

第十一夜 生長する影

闇やみが、刻々と、濃くなりはじめた。

今夜は満月のはずだが、月は山向こうに隠れてまた姿を現さない。

急速に夕闇に沈みつつある山肌の、やっと人ひとり通れる程度の細道を、男は、ただ、黙々と歩き続けていた。

（急がねば、また、夜の最も深い時間に、シュガル峠を超えることになってしまうぞ）
それは、なんとしても避けたいことだった。

もし、そうなれば、また『あれ』を見ることになる。

しかし、今日の彼は、いつになく疲れ果てていた。今度の戦いは、長く、熾烈^{しれつ}だった。痩せ土地の農夫たちを掻き集めた、急ごしらえの傭兵^{ようへいぐん}軍は、王軍が到着するまでの時間のぎでしかなかった。

男もまた、僅^{わず}かな金と引き換えに命を投げ打つも同然に、山ひとつ超えた戦地に赴^{おもむ}いたのだった。こんな戦いは、今回で、十一回を数えるだろうか。

周りの多くの兵者たちは、満足な武器も与えられず、ただ殺され、土塊^{つちくれ}のように打ち捨てられてゆくばかりだった。

なんとか勝ちのこり、王の領土は守られたが、かろうじて命びろいしたような状況で、満身創痍^{まんしんそういつ}の兵者たちは散っていった。かれらのうち、果たしてどのくらいの者が、自分の家に帰り着くことができただろうか。――

そんな中で、これまで男が生き残ったのは、不思議としか言いようがなかった。男は、人並みほどの闘争心も持ち合わせず、かといって自ら討ち死^{みずか}にを買って出るほど自棄^{じき}でもなかった。

しかし、男は、戦場にあつては、何かに護^{まも}られているかのように自分の気配を消すこと

ができた。

そして、意識は鳥のように戦場全体を俯瞰し、どう動けば生き残ることができるか、考えなくともわかるのだった。

それでも、すぐ足下に潜んでいた敵兵が不意に斬り付けてきたときなどは、意識が暗く遠のき、また正気が戻ってきたときには、敵兵の骸が目の前の血溜まりの中に転がっているのだった。

はじめて、そんなふうにして人を殺めたときは、無我夢中でやってしまったのか、と、己の残虐さを責めたが、それもたび重なりと、いつしか慣れていた。

むしろ、人を殺める際の戸惑いも逡巡も、自分の意識の無い瞬間の出来事では感じようもないので、どれだけ敵兵を殺しても、己の手で人を殺めたという気になれなかった。

そんな男は、他から見ればとてつもなく残虐な兵者に映っただろう。

生きて帰っても、妻や子が待つわけでもなかったし、両親も誰だかわからぬままに育ってきた男だったが、毎回、このように命を落とすことなく生き残るのだった。

傷を負った足は重く、意志に反して、峠にさしかかる頃にはもうすっかり闇に包まれてしまった。

これ以上歩くのは危険だ。

男は観念し、山肌の窪地に落ちた折れ枝を払って、今夜のねぐらを用意した。

枝を集め、火を起こした。

乾いた枝はよく燃え、男の周囲をたちまち明るく照らした。

しかし、火を焚いたからとて、油断することはできなかった。明るい場所ができると、周りは一層深い闇に満たされる。——この間も、そうだったではないか。

男は、草を枕に、横になり、眠ろうと集中した。

しかし、炎に飛び込んでばかりちりと音をたてる羽虫たちと、熱に揺らぐ空気の向こうに、ある気配が急速に塊を作りはじめる感触を、避けようもなく、感じていた。

始まった。

——また、あれが起こるのだ。

最初にこの峠で眠った時は、気のせいかと思った。

それは、まだ、ほんの小さな、木の切り株ほどの隆起だった。

確かに、先刻までは平らだった、焚き火の向こう側の土地の一部が、なぜか盛り上がった

て見えたのだ。

まどろむ^{まふた}臉をこじあげ、その塊^{かたまり}がなんであるか凝視^{ぎようし}しようとしたが、見つめれば、その塊は大氣中に霧散^{むさん}するかのごとくほじめて、消えた。しかし、再び眠ろうとすれば、それは確かに、またもとの位置にあるのだった。

朝の光に目覚めてみれば、その隆起は無かった。

その後味の悪さに、つぎに同じ峠を訪れたときには、寝る場所を変えてみた。

しかし、再び同じ現象が起こった。

そればかりか、こんどは、隆起は最初るときより高くなっていた。

それが、土の隆起であるかどうか、わからなくなつた。どこからともなくやってきた生き物が、闇の中でじつと蹲^{うすくま}っているようにも思えた。

以来、その峠を越えることは、男にとつて気の重いこととなつた。しかし、男の住む村から北に出る道はほかになく、その峠を越えないわけにはゆかないのだった。

回を重ねるごとに、その影のような塊^{かたまり}は、生長^{せいちよう}していった。

生長するほどに、気配も濃厚になり、じつと男のほうを伺っているかのようにも思えた。

この間見た影は、すでに男の胸のあたりまでの高さになつていた。

その正体は何なのか、考えてみた夜もあった。

あるいは、それは、男がこれまで戦場で命を奪ってきた者たちの靈魂れいこんなのか、と。

それならば、戦いを重ねるたびに大きくなってゆくことの納得がいく。

しかし、どうしても、そのようには思えなかった。自分よりも大量の殺戮さつぷくを行っている者はほかに大勢いるから、自分だけが恨まれる筋はない、という理由だけではない。

その、正体のわからぬ隆起が、怨嗟えんさの類の気を発してるようではなかったからだ。

では何なのかと考えても、わからない。ただ、じつと、男の気配うかがを窺うかがっているかのよう
な……。

そして、今夜は。

たちまち凝縮しはじめた『気配』は、すう、と、縦に長いかたちをつくり、濃い影となつて、炎の向こうに立ちはだかった。

たちまち、男の咽のどはからからに乾き、鼓動が早まった。

（今夜は、こいつの正体を見極めてやるか。どのみち、逃げることもできぬ妖あやしのものならば、
な）

影は、あきらかに、人のかたち——やや小柄な、ちようど、十かそこらの子どもくらいの背格好の——をとりはじめた。

その姿を凝視しようとして、男は、目をしばたかせた。

そのとき、焚き木が音をたててはぜ、火の粉が男の顔にまで飛んできた。

うつ、と、強く目を閉じ、ふたたび開けると、男の傍らに、子どもがひとり、立っていた。

小柄で、簡単な旅姿は一瞥しただけでは少年か少女かわからぬ様子だった。

そして、まだあどけなさの残る瞳で、寝そべる男を見下ろしていた。

その、まったく邪気のない様子に、男はめんくらった。

しかも、その子どもは、男に話し掛けたのだ。

「おれも、この火にあたらせてもらっていいじゃろうか」

素直な様子で、そう問うた。

「あ？ ああ、いいとも、座れ」

男が促すと、子どもは、しなやかな動物のような身のこなしで、音もたてず座った。

「ありがとう。ひとりで夜、山中に過ごすのは、心細いものじゃで、遠くに焚き火が見えた

から来てみた。ここで朝までおらせてもうて、ええじゃろうか」

子どもは、少しの訛りはあつたが、男の住む地方のことばで喋った。

ついさきほどまでの、胸を縛るような強烈な気配は霧散していた。

影も、今やどこにも見当たらなかった。

すべては、自分の、気の迷い、錯覚だったのだろうか……、男はそう思おうとした。子どもは、男の隣に座ると、膝を抱えた姿勢でじつと炎が踊るさまを眺めている。

静かに、揺れる焰に照らされている子どもの横顔を、男は横目で盗み見た。

その子は、子どもにしては陽にやけておらず、白い顔をしていた。柔らかな唇を固く結び、伏せた睫のしたの瞳は、焰を映して金色に揺らめいている。

その様子を見ると、男の中に、子どもを慈しむような感情が生まれてきた。

（わしにも、こんなくらしいの弟がおつたなら、もつと懸命に生きようとするだろうか？ 兄妹、家族というものがあつたなら？ 好きあうおながおつたなら？ いや、もしそうなら、そもそも戦いの場になど行きたくなるだろうか……）

しげしげと眺め、みとれていると、子どもは男の視線に気づき、照れたように笑った。笑うと、前歯が不揃いなのがわかり、途端に愛嬌のある顔になる。

しかし、その笑顔は、どこか男の記憶の奥底を引っ掻くような印象を与えたので、男は動揺した。

動揺を鎮めるために、男は口を開いた。

「ところで、おまえは一体何の用で、ひとりで山を越えようとしているんだい、まだ小さいのに。父さんや母さんも心配だろうに」

男が訊ねると、子どもは、また炎の方を向きなおって、

「父さんも母さんも、おらん」

と、ぼそりと呟いた。

しまった、かわいそうなことを聞いたか、と、男は後悔した。この戦乱の世の中だ。早くに両親を失った子どもが、住みかを求めて旅をしていたとしても、おかしくはないではないか。

「そうか。……わしも、父親も母親もおらんよ。ずっと昔から、わしが覚えてもいないころから、わしはひとりだった」

言ってから、またも男は後悔した。そんな話をして、いま現在親がいなくて心細い思いをしているであろうこの子には、なんの慰めにもならない。

自分は、親というものを知らない。多分、どこかに捨てられていたのだ。

しかし、この子は、それまで頼り、甘えていた親を失ったのかもしれない。

そのほうが、はるかに酷こくなことではないだろうか。

子どもは、表情を変えることなく、炎を見つめ続けている。

沈黙を埋めるように、男は喋しゃべり続けた。

「わしはな、こう見えても無敵の戦士なのだ。……いや、決して強いわけではないぞ。なぜかしらんが、わしに向かつてきた者を必ず倒してしまうのだ。ああ、それこそ、眠つていても、な。……わしは農村の出で、なんの武術の訓練もしとらん。これまで、鉾すきや鉾くわしか持ったことがなかったさ。だがなあ、はじめ、嫌だ嫌だと思いつつ仕方なく戦いの場にてたら、これが、わしだけは決して死なないのだ。そう、なにか、ふしぎな力に護まもられているみたいにな……」

子どもは、顔は炎に向けたままで、じっと話を聞いている。

「なんだろうなあ。わしなんか、地中の虫みたいなもんだ、いつ死んでもおかしくないのによ。わしが死んだからと言って、涙のひとつも流してくれる者がいるわけじゃない。これまで生きてきて、人の情とは、いつさい無縁だった。おなごと添そうこともなかった。そ

れなのに、なぜ、わしは、いつもいつも、生き残る？ 無惨に敵を殺しながら……」

子どもは、目を閉じ、じっとしていたが、やがて、頭が、コクリコクリと揺れはじめた。

男は微笑した。自ら身体を横たえ、腕枕をつくると、そこに子どもの頭が来るようにして横たえた。

「兄^{あん}ちゃ、添^そうて寝てくれるんかあ」

半分目を閉じたままで、子どもは、呟^{つぶや}くようにそう言い、微笑^{ほほえ}んだ。

「なんだ、起きていたのか。安心して眠れ」

子どもの顔は、男の顔のまぢかにあつて、子ども特有の甘く芳^{こう}ばしい匂いがした。

自分の二の腕に乗せた頭の、かろやかな重みが、子どもの存在^{はかな}の儚^{はかな}さを表しているような気がした。

そのとき、男の口をついて出たことばがあつた。

「かわいらしや。いとをしや」

ことばがくちびるを離れると同時に、男は、はつと息を呑^のんだ。

記憶の奥底に、埋もれてみえなくなっていた蓋^{ふた}が開けられ、なにかが滲^{にじ}み出してくるような衝撃を覚えた。

もういちど、まじかにある子どもの顔を、男は見た。

焚き火の明るみ、そして満月の光に照らし出されたその顔は、あきらかに、見覚えのある顔だった。

「——これは、俺ではないのか？」

（そうだ、俺だ。これは、俺だ。俺の子どもの頃の姿だ）

そんなばかな。と、思わず声に出して言いそうになったが、声を出すことができなかった。声は、咽の奥に凍ったようにはりついていていた。

さっき自分が言った言葉——かわいらしや、いとをしや——を、自分は、毎夜耳にしていたはずだ。

そう、子どもの頃。

すると、腕の中にいた子どもが、まがた瞼を開けた。

ゆつくりと開いた。

子どもの眸の中に、焚き火の炎に照らし出された人の姿が映っていた。

それは、子どもを抱いている自分ではなく、白く美しい、女の顔だった。

女は、静かに微笑みながら、こちらをじつと見ていた。

眸ひとみの中の、女の唇が動いた。

（かわいらしや。いとをしや）

記憶の蓋ふたが、こみあげてくる奔流ほんりゅうに、ふき飛んだ。

眸ひとみの中の女。

子どもの頃、ひとりで震えながら眠りに着く時刻、いつも決まって現れた。

傍そばで寝てくれた。

闇は、彼女とともにあつた。毎夜、毎夜。

寝付くまで、たとえようもなく柔らかく、温かい感覚と、ほのかな芳香で包んでくれた。

それは、いつ頃まで続いたのだろうか？

——いつから、自分はそれを忘れていたのだろうか？

月に影がさし、影が月を喰くいはじめる。

影がすつぽり覆うと、月の光はかき消え、赤銅色あかがねいろの鈍い光の塊かたまりとなった。

その刹那、眸せつなの中の像が、くると逆転した。

気がつくと、男は、自分自身が子どもの姿になっていた。

腕枕していた子どもは、女にかわっていた。

女は、男を見下ろしながら、婉然えんぜんと微笑ほほえみ、語りかけた。

（このときを、まっていたよ。わたしは、おまえを、たいせつに見守ってきた。日ごと、夜ごと）。

誰にもおまえを奪わせないさ。おまえは、わたしのもの。

わたしが護まもり、慈いつくしみきた、わたしだけのものさ）

女は、宝物を愛でるかのように、男に向かつて腕を伸ばした。

その白い肌、かぐわしい芳香、忘れていたのではない、封印ふういんされていたのだ、

抱きすくめられて――









十一夜物語 結

(俺は)

むせるような芳香。

(俺は、今――)

浮揚する五感。

(俺は今、何をしている!?)

アージュヴェダは、がば、と、上半身を起こそうとした。

しかし、身動きできなかった。

背中に廻った女の腕が、縛るようにアージュヴェダを抱きすくめていたからだ。

アージュヴェダが見下ろしている女は、衣服を着ておらず、白い肩や腕が剥き出しになっている。背中の下に、昨夜身につけていたはずの着物が、ほどかれ、乱れ敷かれていた。

しかも、自分の目隠し布もほどけて落ちていた。

はじめて見た女――花嫁は、かるく目を閉じ、唇はうすく開けて、美しい眉間に僅かな

皺しわをよせている。

それらの光景が、朝の薄い光に満たされた部屋の中で、いちどに彼の目にとびこんできた。

アージュヴェダは、愕然がくぜんとした。

昨夜、物語りを最後まで聞き、女を見送った記憶はない。

自分は、途中で眠ってしまったのか。

それなのに、こうして女を抱いているのは何故だ。

最後の十一夜めにして、婚礼の儀式ぎしきを放棄してしまったのか。

頭の奥は、霞かすみがかかったように痺しびれている。

そして、女と自分の胸から下は、ぴたりと絡みあつたままだ。

ひとつの株から分かれた枝が、向かい合つて枝を絡からませているかのように、女とアー

ジュヴェダの躰からだは結ばれていた。

小さく息を吐き、女は、身をよじった。

すると、躰からだの、結ばれた場所から、快美な感覚が波紋はもんのように湧きおこり、たちまち、

アージュヴェダの指先までもを震わせた。

(いつから、俺たちはこうしていたのだろう)

そんな疑念が、ちらりと頭をよぎったが、それを打ち消すほどに、ふたたび快美な感覚をもとめる強い欲求が、彼を支配した。

アージュヴェダは、女に身を沈めた。

自分はもう、気が狂っているのかもしれない、と思った。

おそらくは、昨夜、あまりのこころよさに、頭の中も心も灼き切れてしまったのだ。

アージュヴェダは、おそらく、昨夜もそうしながら果てて眠ったのであろうように、ひたすらに、ひたすらに身を動かした。

それでいて、じぶんの身の所在がわからず、宙に浮いているような感覚に吞まれているのか、理解することは困難だった。

触れあった箇所から、皮膚の表面の膜が溶け、互いに融合してゆく。あるいは、蒸発してゆく。

(俺の身は、とうに溶けてなくなっているのかも知れぬ)

そう感じて、何度か、閉じた目を開けようとした。

朦朧もろうつとした視界に、伏せた女の臉まふたの、震える睫まつげや、弧を描く眉、ゆたかに波打つ髪、投げ出された腕、細い指、などといったものが、断片的に映った。

それらの像は、白く燐光りんこうを放つように透明感のある肌の、ひとりの女の姿の形を結んでは、又ほどけるように融けた。

そのたび、アージュヴェダの臉まふたの奥に、昨夜の物語の中の、あの山中の焚き火たの炎がちらちらと踊った。

踊る炎の熱は、自分の軀からだの内側から発しているように感じられた。

炎の傍そばで、我が身に絡みつく腕、そして、腕の中の子ども。

孤独へんそくな子ども。

それは、自分だ。

ふたたび目を閉じ、また目を開けるたびに、アージュヴェダは、不思議な確信を持ちはじめた。

(俺は、このひとを、知っている)

否いな、目を開けるたびごとに、女の姿が変貌へんぼうしてきたのかもしれない——アージュ

ヴェダの、封じられていた記憶の中の姿に。

記憶の奥底から突如として蘇^{よみがえ}ってきた、その姿、その声、この匂い、この温かさ！

ちようど、その時、

女^{まふた}が瞼^{まぶた}を開けた。ゆつくりと開いた。

天窓^{てんまど}から滑^{すべ}り込んできていた朝日^{あさひ}の一閃^{いっせん}が、女^{ひとみ}の眸^{ひとみ}に注^つがれ、その表面^{すべ}を滑^{すべ}っていった。

眸^{ひとみ}は、黄金色^{こがねいろ}に輝^ひいた。その輝^ひきは、砂紋^{さもん}のように波打^なち、渦卷^{うずま}いた。

アージュヴェダは、そのさざめく輝^ひきに吸^ひい寄せられ、魅^み入^いられ、目を離^{はな}せなくなつた。

そのリズム、その輝^ひきを茫^{ぼう}然^{ぜん}と見^みつめ続^{つづ}けていることは、ここちよかつた。

だが、やがて、さざめきを産^うんだ朝日^{あさひ}の光^{ひかり}よりも、はるかに強い力^{ちから}が、眸^{ひとみ}の奥^{おく}から不意^{ふい}

に立ち上^あがつたかと思^{おも}うと、一瞬^{いつしゅん}で竜卷^{りゅうがん}きのように彼^{かれ}を絡^{から}めとり、縛^{しば}つた。

アージュヴェダは、女^{ひとみ}を抱^{かか}きしめた格好^{かくこう}のまま、ぴたりと身動^{みどう}きがとれなくなつた。そ

うしながらも、女^{ひとみ}の眸^{ひとみ}から目を離^{はな}すことができないのだつた。

(なにがおこつたのだ)

石^{いし}のように動^{うご}かない自分の腕^{うで}に、彼^{かれ}は驚^{おど}き、焦^{あせ}つた。

女の眸ひとみは、いまや、朝日の輝きを映して輝いているのではなく、その奥底からみずから強い光を発していた。

アージュヴェダの胸に畏怖いふの感情が起こった。そうしながらも、魅惑されつづけていた。

(これは)

(人ではないもの)

——精霊せいれい、だ

(俺は十一夜のあいだ、精霊せいれいのものがたりを聞いていたのか)

アージュヴェダの脳裏のうりに、十一夜中聞いていた物語の映像が、一斉に立ち上がった。それらは、まばゆい光のようだった。

その背後に、影。

十一の夜の間、刻々と生長していった、あの影——。

すべてのものがたりは、精霊せいれいの語りだったのだ。

(精霊せいれいが、わたしの魂たましいを奪おうとしていたのか)

(花嫁はなよめはどこへ。花嫁など、もとからいなかったのか)

めまぐるしく自問する若者に、女が答えた。

(おまえさまのところにくるはずだった花嫁の魂は、わたしが喰らうてやったさ。だって、これは、わたしとおまえさまの婚札だもの)

女の声は、若者の鼓膜を震わせることなく、頭の芯に直接届くようにして響いた。それは、「声」ではないのかもしれない。だが、そう思うと、最初の夜から彼は、女の

「声」など聞かされてはいなかったようでもあった。

(花嫁の、魂を、喰った——？　そして今、俺の魂をも、喰おうとしているのか)

アージュヴェダに答えるように、女がわらった——いや、わらったかのような振動が、彼の頭蓋を震わせた。

(かわいらしや。どれほど美味だろうねえ、おまえさまの魂は。赤子の頃より純粋に、孤独の痛みををたくわえつつけた、おまえさまの魂は。そうとも、十一夜の語りのあいだ、おまえさまの心がゆらめき動くのを、手にとるように感じながら、わたしは喰らいつきたかったともさ！　おまえさまの魂にね)

(——ふふ、だが、喰らうものか。喰らうものかや、)

(いとをしい、いとをしい、おまえさまの、)

(おまえさまの、魂を、)

精霊せいれいのことばは、その強い思惟しゐは、早鐘のような勢いで、アージュヴェダの頭蓋ずがいを締めあげた。

（俺をどうするのか、精霊せいれいよ？）

女の目の奥の光が、いつそう強くなった。

なおも女の眸ひとみに、視線を釘付けにされたまま、その臉まふたを涙が濡らすのを抑えることができなかった。

この十一夜のあいだに、自分は遙かな孤独へんごから救われるのでは、と、期待をふくらませていたのだ、ということに、その期待を覆くわされたいま、はじめて気付いたのだった。

精霊せいれいには、さぞ美味びみなことだろう。

求めて得られない夢に膨ふくれ上がっていた、この寂しい魂たましいは。

（喰くえ）

（喰くえ。おまえに呉くれてやる、俺の魂たましいなど。いつそ殺せ。この魂たましいも肉体も、おまえの牙きばに掛けるがいい）

アージュヴェダは、そう、思惟しゐをぶつけた。

女のかたちをした精霊せいれいは、このうえなく、やさしく微笑ほほえんだ、ように見えた。

(魂を喰え、とな？ 殺せ、とな？ ——あ、は、は)

(言うたである。これは婚禮じゃ。人間どうしの契りなど遥かにかなわぬ深い深い契りじゃ、おまえさまはたつたいま、その契りの歎びに魂を浸していたではないか)

(そうとも、喰うてなるかや、いとをしい、おまえさまの魂じやもの。

おまえさまが目も見えぬ赤子だった頃から、夜毎添い続け、人の世の愛にも憎にも縁なきようにと、わたしが大切に護つてきた、このわたしの——おまえさまの魂じや。喰うてなるものか、)

(いま、)

(ただ、このとき、)

(このほんの刹那、あいまみえ、まじわらんことを、)

(この腕におまえさまのたましいを擁かんことを、)

(わたしは、願うて、願うて——来ただけじやもの)

若者の胸の奥底、心臓の芯のあたりに、抉られるような激痛がはしった。

ああ、やはり、魂は胸に心臓に宿るのだ、などと、ふしぎと冷静に若者は思い、つぎの

瞬間、恐るべき激痛が快美な感覚となつてほどけ、ひろがるのを感じた。

まばゆい光が、彼の視野を覆った。目も顔も頭も、指先爪先までも、光の渦に巻き込まれ、声にならない叫びが迸った。

アージュヴェダの意識の糸は、そこで、ふつりと絶えた。

祭司が、包の中でひとり倒れてゐる若者を見つけたのは、すでに陽が傾きかけた頃だった。

十一夜ののちは、花嫁と花婿はしばらく包の中に籠るのが常だったが、あまりに長く、また静まり返った様子に、心配して見に来た祭司は、その様子を見て驚いた。

額に香油を滴らせると、やっとアージュヴェダは目を開いた。

「花嫁はどうした」

祭司さいしの問いに、彼は弱々しい声で、精霊せいれいが化けたものでした、と、答えた。

「そうか。それはたいへんなことじゃった。影かげの刻こくまでに婚礼かがおわらんかったから、精霊せいれいがでてきおったのか……」

アージュヴェダは、横たわったまま幽かすかに首を振り、あれは、さいしよから精霊せいれいだったのです、と、唇だけを動かした。声はかすれて十分に出なかった。

「なんと。じゃがのう、こうして、おまえさんの魂たましいがとられてしまわなかったのは、よかったことじゃ。精霊せいれいに魂たましいを喰くわれていたなら、いまごろその四肢ししは土塊つちくれに変わりはてておったじゃろう」

祭司さいしが言うと、アージュヴェダは両手で顔を覆おおった。

（いいえ、いいえ。わたしの魂は、もはやここにはないのです。わたしは——この世ならぬものと、契ちぎってしまった）

心配する祭司さいしをよそに、彼はひとしきり、嗚咽おえつした。

彼は、それからほかの娘と結婚することは、なかった。

そうして、ある早い秋、東から流れてきた僧に誘われ、その僧に徒ついて集落を出て行っ

たということだった。

アージュヴェダの、その後の消息を知る者はいない。
ただ、十と一の物語が残されたのみである。

大地を行き交うのは、

ちぎれ飛ぶ翼のような雲や、

乾いた熱砂風、刻々と姿を変える陽の影、

陽炎、渡り鳥、隊商の列、といったものたち。

そして、生あるものたちの、あまたの記憶、あまたの言葉。

いつとは知れぬ時の彼方より訪れ来た昔語りも、

夢みられ続け、永劫に叶う日の訪れぬ想いも、

すべては砂塵のひとひらのごとく、

風にほどけ、無に帰する。

アージュヴェダという名を持つひとりの青年、

その願いも記憶も夢も、

彼の魂^{たましい}を欲したわたし、

この聖なるか邪なるか——それすらも、

一陣^{いちじん}の風に運び去られ、

かたちを失い、

ものがたりと云う、姿なき謡^{うた}として、

人の世に儚^{はかな}く幻^{まぼろし}をとどめるばかり——

作者あとがき その一

これは『ファンタジー』ではありません —— 寺内 美登里

物語を書いている、と告げると、まず大抵の場合は「どんなの書いているの？」と、聞かれる。聞いてもらえるのはありがたいんだけど、どんなの、と説明しようとするの難しいので、こちらは、「あーう」と口ごもる。口ごもりつつも、「えっと、まあ、カテゴリーとしては童話なのかな、でも、大人にも読めるというか、大人にこそ読んでほしいというか……」などと冷や汗をかきつつ説明し、「まあ、ファンタジー？　みたいな」と、声まで小さくなってしまった。ファンタジー、という言葉を出すときは、かなり躊躇がある。でも、その言葉を出すと、相手が納得したような安心したような顔になるので、つい使ってしまう。でも、「自分はファンタジーを書いている」という意識はないんです。そもそも何だよファンタジーって。剣と魔法がでなければファンタジーだなんて思っている人がいるかどうかは知らないけれど、私は例えば「サザエさん」なんかも強力なファンタジー作品だと思うよ。強引な言い方をすれば、あらゆるフィクションはファンタジーじゃないかなあ。そう思うにつけ、自分が書いているような物語をわざわざ「ファンタジーである」と特定するのは面映いのです。ほんと、自分の書いてるものを説明しようと試みるよりも、とにかく読んでもらえれば早いんだと思う。でも、活字、それも物語みたいな「面倒くさい」メディアを、他人に読んでもらうのは至難のわざだから、読んでもらおうと思ったら何か説明はしなくちゃいけないし。いつも困ってます。本当は、私の頭の中にあるイメージのデータを、そのまま他人の脳で受け止めてもらえればいちばんいいのかもしれないけど、なーんて横着なことまで考えたりして。イメージを一旦、文字というメディアに変換するということの難しさと、そこにひそむ魔力に、わたしはこれからもずっとずっと、囚われ続けてゆくのでありましょう。我ながら御愁傷様であります。

さて、「十一夜物語」ですが、単純に作品を寄せ集めたものではなく『花嫁に語らせる』という入れ子構造と、アージュヴェダや花嫁などの登場人物を二人の作者が個々の作品内で動かすという仕掛けは、私達にとっては面白い冒険でした。読者の方々にとってもそうであれば幸甚です。また、舞台設定的には、包（ゲル）がでてきたりしてモンゴルを思わせますが、あくまで

架空の国ですし、精霊が人の魂を喰う、などの設定も架空のものです。モンゴルにはシャーマニズムが息づいていますし、シベリアでは『精霊には悪意あるものと善意のものがある』とされているようですが、それらの文化に大いなる関心と敬意を持ちつつ、無関係な民族文化をデッチ上げさせてもらいました。実際、花嫁の前に十一夜も目隠しして座らされ、喋っても触れてもならないなんて婚礼、普通なら誰も我慢しないだろうなあ（笑）……

寺内 美登里（てらうち みどり）

大阪生まれ。神戸大学教育学部美術学科にて立体造型を学ぶ。広告企画制作会社を経て、現在はフリーのライター＆イラストレーター。井上有子とは大学在学中に知り合う。最初に共同で作品制作したのは一九九二年、子どものための絵本「よいにおいのするなまえ」（未発表）。同時に二人で制作ユニット「厨画房」を発足。短編小説のコラボレーションは本作品が初めて。長野県在住。筆名は本名。 <http://www.alpha-net.ne.jp/users2/midee>

「有子のこころ」

彼女の会話スピードは速い。彼女と話するとき、「関西人にしては（テンポが）遅い」と言われる私は会話スピードを意識的に上げざるを得ない。それも、徐々に、では追い付かず、いきなりトップギアに入れないといけないのだ。そう、そして、速いだけではない。「ただ漫然とよく喋る人」というのは時々いるけれど、彼女の場合、いちいち技が華麗である。それは例えて言うならば、ジャズのプレーヤーのよう、と言うことができる。ひねる。かわす。反復する。裏返す。盛り上げる。落とす。会話それ自体をアートの域にまで高めて楽しんでいる在り方には、サックス一本抱えて飄々とライブハウスを渡り歩く天才プレーヤーの風格まで感じてしまうのだ。

しかし、うつとり聞き惚れてはいけけない。サックスはしばしば、「名刀・和正」に豹変、油断しているとばつさり斬られて、斬られたことにも気付かない、ということもあるのだ。恐ろしい。

「関西人にしては遅」く、「骨太な感受性（泣）」の私は、彼女とのつきあひも十数年目にして、ようようセッション可能になったところだ。そういうわけで、私達が喋っているところに他の人が割り込んで喋るのはかなり難しいかもしれない（ちよつと自慢している）。こう書くと、機関銃のように喋る関西のねーちゃんを想像される御仁もあるかもしれないが、彼女の場合それが決して品を損なうことにはなっていない。育ちのよさ、と言うことだなあ、などと感嘆しながら（実際、和服が似合う若奥様ふうルックスなんですこれが）彼女のプレイに今日もごくごくする私である（いゃん）。

この作品集に関しても、実際の執筆量を遥かに上回る膨大な会話が、有子とのあいだで交わされた。そして、それはとても楽しい行為であり、ときとして霊的ともいえる感動が与えられた。終章の構成があと一歩明確にならなくて悩んでいた私に、「すばーん」と明確な穴を穿つような示唆を与えてくれた彼女に感謝する。彼女は時として、軽い会話のうちで、私の潜在意識下にあるものまで引きずります。「この人ってサイキックだ」と、本気で思うのは、そんな瞬間なのである。

作者あとがきその二

だれのためでもない……とはいえ。—— 井上 有子

アージュヴェダに夜毎彩りを変える十一夜が訪れたように、作者にもいろいろな夜が通り過ぎて行く。とにかく自由時間は夜中だけなのだ。鶴が機織（はたおり）台にむかい、己の羽根を巻くかのような創作時間。（与平さん、けっして、のぞかないでくださいね。トンカラトンカラ……）などと、そこまで自己と対峙するような崇高な創作現場なのかというところよい疑問。

昼間の太陽に炙られたあぐく、宵の口ぱったり意識をなくして朝まで眠りこける夜もある。片や、丑三時ともいう時間に「こ

んな文章つくつたて、いつたいこれがなにになるんだ……」というような自分の創作そのものに対するそんな疑問が脳裏をかすめる夜もよくある話。で、そうなれば、もはや一気に「こんなことやってもムダムダ」的思考がぐるぐるめぐり、それはもう万博周回道路か、阪神高速環状線かという、エンドレス状態。もう、吞んで寝るしかないのである。とにかく一夜として同じ精神状態の夜はないのだ。誰だってきつとそうなんだけど。

物語という翼あるモノがわたしの上に降り立ち、翼を休めてくれるのは、なぜだか大抵車の運転中、それも渋滞の四二三号なのだ。

わたしはその「降り立った」モノを、そーつとそーつと、自分の頭の中に封じこめ夜中に解放する。事が上手く運べば、好きな音楽を聴きながらの原稿書きは、そのリズムにのってすすみ頭のなかは、心地よい楽曲でみたされていく。時には登場人物が自在勝手に動き出し、そのセリフの早さにキーボードを打つ指が追いつかないほどである。そのうちにあんなにも頭の中に響いていた音楽はいつしか時空の彼方へ運び去られたように、しーんとした静寂ととりかわっている。そんな静寂の中、頭の中に湧き上がるストーリーという名の旋律を忠実に文字に生まれかわらせるべく、ピアノを弾くようなめらかさで、わたしはキーボードをたたいていく。かなり、稀だが、そんな夜もある。

モノを書く上で、誰のためにでもなく、自分の中から湧き出してくるものを素直に紡ぎだしていこう。そんな感情が少し発露してきたことに自身が気がつきはじめたこの頃ではあるが、このようにしてでき上がったものを読んでくださった人が、その世界を少しでも共感してくれたとしたら、それはもう僥倖ともいえる喜びになるだろう。

井上 有子（いのうえ ゆうこ）

わたしの中にはひとりの刀剣がある。銘は和正。わたしの中の荒ぶるものが、それを抜けと静かに静かにささやいている。原稿書きの相棒は、Vaio PCG-887/BP。このハンサムなマシンの御機嫌に一喜一憂しながら、もはやこの関係は二年を数える。 <http://www.kisweb.ne.jp/personal/woochi> 大阪在住、筆名は本名

美登里のこと

人が生きていくことにそれぞれの運命を背負っているとして、美登里の持つ運気の強さをわたしはいつも実感する。加えて、迷いのなさ、軸足の確かさなどは、わたしには無い物で、少々妬ましくなるくらいだ。特に揺るぎ無い軸足、その確かさは、まるで「白鳥の湖」黒鳥オデールの32回転のグラン・フェッテ・アントールナン（片足だけを軸に連続32回転をこなす難技）をも軽くこなしてしまいそう。

かといって地に足のついた人、というありふれた表現は彼女にはあてはまらないのだ。その確固たる軸足（素材は斬鉄剣）をぐいぐい回転させ、つねにつねに前進、流動する人それが美登里である。その眼はいつも彼方をみている、なにかを探している、それなのに不安定感がない。その場その場をやつつけながら進むわたしとは根本がちがうのだ。人を一番わかりやすく語るには、容姿を語ればいいわけだが、美登里に関しては容姿すら、*midnight chameleon* という具合にその彩りを変えることのできる女である。あえて一言でいうなら、CUTEな女、そう、わたしにとって「妬ましくもある」女というのが一番あたっているかもしれない。だいたい、わたしが好きな洋服（かつ、わたしには似合わない服）が似合う女なのだ。「ああ、妬ましい（セクハラ？）」それはもはやヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトにそそがれるサリエリ的情念。しかし、美登里よ安心なさい、わたしは貴女を呪い殺したりはしないから。せいぜい、わたしにできることは、勝手に、真紅のきゆうとなキャミを買ってきて貴女を着せ替え人形にして遊ぶくらいだしね。（ふふふのふ……でも代金は請求するからね）

ふと、美登里がこの本の企画を打ち出した時のことを思い出す。

「二人で十話程度の短編集をだす、もちろん挿絵も書く」

当時としては、かなり難易度が高い作業と思われた。多少物を書くことは始めていたとしても、自分で本を作るなんてことは「夢のまた夢」であつたから。準備期間一年も、決して長いものではなく、むしろ短いといえた。わたしのなかには「本当にできるんだろうか？」という気持ちがいっつもあつた。この本をつくるにあたり色々な話し合いが電話・ファックス・電子メー

ルなど、あらゆる手段で持たれたが、彼女のレスポンスは常にわたしの死角へ死角へと放たれる。それを一つ一つ受け止めるのは、まさに「真剣」をつかった立ちまわりのごとくであるし、創作上、もしくは原稿を送りあう上で、様々に難しい問題も出てきたがあつたが、これらの作業の中に苦痛はなかつた。むしろ自分の中の何かが解き放たれる快感がそこにはあつた。

発案のあの時点で彼女の脳裏にはもう今のこのモノを創る喜びの情景が写しだされていたのだろうか。美登里の悠か彼方を俯瞰する視力にまたまた、じえらしーなのであつた。それにしても、今、作業の大部分を終えようとしているこの時、幾許かの寂しさがあるのはなぜなんだろうか。ねえ、美登里さん。

「これ、ぜひ読んで」と、一冊の本をその著者自身から渡されたとしよう。あなたならどう扱う？ 積ん読などはもつてのほかだが、読んでみるにもちよつとした作法があるのをご存じだろうか。

まず夜中に近所の神社に出かけよう。井戸があるならなお良し。井戸どころか近場に神社もないようなら、公園の水飲み場でもまあいいだろう。そこで百度水を浴び、体を清め、うちに帰ろう。帰り着いたら、白装束に身を固め、きちんと正座しておもむろに本を開き、物語にじっくり目を通そう。そうそう、間違つても、本屋で立ち読みしている時のように巻末の「解説」などから読んではいけない。最初から一ページ一ページ、開いていないページはないように、しっかりと着実に読み進めなくてはいけない。そして、感じたこと、気に入ったあるいは気になった表現、発見してしまった誤字脱字・表記の間違い（！）は傍らに用意したメモに書き込んでいこう。

この本「十一夜物語」は、筆者二人による自費出版本だ。著者達から渡されている読者も多いだろう。「ついつっかり解説から読んでしまっている」という人はここで巻頭に戻るように。一度は目を通した人も上の作法を守ってなどはないだろうかから、もう一度巻頭に戻るように。

…と作者の片割れが漏らした言葉をもとに「作法」を説いてみたが、本人たちが強制しているというわけでもない（当たり前だ）。実行は各読者の意思に任せよう（誰がやるかって？）。まあ、作法はともかく「真剣に読んでもらう」、それがこの本に限らず執筆者の第一の喜びであるのは間違いないことだろう。

さて、異世界譚である。ファンタジーと言ってもいいのかもしれない。もっとも「あとがき」などから伺われるように、作者たちには「ファンタジー」と称されることに多少の引っかかりもあるようだが。

しかし、同様にファンタジーと称される物語が溢れる昨今だが、近年のそれらはアニメ化・ゲーム化隆盛の影響もあってか、

どうも「明るく正しい」雰囲気を持ってしまっているように感じまいか。転換点は「ロードス島戦記」あたりだろうか。たしかにそれらの物語もファンタジーとしか称しようのないものではある。が、私としてはなにか違和感を感じずにはいられないのだ。なぜなら、本来ファンタジーとはどこか「不思議恐い」雰囲気を持っているべきものでないかと思うからである。そして、この本「十一夜物語」を読んで安心するのは、その「不思議恐さ」をしつかりと保持しているからである。

あえて分析するならば、この短編集には土台に共通する部分があつて、主要なキャラがなにかに変化（へんげ）したり、どこか異世界からの来訪者だったりする。つまり、異世界である劇中世界においてもさらに異質な存在として登場するということだ。その異質な存在ゆえの隔絶感によって、物語全体の筋立てに悲哀あるいはある種の物悲しさが加えられている、ということなのかなと思う。悲哀、物悲しさは、不思議恐さに通じるのではないだろうか。

ところで、「十一夜の語り」という体裁なのだから土台が共通しているのは当たり前だ、と読者諸氏は思われるかもしれない。しかし、なぜか「お話」が電子メールで手元に送り届けられるという形で制作進行度合を知らされ、あまつさえ「解説」などを依頼されてしまった立場で回想すると、当初は十の話をつなげた短編集を作ろうというシンプルな企画、であつたはずである。少なくとも私はそう思っていた。その理由の一つは、すでに作者たちは話を何編か個別に書きたためであり、それらにいくつかの新作を加えればすぐにも完成というような話だつたからである。もちろん、すでに存在していた短編は執筆時点では一冊にまとめられることを想定してはいなかったはずだ。

ところがそこに、若者の婚礼を巡る、いわば額縁にあたるストーリーの作成開始が伝えられてきたのである。オープニングの素朴な第一稿とともに。

実を言うと最初にその稿を読んだ時、私はどうもピンと来なかった。危惧すら覚えた記憶がある。なぜなら、企画以前に完成していたいくつかの短編は、それぞれに体裁も雰囲気も異なっていたからだ。そこに額縁の話が付いてしまうとそれらの差異を際立たせてしまうのではないか、無用の違和感を読者に感じさせてしまうのではないかと思つたのである。そもそも、額縁の初稿では主役に名前すらも与えられていなかったのだ。が、もちろん書くのは私ではない。「ほんの添え物になるのかな

それにこの程度の趣向なら好みの問題かな。」と好意的な読者を氣どつたものだった。

しかし、それはクリエーターたちを甘く見すぎていたことになる。本編の制作と並行して、細かった額縁にも裝飾が加えられ力強くなつていき、それにあわせて、中身の話にすら入れ替わりやリライトが行われ、ご存じの通り、最後の章にいたつては額縁と溶け合い融合することとなつていった。傍観者としては、その変容過程を「ほほう」と眺めるしかなかった。結局のところ、こちらの勝手な予想を裏切つて、額縁の話をつくり上げていくことで短編集でありながら全編を貫く柱を建立することに成功したのだな、と私は思う。物語の背景や雰囲気の多少の揺れは、結果として味わいを変えて飽きさせないための工夫になっているのは、ご覧になった通りだ。

さて、裏話から一気に冒頭に戻ろう。たわごとのような「読者の作法」だが全部がまったくの冗談というわけではない。

「感じたこと」は傍らに用意したメモに書き込んでいこう。」

とは、重要な作法だからだ。つまり、実際にメモするかはともかく、心にとめながら読んで感想をぜひ作者に伝えようということである。なぜなら、作者は、創作を終えリリースした後には読者の反応をじりじりと待っているしかない。そして反応は読者が発しなければ届かないものだからである。

伝えることはなんでもいい。しかし次の二点にだけは注意しよう。

まず、次のように考える人がいるかもしれない。「あまり気に入らなかつただけで、悪いから黙つてた方がいいよね？」。いやいや、マイナスの評価を伝えるのもけつこう。遠慮することはない。しかしただ単に「ダメ」とだけ伝えるのは、「悪い」のではなく「意味がない」。なぜ「ダメ」と感じたのか、その理由を添えよう。単に自分の感性にあわないのか、物語の構成に矛盾があるのか、文章がわかりにくいのか…。そういった分析があれば、マイナスの評価でも作者にとって貴重なフィードバックである。…もちろん、多くの賞賛が作者にとって一番うれしいことではあろうが。

そして、「作者の身の回りを物語化している」と単純な前提をもつて読むこと、ないしは「この主人公はご自分をモデルにしているの？」と尋ねること。よくある感想だそうだが、これはヤバも極まっているというものだ。一般論として、創作者諸氏

の中から湧き出る物語に自身の内面がまったく反映されていないわけではないし、ヒントは身の回りから取ることも多からう。しかし、物語全体にいちいち自分をどっぷりつぎ込んでいては、創作など続けられるものではない。また、実際に物語を織り成すという作業は、単なるメモのような着想をいかに加工し形にしていくかという、時には着想を得る以上に困難な過程を経なくてはならない。最終的には着想が原形をとどめていないことも珍しくはないし、むしろ日常をいかに越えるかにこそ、創造者の苦心がすぎ込まれるものだ。そこに先のような感想を示すのは、すばらしい料理を賞味した時に「素材がおいしいから美味しい」と評することに等しい。たとえ褒めるつもりであつたとしても、それを真つ先に出した時点で料理人の腕を軽視していることになりかねない。素材に感動するのも「有り」だが、素材を選択する料理人の眼、そして素材の持ち味を引き出す料理人の腕、そういったものを忘れないようにしよう。作者の想像力と同時にその具現化力も鑑賞しようではないか。

とまあ、二点だけといいながらなかなか難しい気もするが、それ以外のことは率直に作者に伝えるべきである。いや、「作者に感想を伝えること」、それが本当の「正しい読者の作法」というべきであらう。

なぜか解説などを依頼されてしまったものの、本編の読み解きなどはもつとも無意味と考えた。本編を読み終わった後にある読者諸氏の胸中にある思い、それが一番の「物語の解説」だからだ。

もつとも、意識せずに読んだ後では、その思いはあいまいなものでしかないかもしれない。それを確かなものにするために、ぜひアージュヴェダの心の旅に二度目の同行をしていただきたい。その際に、ここで周辺事情や背景をつづったことが、読者諸氏が思いを確認し、かつ違った読み方も楽しむための一助となれば幸いだ。

さあ、メモ帳を用意して、もう一度この本のページをめくろう。

